山梨県埋蔵文化財センター調査報告第50集

桜井畑遺跡（B地区）

山梨県立青少年会館建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1989.3

山梨県教育委員会
山梨県県民生活局

桜井畑遺跡（Ｂ地区）

山梨県立青少年会館建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

１９８９．３

山梨県教育委員会
山梨県県民生活局

序

本報告書は、山梨県立青少年会館建設に先立ち発掘調査された山梨県甲府市川田町517番地に所在する桜井畑遺跡（B地区）について、その成果をまとめたものであります。

甲府市東部地域にあたる本遺跡付近は、古墳時代後期以降に甲府盆地における中枢地の1つとなった春日居町付近を中心に形成された勢力と、深く係りをもった地域であります。北縁の山麓に造られた多数の積石塚や、春日居町寺本廃寺などに瓦を供給した川田瓦窯址の存在などにそうした関係が認められると思います。律令時代は『和名抄』所載の山梨郡表門郷に属していたと考えられている地域で、最近、大坪遺跡の十郎川地点において『甲斐国山梨郡表門』と刻まれた土器の出土によって、改めてその位置が確認された訳ですが、先に述べましたいわゆる春日居勢力との係りが、巨麻郡と山梨郡とを分ける際この地を山梨郡に所属させる一つの要因となったと考えるものであります。

桜井畑遺跡（B地区）は、平等川と大山沢川とによって造られた扇状地ないし沖積地の微高地上に位置しております。調査の結果、古墳時代3軒、奈良時代2軒、平安時代12軒、不明1軒、合計18軒の竪穴住居址などが検出され、また土師器、須恵器、灰釉陶器などが多数出土し、当時の生活を知る上で重要な資料が得られました。さらに検出された竪穴住居址は、隣接する桜井畑遺跡A地区のそれと形態に大きな違いが認められ、同一郷内での様相の違いの一端が明らかとなりました。この相違が瓦などの生産とどのように係るのかは今後の検討課題でありますが、注目すべき成果であったと思います。

以上、本報告書の概要を述べましたが、古代史研究の一資料として多くの方々にご利用いただければ幸甚です。

末筆ながら、種々ご協力を賜った関係機関各位、地元の方々並びに直接調査、整理に従事していただいた方々に厚くお礼申しあげます。

1989年3月

山梨県埋蔵文化財センター
所長　磯　貝　正　義

例　言

1．本書は、甲府市川田町517番地に所在する桜井畑遺跡（B地区）の発掘調査報告書である。

2．本調査は、山梨県立青少年会館建設事業に伴う事前調査であり、山梨県教育委員会が県民生活局の依頼を受けて実施した。

3．発掘調査、整理作業および報告書の執筆、作成は山梨県埋蔵文化財センターが行い、同機関の坂本美夫、中山誠二が担当した。

4．写真撮影は遺構を中山誠二、遺物は塚原明生（日本写真家協会会員）が行なった。

5．出土品の石材鑑定は（財）帝京大学山梨文化財研究所地質・火山灰研究室長河西学氏に依頼した。

6．本報告書にかかる出土品及び記録図面、写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

7．発掘調査から報告書作成に至るまでの間、下記の機関、方々からご協力、ご教示をいただいた。記して感謝申し上げたい。

甲府市教育委員会、県勤労青年センター、東勝寺、川田地区自治会

凡　例

1．図版の縮尺は原則として遺構を1/60、遺物は1/3としたが、大きさにより任意の縮尺としたものもある。

2．図版中のスクリーン・トーンは次のような内容を示している。

焼土（焼土ブロックないし焼土混入土）

カマド石組、支脚、礫

地山

須恵器

灰釉陶器

赤彩土器

黒色土器

目　　次

序

例言

凡例

第１章　調査の実施と経過…… 1

　第１節　調査に至るまで…… 1

　　１．発掘調査事務経過…… 1

　　２．調査及び整理組織…… 1

　第２節　調査の実施…… 1

　　１．調査方法と発掘区の設定…… 1

　　２．調査経過…… 2

　　３．標準土層…… 2

第２章　遺跡周辺地域の状況…… 3

　第１節　遺跡の位置と地理的環境…… 3

　　１．位置…… 3

　　２．地理的環境…… 3

　第２節　遺跡周辺の歴史的環境…… 3

第３章　遺構と遺物…… 8

　第１節　住居址と出土遺物…… 8

　第２節　各時代の概要と集落の変遷……14

　　１．各時代の概要……14

　　２．集落の変遷……15

　　３．出土土器について……20

おわりに……25

挿図目次

第１図　標準土層図
第２図　遺跡位置図
第３図　遺跡周辺地形図
第４図　桜井畑遺跡（Ｂ地区）全体図
第５図　集落変遷図(1)
第６図　〃　(2)
第７図　〃　(3)
第８図　〃　(4)
第９図　桜井畑遺跡（Ｂ地区）出土土器編年図(1)
第10図　〃　(2)
第11図　１号住居址・カマド平面図
第12図　２・３・４号住居址・カマド平面図
第13図　５号住居址・カマド平面図
第14図　６号住居址平面図
第15図　７号住居址・カマド平面図
第16図　８号住居址・カマド平面図
第17図　９号住居址・カマド平面図
第18図　10号住居址・カマド平面図
第19図　11号住居址平面図
第20図　12号住居址・カマド平面図
第21図　13号住居址・カマド平面図
第22図　14号住居址・カマド平面図
第23図　15号住居址・カマド平面図
第24図　16・18・17号住居址平面図
第25図　１・２号柱穴列、ピット群平面図
第26図　１号住居址出土遺物(1)
第27図　〃　(2)
第28図　〃　(3)
第29図　１号住居址(4)、２号住居址出土遺物
第30図　３号住居址、４号住居址出土遺物
第31図　５号住居址出土遺物
第32図　６号住居址出土遺物
第33図　７号住居址出土遺物(1)
第34図　〃　(2)
第35図　〃　(3)
第36図　〃　(4)
第37図　〃　(5)
第38図　８号住居址出土遺物
第39図　９号住居址出土遺物(1)
第40図　〃　(2)
第41図　〃　(3)
第42図　10号住居址出土遺物(1)
第43図　〃　(2)
第44図　12号住居址出土遺物
第45図　13号住居址出土遺物(1)
第46図　〃　(2)
第47図　〃　(3)
第48図　〃　(4)
第49図　14号住居址出土遺物
第50図　15号住居址出土遺物(1)
第51図　〃　(2)
第52図　〃　(3)
第53図　〃　(4)
第54図　〃　(5)
第55図　〃　(6)
第56図　〃　(7)
第57図　16号住居址出土遺物(1)
第58図　〃　(2)
第59図　17号住居址、18号住居址出土遺物

表　目　次

第１表　住居址一覧表　　第２表　遺物観察表

図　版　目　次

図版１　遺跡全景、１号住居址及びカマド・遺物出土状況
図版２　２号住居址、３号住居址、３号住居址カマド、４号住居址
図版３　５号住居址及びカマド、６号住居址、７号住居址及びカマド
図版４　８号住居址及びカマド、９号住居址及びカマド、10号住居址及びカマド
図版５　12号住居址及びカマド、13号住居址及びカマド・遺物出土状況、14号住居址及びカマド
図版６　15号住居址及びカマド、16・17・18号住居址及び16号住居址遺物出土状況、１号柱穴列、２号柱穴列
図版７　１号住居址出土遺物、３号住居址出土遺物、４号住居址出土遺物
図版８　５号住居址出土遺物、６号住居址出土遺物
図版９　７号住居址出土遺物、８号住居址出土遺物、９号住居址出土遺物
図版10　10号住居址出土遺物、12号住居址出土遺物、13号住居址出土遺物(1)
図版11　13号住居址出土遺物(2)、14号住居址出土遺物、15号住居址出土遺物(1)
図版12　15住居址出土遺物(2)、16号住居址出土遺物、18号住居址出土遺物

第１章　調査の実施と経過

第１節　調査に至るまで

１．発掘事務経過

昭和62年７月14・15日　試掘調査実施、主管課と協議

昭和63年４月21日　文化庁に発掘通知を提出する。

昭和63年５月２日　調査開始

昭和63年７月14日　調査終了

なお、調査終了後に甲府警察署へ発見通知を提出する。

２．調査及び整理組織

調 査 主 体　山梨県教育委員会

調査担当者　山梨県埋蔵文化財センター

副主査・文化財主事　坂本美夫

文化財主事　中山誠二

調　査　員　高野玄明

作業員・整理員

宇野文子　宇野和子　斉藤多喜子　長田明美　矢崎ます子　武井美知子　平沢節子
平沢則子　倉田勝子　池谷富士子　出月遊亀子　長田久美子　宮川　東　岸本美苗
金井いく代　渡辺百合子　福田妙子　名取つる子　内藤真千子　松野和美　後藤良美
蒔田淳子　志村文子　河野泰子　秋山よしみ　斉藤つね子　江川勝子　出月満寿江
出月多津子　渡辺礼子　小林としみ　小林美津代　長田和子　矢崎喜美江　長田可祝
矢崎米子　矢崎悦子　荒川奈津江　角田寛子　長尾美子　田中弘子　中林初子
藤巻君江　一の瀬よし子　宮沢直子　石川　操　弦間千鶴　遠藤映子　和田宏美

第２節　調査の実施

１．調査方法と発掘区の設定

本遺跡は、昭和62年の試掘により竪穴住居址の存在が確認されていたために、グリッド方式で全面調査を行なうこととした。

調査区の設定は、テニスコートを正方形に取り囲むフェンスに沿って方眼を組み５ｍのグリッドを設定した。南西隅を基点とし、そこから東に向ってＡ～Ｇ、北に向って１～７までの記号を付加した。

2．調査経過

Ｂ地区の調査は、排土を調査区内で処理するため、半分ほどに分けて実施した。まず、Ｄグリッドより東側の調査を行ない、その後、反対側である西側の調査を実施した。なお、フェンス際は使用中の給湯管、排水管などが埋設されているため、調査部分より外した。

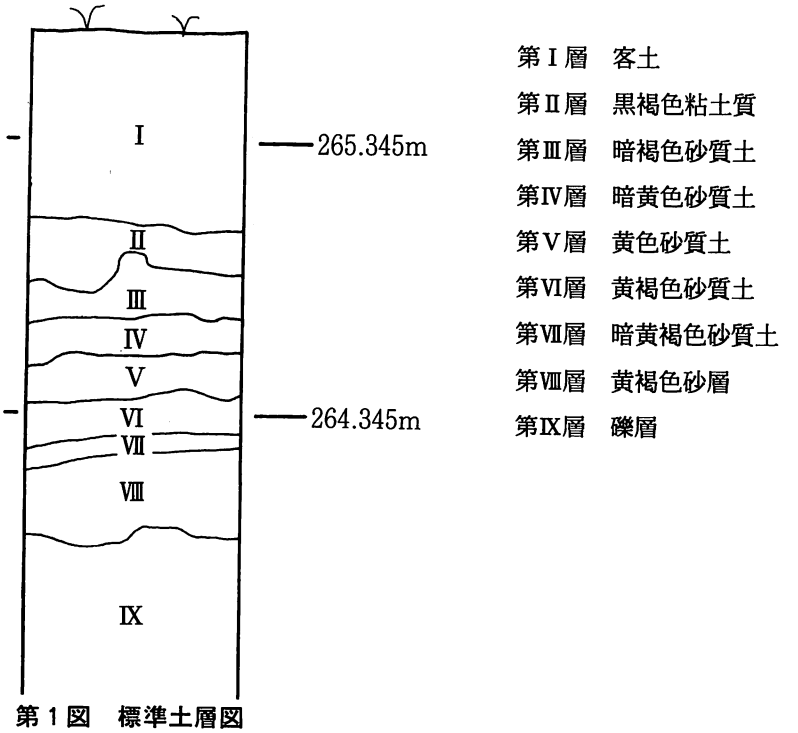
3．標準土層

桜井畑遺跡Ｂ地区では、前述のグリッドのうち、Ｇ―１グリッド内において深掘りを実施して、基準層序を確認した。この地点は調査地域の南東隅にあたる。なお、層序作成面は、同グリッド東の面である。

本地域の北縁山麓部分は現在でも採石が盛んに行なわれ、山腹に拳～人頭大の礫が筋状に露呈し、付近には多数の積石塚も存在する。山裾あたりも礫が顕著に見られる地域である。しかし、本遺跡の立地する微高地上付近は、一変して礫のほとんど見られない地域であり、かつ土の粘性が強い地域でもある。

第１図に層序を示したが、第Ⅰ層はテニスコートの用材とした客土の互層であり、それ以下が安定した土層であった。第Ⅱ層は（黒褐色粘質土）が20～25㎝、第Ⅲ層（暗褐色砂質土）が10～15㎝、第Ⅳ層（暗黄色砂質土）が10～15㎝、第Ⅴ層（黄色砂質土）が15㎝前後、第Ⅵ層（黄褐色砂質土）が10～20㎝、第Ⅶ層（暗黄褐色砂質土）が５～10㎝、第Ⅷ層（黄褐色砂層）が25～30㎝、第Ⅸ層（礫層）が地山となる。

遺構は、このうちの第Ⅱ・第Ⅲ層に掘り込まれている。



第１図　標準土層図

第２章　遺跡周辺地域の状況

第１節　遺跡の位置と地理的環境

１．位置

桜井畑遺跡（Ｂ地区）の所在する甲府市は、甲府盆地の中央やや北寄りに位置する。東を牧丘町、山梨市、春日居町、石和町、南を中道町、豊富村、玉穂町、西を昭和町、竜王町、敷島町、須玉町、北を長野県南佐久郡川上村と接する東西19㎞、南北33㎞ほどの、南北に細長い市域をもつ。

本遺跡は、この南北市域のほぼ中央の東端近く、川田町に位置する。

ＪＲ中央線石和駅より西南西方向約０．９㎞の距離にある。

２．地理的環境

甲府市は前述のように南北に細長い市域をもつが、ほぼ中央付近の南側と北側とで地勢の上に大きな違いを見せる。北側は湯村～岩窪町～東光寺町～川田町の付近からは山間地的様相を強め、秩父山系へと続く。南側は一変して緩傾斜の平地となり、南側へ次第に低下して行く。南側の緩傾斜面は、市域を流れる諸河川が形成した複合扇状地と沖積地である。

甲府市内には、市域の西側を北西から南東方向に流れる鎌田川、荒川、中央付近をほぼ南北に流れる相川、濁川、東側を北東から南西方向に流れる平等川、笛吹川などがある。これら諸河川は市域の南端付近で次々と合流し、さらに南下する。甲府市域は、これら諸河川の流域にある。

遺跡の所在する川田町付近の甲府市東部地域は、北に秩父山系の前衛である八人山・大蔵経寺山が連なり、その前面は大山沢川と平等川によって造られた沖積地が広がる。遺跡は平等川右岸の北東から南西方向に形成された微高地上、標高265ｍ付近に立地する。

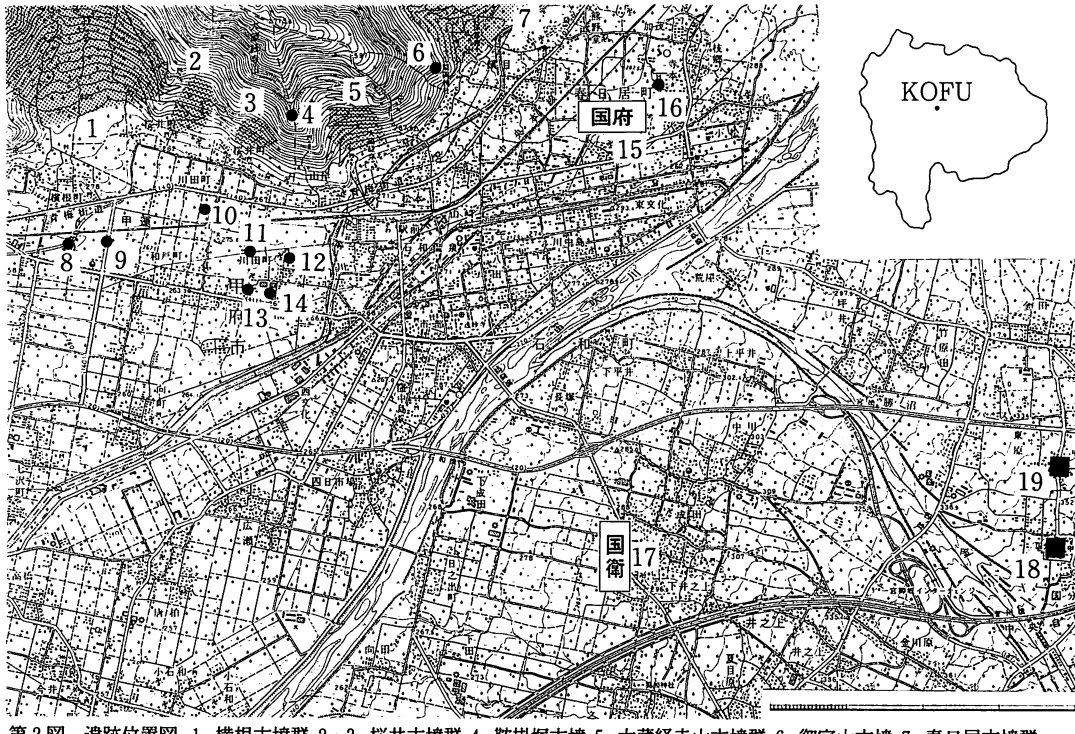
第２節　遺跡周辺の歴史的環境

遺跡の所在する甲府市東部地域は、これまでに縄文時代から中近世に至る50ケ所近い遺跡の存在が確認され、中でも古墳時代以降に顕著な存在を見せる地域である。

縄文時代の遺跡は、これまで本遺跡より北側の山裾あたりに点々と分布することが捉えられていた。今回、本遺跡（Ａ・Ｂ地区）からも縄文土器片が出土しており、今までより低地の地域に広がっていることが確認された。

弥生時代の遺跡の分布は明確でなかったが、桜井町上土器地内および本遺跡から、弥生土器片が出土しており、本遺跡付近に集落址などの存在する可能性が強い。

古墳時代になると、古墳の築造が活発となる。ただし、その時期は盆地北縁地域の勢力が次



第２図　遺跡位置図　１．横根古墳群 ２・３．桜井古墳群 ４．鞍掛塚古墳 ５．大蔵経寺山古墳群 ６．御室山古墳 ７．春日居古墳群
８．大坪遺跡(刻書土器出土地点) ９．大坪遺跡 10．上土器遺跡 11．川田瓦窯跡 12．川田館 13．桜井畑遺跡(A・C地区)
14．桜井畑遺跡(Ｂ地区) 15．春日居町国府 16．寺本廃寺跡 17．御坂町国衙 18．甲斐国分寺跡 19．甲斐国分尼寺跡

第に力を増してくる６世紀以降のことと考えられている。古墳の分布は、北側山麓部の古墳群のほかに沖積地の標高260m付近に琵琶塚古墳、太神さん古墳の存在が知られるが、その内容に今一つ明確性を欠く。したがって現時点ではもっぱら北側の山麓を中心にみられるものと捉えておきたい。この北側に見られる古墳は、横根山田古墳と数基の古墳を除き、他はすべて積石塚古墳である点に特徴がある。この積石塚群は西より横根古墳群、桜井古墳群、鞍掛塚古墳、大蔵経寺山古墳群などがある。規模的には大型墳の見られない古墳群であるが、総数は164基を数え、県内屈指の数である。この積石塚の初現は５世紀末ころの時期をめぐって現在検討中で、未だ明確な結論は出されていない。しかし、大蔵経寺山古墳群中の無名墳、横根古墳群第39号墳の副葬品などから、遅くとも６世紀初めころまでには古墳が造られていたことが明らかとなっている。その終焉も明確でない。ただ古墳周辺から採集された遺物の中に８世紀代と考えられるものが見られ、追葬ないし供養祭祀の行なわれていたことが窺える。

本地域の古墳は、規模の上からすればそれほど大きなものはない。しかし後述するように瓦生産と供給先との関係からすれば、春日居町地域と深い係りを持つ地域と考えられ、春日居古墳群との関係を考えざるを得ない。春日居町地域は春日居古墳群に見られる副葬品や規模、寺本廃寺などの新たな権威的存在から、一つの大勢力を形成し、大化改新に「春日居勢力の評」として建評されたと考えられ、本地域もその領域内に入るものといえよう。

集落については古墳～平安時代を含めて概観する。これら時期の集落は古墳の立地とは対称的で、ほとんどが山麓前面に広がる平坦地上に位置し、極めて密度の高い分布を示している。

この地域で特に注目されるものは川田瓦窯址、上土器遺跡、大坪遺跡など生産遺跡が幾つか見られる点である。川田瓦窯址は寺本廃寺、上土器遺跡は甲斐国分寺の供給瓦生産址、大坪遺跡は土器生産址と考えられている。

奈良時代は国司を頂点とする山梨郡、八代郡、巨麻郡、都留郡の4郡制による支配体制が確立する。本地域は『和名抄』に見られる山梨郡表門郷の遺称とされる和戸の地名があり、本遺跡より1.2㎞西方の大坪遺跡から「甲斐国山梨郡表門」の刻書土器が出土して、本地域が山梨郡地域で、しかも表門郷に属す地域であったことが確認されている。

中～近世の遺跡は、古墳時代以来の範囲をこえ、山裾から沖積地の広い地域に密に分布が見られるようになる。中でも本遺跡に近接する川田町字御所の二之宮神社付近の地は、甲斐武田氏が守護大名から戦国大名に変貌する時期の拠点となった川田館の存在が想定されている。館は永正16年（1519）、古府中の躑躅ケ崎の地に移されるが、その移転の原因に水害説と体制強化移転説とが見られ、未だ結着していない。隣接する桜井畑A地区の調査で、中～近世の溝が検出され、16世紀後半～17世紀の時期と推定される陶器、土器類の存在が確認され、移転の原因を考える上で参考となろう。

主要遺跡との位置関係は、北西350ｍに川田瓦窯址、同730ｍに上土器遺跡、西1.2㎞に大坪遺跡、北250ｍに川田館跡推定地、北東2.9㎞に寺本廃寺、国府、南5.7㎞に国分寺、南東3.1㎞に国衙などの遺跡や遺称が知られている。また西2.9㎞に『古事記』『日本書紀』に表われる酒折宮に想定されている「酒折宮」が鎮座していることから、本地域は「春日居勢力」の一翼として、古代史に大きな比重をもった地域といえよう。

参考文献

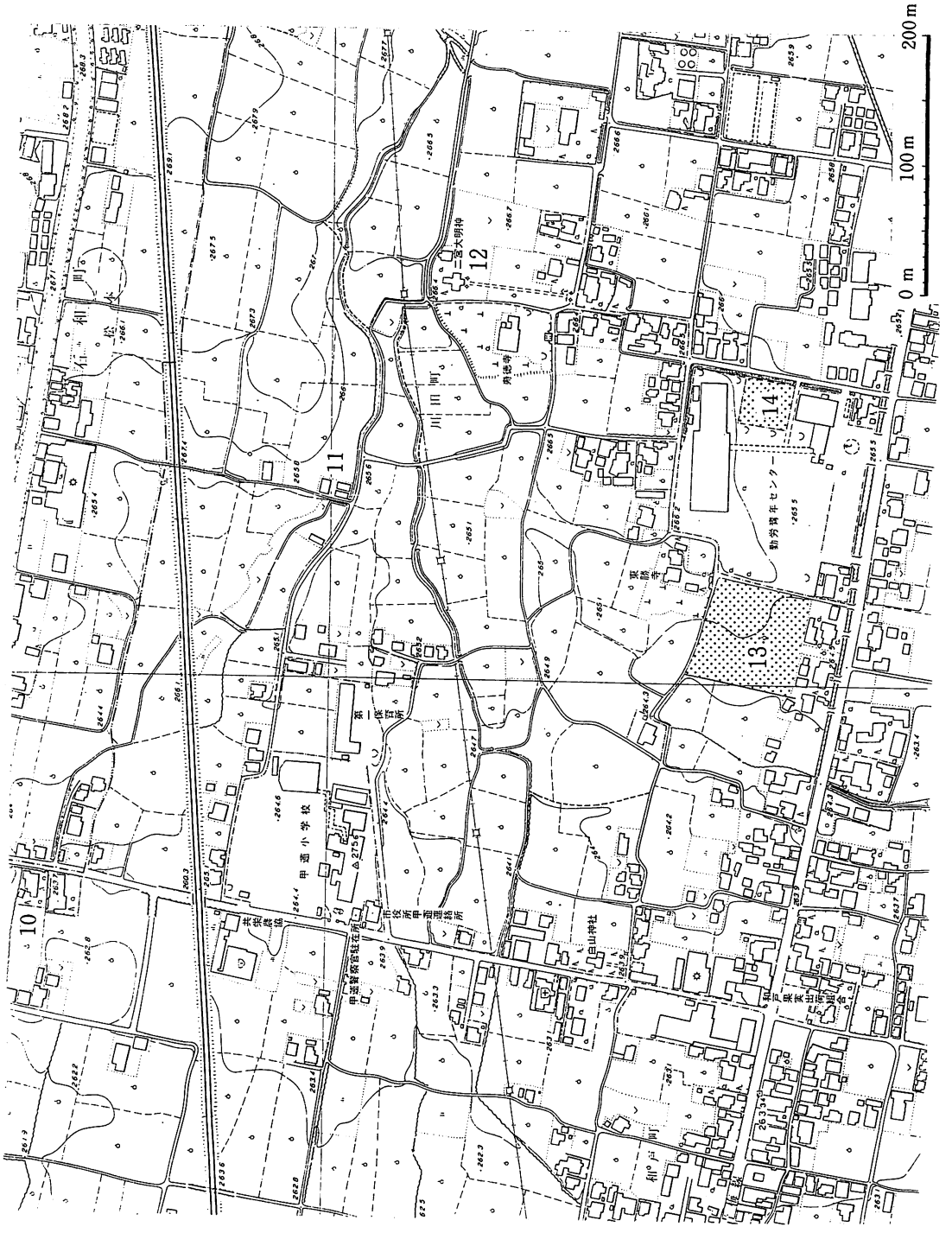
甲府市教育委員会　『甲府市の遺跡』　1986

磯貝正義・飯田文弥　『山梨県の歴史』　1973

磯貝正義　「古代の甲府―青沼・表門二郷を中心として」『甲府市史研究』創刊号　1984

坂本美夫　「甲斐の郡（評）郷制」『研究紀要』1　山梨県立考古博物館、山梨県埋蔵文化財センター　1984

萩原三雄　「川田館」『日本城郭大系』8　長野・山梨　1980



13　桜井畑遺跡(A・C地区)

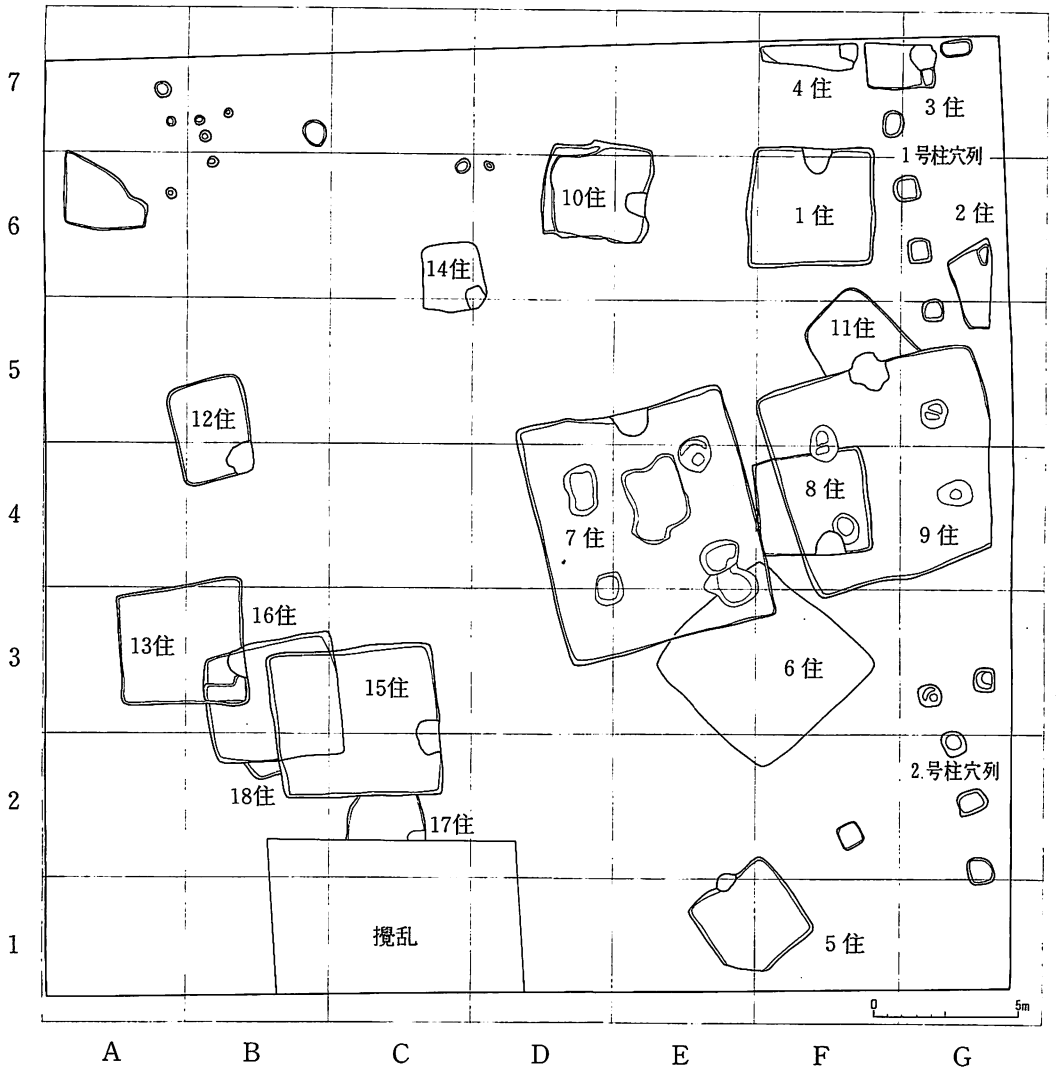
14　桜井畑遺跡(B地区)

10　上土器遺跡

11　川田瓦窯跡

12　川田館跡

第3図　遺跡周辺地形図



第4図　桜井畑遺跡（B地区）全体図

第３章　遺構と遺物

第１節　住居址と出土遺物

本遺跡における住居址と出土遺物との概略について記述していくが、その中で住居址の帰属時期については、これまでに確立している本県の土師器編年を次の順序に組立て使用した。

坂本美夫・末木　健　1984　『古墳時代土器の研究』山梨県　古墳時代土器研究会

坂本美夫・末木　健・堀内　真　1983　『奈良平安時代土器の諸問題―甲斐地域』　神奈川考古第14号

坂本美夫　1986　『古代末期～中世における在地系土器の諸問題』甲斐国 神奈川考古第21号

特に、この中で奈良・平安時代の土器編年と古代末期の土器編年の接続については重複部分があるため、奈良・平安時代XII期に古代末Ｉ期（いずれも10世紀第４四半世紀）を接続させ、呼称を古代末Ｉ期をXII期として、以下XX期までに区分した。

なお、住居址の詳しい時期区分については、本文末に一覧表として示した。

１号住居址（第11・26～29図、図版１・７）

Ｆ―６グリッドに位置する。重複遺構はない。

住居址の平面形態は方形を呈する。規模は東西４.３ｍ、南北４.１ｍを測る。主軸方向はＮ―20°―Ｅを指す。

床は、平坦で堅緻な貼り床である。壁はほぼ垂直で、壁高は約20cmを測る。柱穴は不明。

カマドは、北壁のほぼ中央に設置されている。両袖は粘土によって構築され、左右の袖の間隔は約55cmを測る。カマド中央底部に焼土が薄く堆積し、その上に石の支脚が据えられている。なお、右袖の正面に甕が倒置された形で検出され、袖の構築材の一部とも考えられるが、左袖部分で明確にならず、不明である。掘り方は、80×90cmの不整形を呈し、床面より10cmほど掘り込まれる。

遺物は、カマド周辺に多く、土師器は坏、椀、鉢、甕、須恵器では坏などが見られる。また南東コーナー付近に、むしろ編み用の錘と考えられる小礫が14点集中して検出された。遺物のほとんどは古墳時代後期（鬼高期）末のものである。

２号住居址（第12・29図、図版２）

Ｇ―５・６グリッドに位置する。

遺構の大半が調査区外に延び、炉、カマドなど未確認の部分が多く、住居址であるか否か明確でないが、北壁に深さ10cmほどのやや浅い掘り込みが見られることなどから、住居址と考えた。方形ないし隅丸方形状のプランが推定される。

遺物は少なく、土師器の坏、坏蓋、須恵器の坏などが見られる。奈良～平安時代のものであ.

るが、本遺構の所属時期は明確にできない。

3号住居址（第12・30図、図版2・7）

F・G—7グリッドに位置する。

住居址の北側部分3分の1ほどは、さらに調査区外に延びる。住居址の平面形態は方形を呈すると推定される。主軸はN—104°—Eを指す。

床面は南西コーナー付近が削平されているが、他は堅い貼り床が検出された。壁は残存している部分で10cmほどと浅い。規模は南辺で2.4mほどの、小形の住居址である。

カマドは東壁に設置されている。両袖は粘土によって構築されているが、袖の両先端に石を据えて補強している。左右の袖の間隔は、約60cmを測る。燃焼部に焼土ブロック混入土が厚さ20cmほどに堆積し、掘り方は同部直下が最も深い。

カマド脇の南東コーナに70×50cm深さ10cmほどの長方形の掘り込みが見られ、貯蔵穴的性格が考えられる。

遺物はカマド内や、貯蔵穴と考えられる掘り込みなどから出土した。土師器の坏、蓋坏、甕などがあり、平安時代前半ころのものである。

4号住居址（第12・30図、図版2・7）

F—7グリッドに位置する。

住居址の大半が調査区北側に延びるため、全体の形態、規模は不明であるが、コーナー部分の形態から方形ないし長方形と考えられる。南壁の一辺が3.4mを測る。

床は貼床で硬い。壁の残りは悪く、最深部で10cmほどを測る。カマド周辺の床面に、炭化材やカーボンが薄く堆積する。

カマドは東壁の中央やや南寄りに設置され、粘土で構築されている。右袖部のみの検出で、袖間の間隔は不明である。焼土ブロック混入土が、厚さ5cmほど堆積している。

遺物はカマド内などから出土している。土師器の坏、皿、鉢、甕などがあり、平安時代中頃のものと考えられる。

5号住居址（第13・31図、図版3・8）

F・G—1・2グリッドに位置する。重複遺構はない。

住居址の南西コーナー部分が調査区域外に延びる。住居址の形態は、方形を呈する。規模は東西3.36m、南北3.3mを測る。主軸方向はN—26°—Wを指す。

床は平坦であるが、砂質の土のためやや軟弱な状態である。壁は垂直に近く、残存高30cm前後を測る。柱穴は不明。

カマドは北壁の中央に設置されている。袖部は検出されず、不整円形の掘り込みに焼土ブロックが厚さ10cmほどに堆積している。

遺物はカマド内から出土したもの以外は、細片で、土師器では坏、鉢、高坏、甕、須恵器で

は坏などが見られる。古墳時代後期頃のものである。なお、第31図８は明らかに混入品である。

６号住居址（第14・32図、図版３・８）

Ｅ・Ｆ－２・３・４グリッドに位置する。北壁部分を７号住居址に切られ、北西コーナー付近を後世の建物のコンクリート基礎などで壊されている。

住居址の平面形態は、７号住居址の南東コーナー付近の柱穴に接したピットを貯蔵穴と見て、長方形の形態と考えられる。規模は東西5.44ｍ、南北6.3ｍを測る。南壁の中央付近に焼土が少量認められたが、カマドの焼土とはみられず、カマドの位置は不明である。長軸方向はＮ－60°－Ｗである。

壁は残存状況が悪く、最も深い部分で10cmほどが確認された程度であった。

床は東側半分ほどに硬い貼床が認められた。しかし西側では明瞭でなく、軟弱な状況である。北東隅に直径1.35ｍ、深さ55cmほどの貯蔵穴と考えられる施設が見られる。

遺物は東、南壁際に多く見られた。土師器の坏、鉢、椀、高坏？、甕などである。古墳時代後期後半頃の時期と考えられる。

７号住居址（第15・33～37図、図版３・９）

Ｄ・Ｅ・Ｆ－３・４・５グリッドに位置する。東壁の一部に本住居址より新しい時期の８号住居址が近接し、南壁が６号住居址を切っている。

住居址の平面形態は、長方形を呈す。規模は東西8.1ｍ、南北7.48ｍを測る大形の住居址である。主軸方向はＮ－５°－Ｅを測る。

床は、中央付近に東西２ｍ、南北2.5ｍ、深さ10cm前後の不整形の窪みが見られる以外、ほぼ平坦に造られている。硬く締められた貼床である。直径50～90cm、深さ60cm前後の柱穴が４本確認された。このうちピット１を除き直径20cm前後の根石が確認された。壁は垂直に近く、残存高20cm前後を測る。

カマドは、北壁の中央に設置されている。粘土で構築され、両袖部がわずかに残る。両袖間は60cmほどを測る。燃焼部中央やや左袖寄りに、石の支脚が据えられている。焼土ブロックが厚さ５cm前後に堆積している。

遺物は、カマドを中心に全面からまんべんなく発見されている。土師器では、坏、蓋坏、鉢、高坏、甕、須恵器では坏、蓋坏、甕などがある。特に蓋坏は螺線状暗文を持つもので、県内では初見かと考えられる。なお須恵器坏20は混入品と考えられる。奈良時代終末頃の時期と考えられる。土器以外では砥石が１点出土している。

８号住居址（第16・38図、図版４・９）

Ｅ・Ｆ－４グリッドに位置する。９号住居址を切って構築している。

住居址の平面形態は、長方形を呈する。規模は東西3.83ｍ、南北3.53ｍを測る。主軸方向はＮ－12°－Ｗを指す。

床は、ほぼ平坦な貼床である。壁はやや傾斜をもって立ちあがり、残存高15㎝ほどを測る。

カマドは、南壁の中央やや東寄りに設置されている。粘土で構築され、左袖部のみ残存する。両袖間は60㎝ほどと推定される。焼土ブロックが3㎝程堆積する。

遺物はカマド内、カマド前面付近に集中する。土師器では、坏、鉢、甕、羽釜、須恵器では蓋坏、甕などがある。平安時代後半頃と考えられる。

9号住居址（第17・39～41図、図版4・9）

F・G—3・4・5グリッドに位置する。南東コーナー部分が調査区域外に延びる。また西壁を8号住居址に切られ、11号住居址を切っている。

住居址の平面形態は、方形を呈する。規模は東西7.78m、南北7.6mを測る。主軸方向はN—2°—Wを測る。

床は、ほぼ平坦な貼床で、硬い。壁は垂直に近く、残存高は20㎝ほどを測る。直径50～65㎝、深さ70㎝前後の柱穴が4ヶ所確認され、ピット4には偏平な根石が認められた。

カマドは北壁のほぼ中央に設置されている。粘土で構築され、袖部が残る。左右の袖間は70㎝ほどを測る。焼土ブロックが3㎝程に堆積している。

遺物は、カマド内に大形の破片が多く、その他では細片が多い。土師器では埦、鉢、甕、手捏土器、須恵器では坏、長頸壷、甕、それに置カマドなどがある。奈良時代後半頃と考えられる。

10号住居址（第18・42～43図、図版4・10）

D・E—6・7グリッドに位置する。重複遺構はない。

本住居址は、北壁と西壁部に拡張ないし建替えの痕跡があり、カマドにもその形跡が認められる。住居址の平面形態は長方形を呈する。規模は東西3.65m、南北3.35mを測る。主軸方向はN—112°—Eを指す。

床は貼床で、ほぼ平坦である。北壁と西壁に幅30㎝ほどの段をもつ。壁はやや傾斜をもって立ち上がり、残存高20㎝前後を測る。

カマドは東壁の中央やや南寄りに設置されている。粘土で構築されているが、左袖部のみ残存する。袖間は60㎝弱と推定される。なお焼土が2ケ所見られ、堆積状況からすればカマド奥のものが廃棄された後に、燃焼部が設けられたものと考えられる。

遺物は土師器の坏、高台坏、蓋坏、皿、鉢、甕、須恵器の坏、蓋坏、灰釉陶器などがあり、土師器の坏には2つの形態が見られる。平安時代前半頃のものと考えられる。

11号住居址（第19図、図版4）

F・G—5・6グリッドに位置する。南側を9号住居址に切られている。

住居址の平面形態は長方形を呈するものと考えられる。規模は東西3.7m、南北4.4m（東壁現存部）を測る。長軸方向はN—28°—Wを指す。

北東コーナー寄りに地床炉が見られる。

遺物はほとんど検出されなかった。古墳時代前期以前と考えられる。

12号住居址（第20・44図、図版５・10）

Ａ・Ｂ－４・５グリッドに位置する。重複遺構はない。

住居址の平面形態は、長方形を呈する。東西2.65ｍ、南北3.48ｍを測る。主軸方向はＮ－91°－Ｅを指す。

床はカマド周辺で硬く締められた貼床が認められ、それ以外は軟弱であった。壁はやや傾斜をもって立ち上がり、残存高は10cm前後を測る。

カマドは東壁の南壁近くに設置されている。粘土で構築され、両袖が残存する。袖間隔は50cmほどを測る。焼土ブロック混入土が、厚さ５cmほど堆積する。

遺物はカマド周辺に多く見られる。土師器の坏、皿、甕などが見られ、平安時代前半頃と考えられる。

13号住居址（第21・45～48図、図版５・10・11）

Ａ・Ｂ－３・４グリッドに位置する。16号住居址と重複するが、本住居が16号住居址を切っている。

住居址の平面形態は、長方形を呈する。規模は東西4.36ｍ、南北3.97ｍを測る。主軸方向はＮ－112°－Ｅを指す。

床は平坦で、硬く締められた貼床である。カマド脇の南東コーナーに深さ15cmほどのＬ字状のピットが見られ、貯蔵穴と考えられる。壁はほぼ垂直で、残存高30cm前後を測る。

カマドは東壁の中央やや南寄りに設置されている。粘土で構築され、左袖部のみ残存する。袖間は55cmほどと推定される。焼土ブロック混入土が、厚さ３cmほどに堆積している。

遺物は四壁の壁際や、貯蔵穴内から集中して出土した。土師器の坏、高台坏、鉢、蓋坏、皿、甕、須恵器の坏、蓋坏などが見られ、平安時代後半頃と考えられる。

14号住居址（第22・49図、図版５・11）

Ｃ・Ｄ－５・６グリッドに位置する。重複遺構はない。検出状況が悪く、カマドと平面形態とがかろうじて確認されたにすぎない。

住居址の平面形態は、方形を呈する。規模は東西2.17ｍ、南北2.32ｍを測る。主軸方向はＳ－97°－Ｅを指す。

床はカマド周辺において、貼床が確認されたにすぎない。カマドは、南東コーナー付近に設置されている。粘土で構築され、右袖部が残存する。焼土ブロック混入土が厚さ４cm前後に堆積している。この焼土の分布状況から、袖間隔は50cmほどであったと考えられる。

遺物は平安時代後期の土師器坏、皿、甕などがカマド周辺から出土している。

15号住居址（第23・50～56図、図版６・11・12）

Ｂ・Ｃ―２・３グリッドに位置する。16・17・18号住居址と重複する。16号住居址を切り、17号住居址によって切られている。18号住居址との切合い関係は、北西コーナー付近からカーボン、焼土混入土が厚く流れ込んだような状況で床面に達し、18号住居址に切られている可能性もあるが、切合関係は明確でない。遺物から判断すれば本住居址が、18号住居址より新しいものと考えられる。

住居址の平面形態は、長方形を呈する。規模は東西5.75ｍ、南北5.02ｍを測る。主軸方向はＮ―113°―Ｅを指す。

床は貼床で、住居址北側は西に向って緩やかに傾斜する。カマド前面にカーボンが薄く広がっている。壁はやや傾斜して立ち上がり、残存高は30cmほどである。

カマドは東壁の中央やや南側に設置され、粘土で構築されている。両袖間は70cmほどである。焼土ブロックが５cmほどに堆積し、右の支脚が２本設置されている。

遺物はカマド付近を中心に分布が見られた。土師器では坏、鉢、高台坏、蓋坏、皿、甕、須恵器では坏、蓋坏、壷、甕、灰釉陶器では皿、壷などがある。平安時代前半頃のものと考えられる。

16号住居址（第24・57～58図、図版６・12）

Ｂ・Ｃ―２・３グリッドに位置する。13・15・18号住居址と重複する。13・15号住居址に切られ、18号住居址との関係は遺物の比較から、本住居址が切る。

住居址の平面形態は長方形を呈する。規模は東西4.72ｍ、南北4.15ｍを測る。長軸方向はＮ―97°―Ｅを指す。

床は貼床で、ほぼ平坦である。壁はほぼ垂直に近く、残存高35cmほどを測る。

北壁の13号住居址付近に若干焼土部分が認められたが、カマドとして判断できない。

遺物は北壁際から多く確認された。土師器の坏、皿、鉢、甕、須恵器の坏、灰釉浄瓶？などであり、平安時代前半頃のものと考えられる。

17号住居址（第24・59図、図版６）

Ｂ・Ｃ―２グリッドに位置する。15号住居と重複する。15号住居址の上部をわずかに切って構築している。南側は後世のコンクリート基礎で切られている。また輪郭部分が判明した程度の残りであった。南北2.7ｍほどを測り、小形の住居址と考えられる。

東壁のコンクリート基礎に切られた付近に焼土ブロック、カーボン混入土が見られ、カマドと考えられるが、詳細は不明である。

遺物は土師器の坏などがあり、平安時代前半頃と考えられる。

18号住居址（第24・59図、図版６・12）

Ｂ・Ｃ―２・３グリッドに位置する。13・15・16号住居址と重複する。いずれもの住居址に

よって切られる。

住居址の平面形態は、15、16号住居址との重複部分が多く、かつ切られているために明確でない。このため北西コーナーの一部分が残存していたにすぎず、その規模は全く不明であるが、16号住居址より外側に広がることはなく、3.5m前後が推定される。

カマドは明確でない。

遺物は南西コーナー付近、カーボン、焼土ブロック混入土中から出土した。土師器の坏、甕などがあり、平安時代前半頃と考えられる。

1号柱穴列（第25図、図版6）

F・G—5・6・7グリッドに位置する。

方形ないし楕円形の柱穴と考えられるピット群で西側4個が1列に連なる。一辺40cm前後ないし、長径50cm前後で、深さ15cm前後である。

2号柱穴列（第25図、図版6）

F・G—1・2・3グリッドに位置する。

方形ないし長方形の柱穴と考えられるピット群で東側5個が列状に連なる。一辺45cm前後、深さ15cm前後である。古墳時代後期後半と考えられる土師器片が出土した。

ピット群（第25図）

A・B—6・7グリッドに位置する。

直径10～45cm、深さ10cm前後のピット群であるが、建物址と考えられる配列は見られないようである。またA—6グリッドで竪穴状遺構が確認されたが、住居址形態とは異なるようである。

第2節　各時代の概要と集落の変遷

1　各時代の概要

本遺跡からは18軒の住居址が検出されたが、帰属時期の明確にならない2号住居址を除き、各時代の遺構の概要について触れておく。

古墳時代

1・5・6・11号住居址の4軒がある。おおよそ3期に渡って変遷するようであるが、11号住居址が5世紀前半以前であるのに対し、それ以外は7世紀代と時間的に大きな隔たりがある。住居址の規模は、7世紀代において大小が顕著のようである。

奈良時代

7・9号住居址の2軒がある。奈良時代と考えられる遺物は他の住居址では認められず、調査区内における同時期の遺構はこの2軒のみである。しかし、住居址の規模はいずれも本遺跡内で1、2番

を占めるばかりでなく、本県の該期の遺跡から検出されたものに比べても大規模なもので、大形住居の例といえよう。なお、時期的には奈良時代でも後半の時期といえる。

平安時代

3・4・8・10・12・13・14・15・16・17・18号住居址の合計11軒である。本時期は調査区域の全面に住居址の広がりが認められる点と、13・15・16・18号住居址のように何回も重複している点、それに住居址の規模に大小の違いの存在が顕著になる点などが特徴といえよう。なお、時期的には平安時代の中頃を前後する時期に限定される。

遺物では16号住居址から仏器である浄瓶の口縁部ではないかと考えられる破片が出土しており注目される。

第1表　住居址一覧表

住居址番号	時　　期	住居址番号	時　　期
1	古墳時代末2～末3（7世紀第2～第3）	10	奈良・平安時代X～XI(10世紀第2～第3)
2	不明	11	古墳時代中期前半以前(5世紀前半以前)
3	奈良・平安時代X（10世紀第2）	12	奈良・平安時代XI（10世紀第3）
4	〃　X～XI(10世紀第2～第3)	13	〃　X～XI(10世紀第2～第3)
5	古墳時代末期2～3（7世紀第2～第3）	14	〃　XII～XIII(10世紀第4)
6	〃　末期1～2（7世紀第1～第2）	15	〃　X～XI(10世紀第2～第3)
7	奈良・平安時代IV期（8世紀第4）	16	〃　X～XI(10世紀第2～第3)
8	〃　XII～XIII(10世紀第4)	17	〃　XII（10世紀第4）
9	〃　III～IV(8世紀第3～第4)	18	〃　X～XI(10世紀第2～第3)

（世紀の後の数字は四半世紀を表わす）

2　集落の変遷

古墳時代から平安時代の遺構の存在が明らかとなったが、その存在は間断なく継続したものでなく、古墳時代中期前半～後期前半、奈良時代前半、平安時代前半代頃といった時期が大きく欠落している。この欠落は集落の集散に関係するものと考えられ、本調査地区に続く周囲の地域に存在しているものと考えられる。この様な状況にあるが、もう少し時期別の集落の変遷などについて考えてみたい。

古墳時代中期前半（5世紀前半）

11号住居址のみである。調査地区の北東部に位置する。未だカマドの出現しない時期である。

古墳時代後期後半（7世紀前半）

6号住居址のみである。規模は一辺6 m前後で、隣接地の御坂町二之宮遺跡などの例と比べると、中ぐらいに置かれるものである。調査区の東側部分に位置する。

古墳時代後期後半（7世紀後半）

1・5住居址の2軒である。遺物からすれば、重複する時期が非常に大きい住居である。立地する場所は、前の時期と同様の東側部分であるが、南と北との両極に分れる違いがある。また、規模は前の時期に比べ小さくなる。

奈良時代後半（8世紀後半）

7・9号住居址である。両住居址は1m前後の間隔をもち、主軸を同一方向に向けて造られており、同時存在はやや無理がある。遺物からすれば9号住居址の後に7号住居址が建てられたと考えられ、時間的差が認められる。8世紀後半を通じて1軒のみの存在となり、9→7号に移り住んだものと捉えることができよう。9号住居址は7.78×7.6m、7号住居址は8.1×7.48mの規模であり、ほとんど同一の大きさである。この規模を二の宮遺跡のものと比べると、二の宮遺跡450軒中（古墳～平安時代）で最大クラスに入る11軒の住居址とほぼ同じ大きさである。二の宮遺跡では住居址の分布域を4ブロックで捉えたが、11軒はこれらの中心的存在といえる。これからすれば、9・7号住居址は単独の様相を見せるが、ブロックの中心的存在として位置づけられるものといえよう。

平安時代

本時期の住居址は、出土遺物などからすれば、別添の土器編年表のごとく一定の時期に明確な一線を引けない部分もある。従って集落の変遷を考える上で、多少の誤差も生じてくるが、おおよそ次の3時期に分けて検討していくことにする。

平安時代前半（10世紀第2～3四半世紀）

3・10・18号住居址の3軒である。調査区の北側において3・10号住居址が近接し、1つのグループと考えることもできる。1グループとすれば大・小の組合せと認められ、1戸の家族を推定することもできよう。住居址の規模は奈良時代の7・9号住居址に比べ、著しい縮少を見せる。

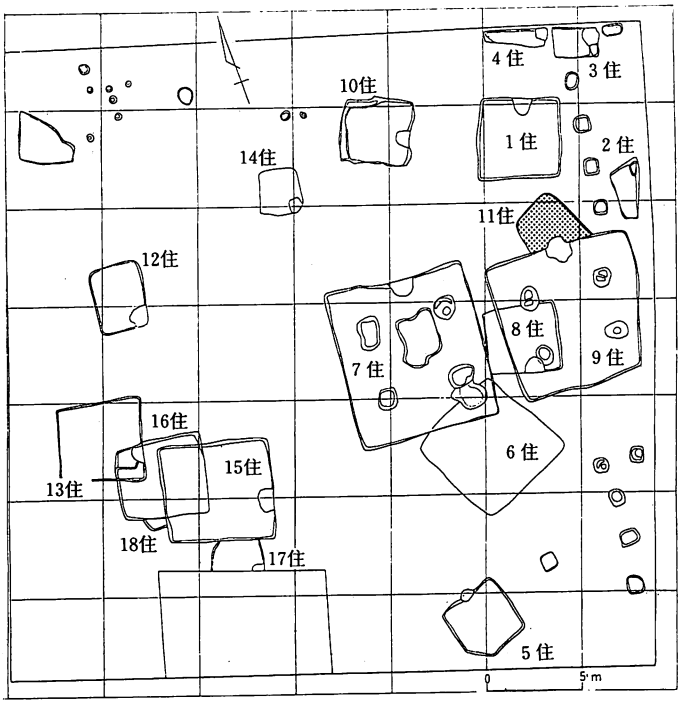
平安時代前半（10世紀第3四半世紀）

4・12・13・15・16号住居址の5軒である。住居址の規模は幾分大きくなるようであるが、大・小の差は前代に比べ大きくなるように見られる。その中で重複の著しい13・15・16号住居址は規模が大きく、中心的存在といえよう。しかし、これら3軒の住居址の同時存在は考えられず、基本的には4軒ぐらいの存在となる。そして13・15・16号住居址を中心として周辺に小規模な住居址の配置が考えられる。

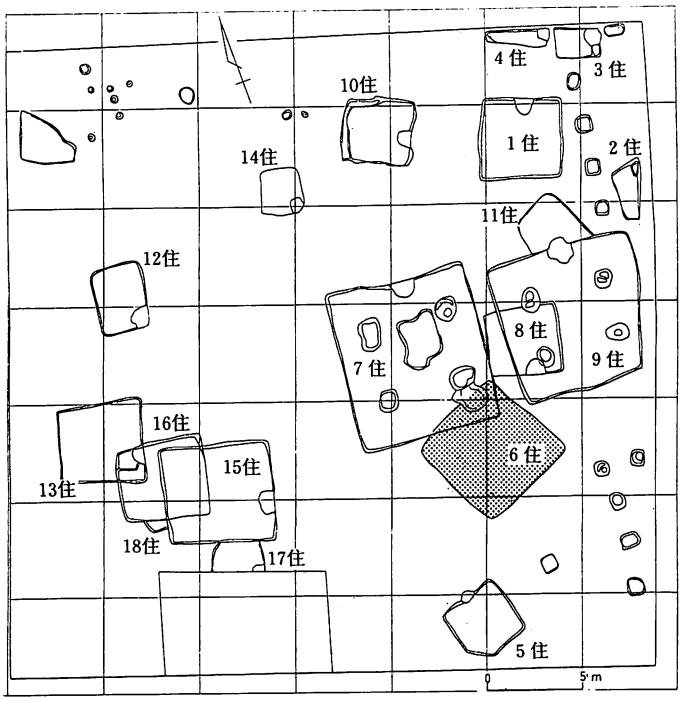
平安時代前半（10世紀第4四半世紀）

8・14・17号住居址の3軒である。住居址の規模は前の時期に引き続き、小規模の傾向が窺える。その配置の状況も8号住居址を中心にその周辺に小規模のものが配置される状況が捉えられるようである。

以上、集落の変遷を概観してきたが、奈良時代後半期の住居址の規模は特異な存在であり、郷ないし村における有力な戸主の住居と考えられる。平安時代では、大小の住居址の配置などから、そのエリアが一つの戸を形成し、規模の大きな住居址を戸主に想定することもできる。

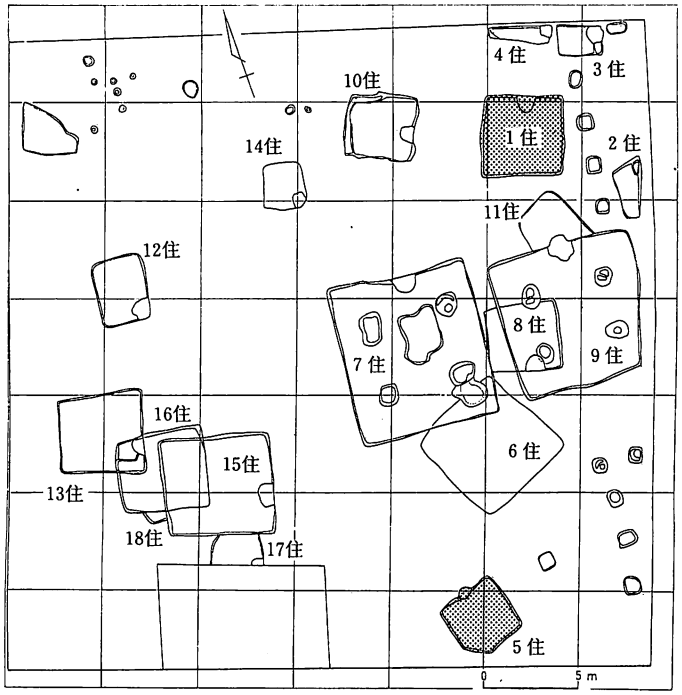


Ⅰ期　古墳時代中期前半
（5世紀前半）

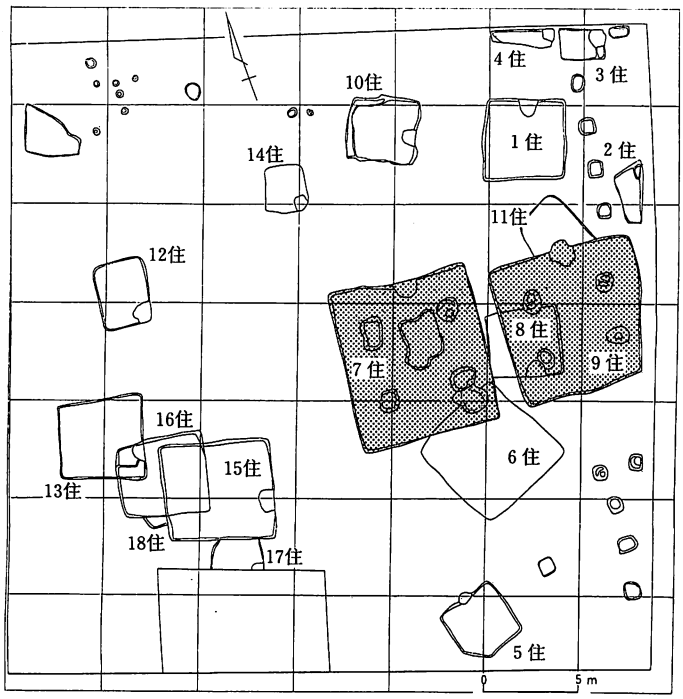


Ⅱ期　古墳時代後期後半
（7世紀前半）

第5図　集落変遷図(1)

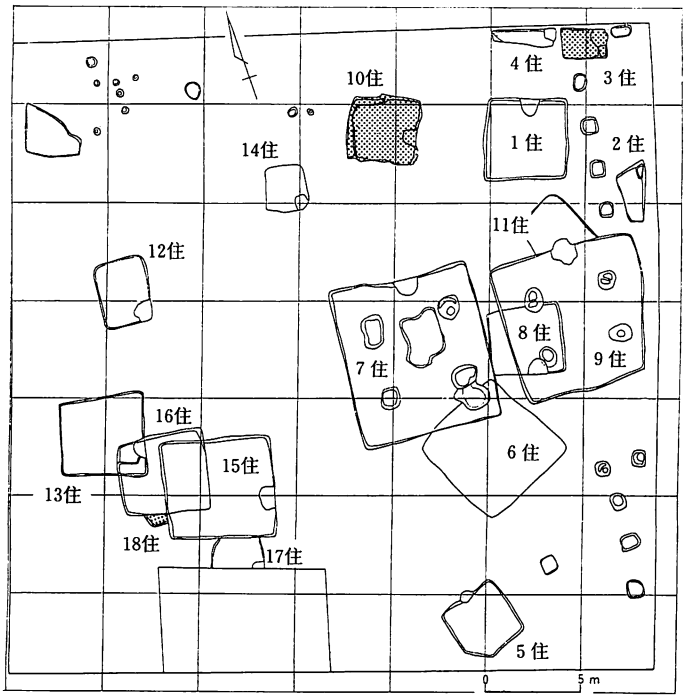


Ⅲ期　古墳時代後期後半
（7世紀後半）

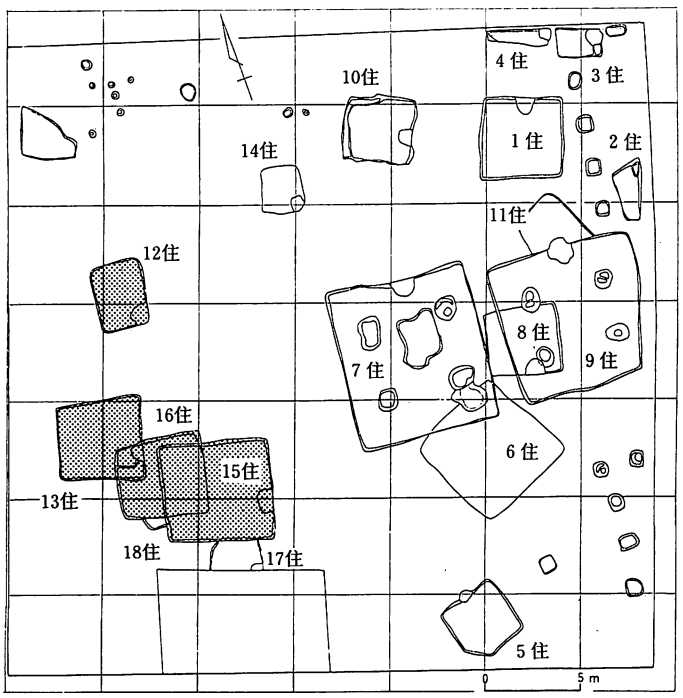


Ⅳ期　奈良時代後半
（8世紀後半）

第6図　集落変遷図(2)

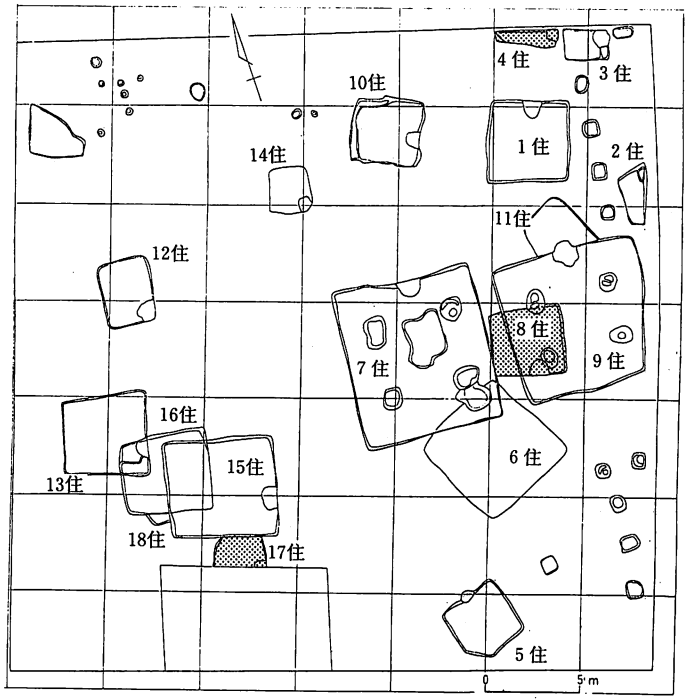


V期　平安時代前半
（10世紀前半）



VI期　平安時代前半
（10世紀中頃）

第７図　集落変遷図(3)



Ⅶ期　平安時代前半
（10世紀末）

第８図　集落変遷図(4)

本調査区の奈良・平安時代の住居址の平面形態は全て方形に近い長方形であるのに対し、西方130ｍに所在するＡ地区の住居址形態は、ことごとく短辺に対して長辺が短辺の２倍近い形態の長方形であり、違いが大きい。Ａ地点では瓦などの出土が多く、工房関係の集落と考えることもでき、その職種による違いが考えられる。また、既に御野国加毛郡半布里の戸籍の分布を通じて、居住する人の属するグループによってエリアの違うことが指摘されているが、桜井畑遺跡の所属する表門郷においても、そのような状況を想定することができ、郷の構造の一端を捉えれるものとも考えられる。

３　出土土器について

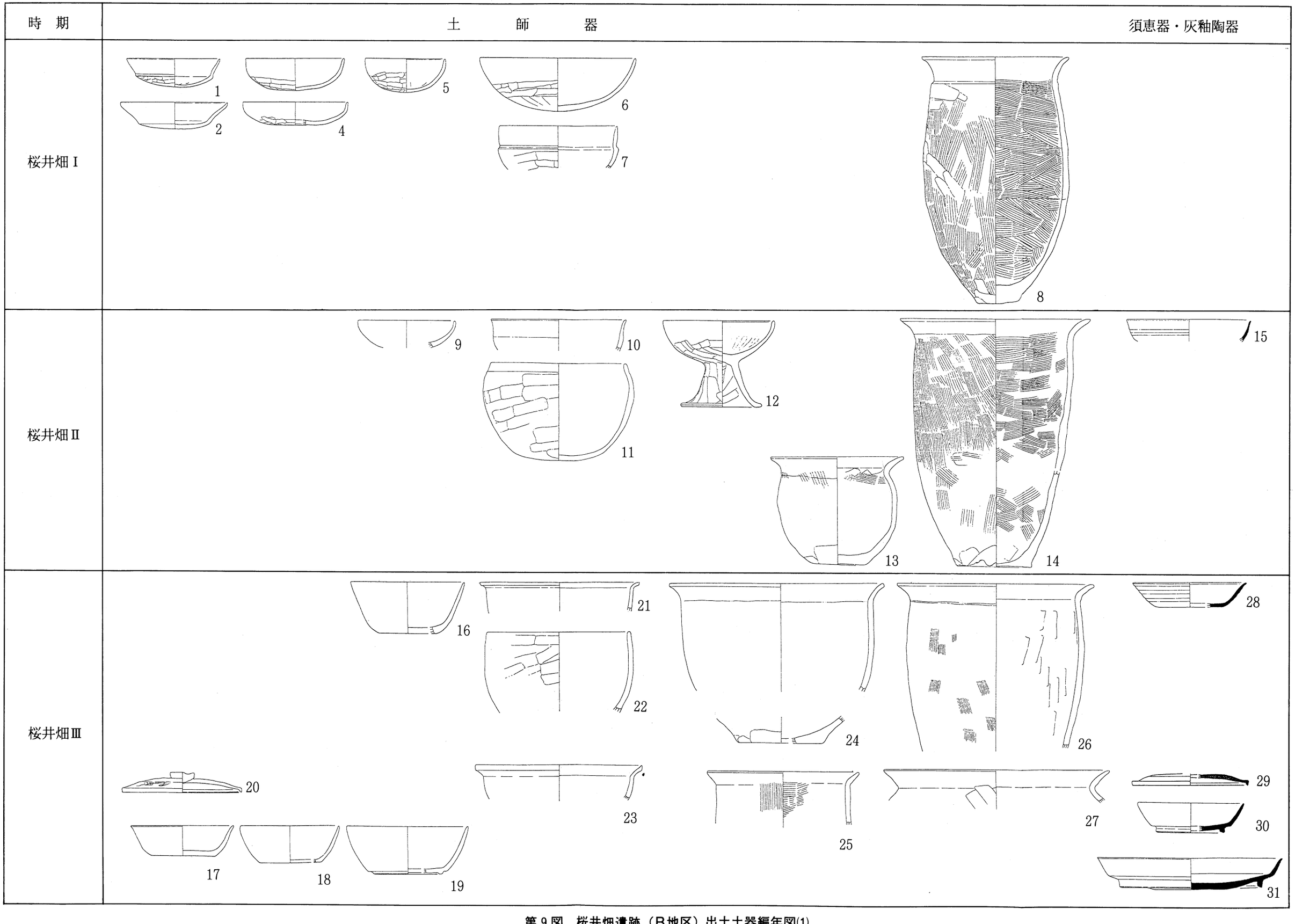
本遺跡では古墳時代から平安時代の住居址18軒が調査され、多くの資料が得られた。そこで出土した土器（土師器）を７期に別けて、変遷などの概要に触れると次のようになる。

桜井畑Ⅰ期

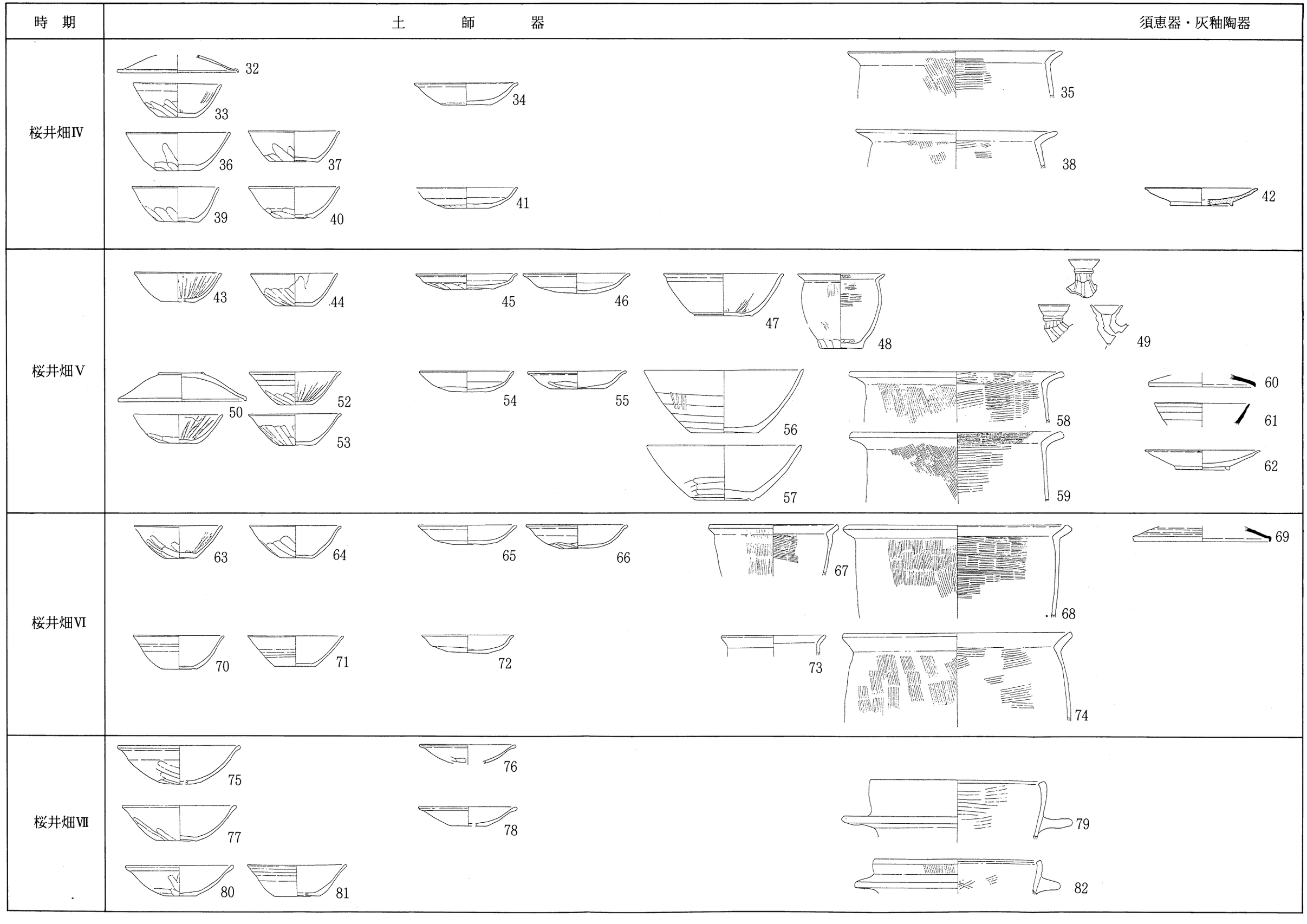
土師器の坏、埦、鉢、高坏、甕などが見られる。特に坏・埦類に偏平な半球形の器形をとるものが主体を占めるといった状況が捉えられる時期である。７世紀中頃に位置づけられる。

桜井畑Ⅱ期

土師器の坏、埦、鉢、高坏、甕、須恵器の坏などが見られる。土師器において坏は偏平な半球形のみと考えられる。球形の鉢が注目される。甕は下半部に膨みをもたない長胴甕に変る。須恵器坏は底部が破損しているが、高台坏と思われる。７世紀後半頃に位置づけられる。



第９図　桜井畑遺跡（Ｂ地区）出土土器編年図(1)



第10図　桜井畑遺跡（B地区）出土土器編年図(2)

桜井畑Ⅲ期

土師器では坏、高台坏（埦）、蓋坏、埦、鉢、甕（ロクロ目をもつものを含む）、須恵器では坏、高台坏、蓋坏、高台皿、瓶、甕などが見られる。坏類は底が大きく、かつ底から立ち上がる部分が角型を呈するもの（16～19）がほとんどを占める。鉢（21・23）は新たな器種と考えられる。甕は長胴甕以外に球胴甕（27）が見られる。8世紀後半でも新しい時期に位置づけられ、平安時代に盛んとなる「甲斐型坏」の出現時期を検討する上で、貴重な資料といえよう。

桜井畑Ⅳ期

土師器の坏、高台坏、蓋坏、皿、鉢、甕、須恵器の坏、灰釉陶器の皿などが見られる。坏は内面に放射状の暗文をもつ「甲斐型坏」と呼ばれるものがほとんどを占める。甕も器壁の薄くなる「甲斐型甕」である。灰釉陶器皿（42）は、建替えなどの考えられている10号住居址出土で、確実な伴出関係は分らない。10世紀前半代頃に位置づけられる。

桜井畑Ⅴ期

土師器の坏、高台坏、蓋坏、皿、鉢、甕、須恵器の坏、蓋坏、甕、灰釉陶器の皿、浄瓶などがある。坏は「甲斐型坏」がほとんどを占める。蓋坏の環状紐の例（50）は、これまで県内ではほとんど知られておらず、かつ量も多いようであり注目されよう。また鉢（47、56、57）なども顕著に見られる。10世紀中頃に位置付けられる。

桜井畑Ⅵ期

土師器の坏、蓋坏、皿、鉢、甕、須恵器の坏、蓋坏などがある。坏は「甲斐型坏」である。鉢には内面黒色処理する例も見られる。10世紀後半頃に置かれる。

桜井畑Ⅶ期

土師器の坏、皿、甕、羽釜、須恵器の坏などがある。坏は「甲斐型坏」の最終段階のもので、器形が大形化する。この時期から羽釜が顕著に認められるようになる。10世紀末ごろに位置づけられる。

以上、7期に分けて概略してきたが、年代的に空白期が見られるところである。この空白の時期がこの地域に集落が全く造られなかったのではなく、本地点の周辺に存在しているものと考えられる。

おわりに

桜井畑遺跡（B地区）の概要と若干の考察を加えてきた。18軒ほどの住居址が確認されたが、これらは集落の一部を調査したものにすぎないと考えられる。おそらく本遺跡の位置する微高地上に広がっているものと考えられる。古墳時代から平安時代にわたる長期間存続した集落と考えられるが、先に述べたように本地区と隣接するA地区における住居址との形態には大きな違いが見られた。至近距離での違いであり、生産関係遺跡を内包する地域ゆえに現われた現象か否か、重要な検討材料を提供してくれた遺跡といえよう。

最後に調査に際し、指導、助言あるいは援助をいただいた関係各位ならびに機関、および発掘調査、整理作業に従事した各位に、厚くお礼申し上げたい。

第２表　遺物観察表

第１号住居址（第26～27図）

番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	調整 体部	底部	胎土・焼成・色調	備考
1	土師　坏	13.0					やや粗い　良好　茶褐色	反転
2	須恵器　坏	19.0					緻密　〃　灰白色	〃
3	土師　埦	18.0					密　〃　褐色	〃
4	〃　鉢	18.0	12.8		ヘラケズリ		〃　〃　(外)暗褐色 (内)黒　色	〃
5	〃　甕	25.0	32.5	10.0	ハケメ (内)ハケメ	木葉痕	やや粗い　〃　褐色	
6	〃　〃	17.3	14.2	7.0	横ナデ、ハケメ (内)ハケメ	木葉痕	密　〃　褐色	
7	〃　〃	11.6					粗い　〃　暗褐色	反転
8	〃　〃				ハケメ (内)ハケメ		やや粗い　〃　褐色	〃
9	〃　〃				ハケメ (内)ヘラケズリ		〃　〃　〃	
10	〃　〃			7.0			密　〃　〃	反転
11	〃　〃			9.0	ハケメ		やや粗い　〃　〃	反転
12	〃　壺						〃　〃　〃	混入品

第２号住居址（第29図）

番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	調整 体部	底部	胎土・焼成・色調	備考
1	土師　坏			6.4		回転糸切り	密　良好　茶褐色	
2	〃　蓋	21.0					やや粗い　〃　〃	反転
3	須恵器 坏(高台坏?)	14.2					緻密　〃　灰白色	〃

第３号住居址（第30図）

番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	調整 体部	底部	胎土・焼成・色調	備考
1	土師　坏	11.6	4.4	4.8	ヘラケズリ (内)暗文	回転糸切後ヘラケズリ	密　良好　褐色	反転
2	〃　〃	13.5	4.2	6.8	ヘラケズリ		〃　〃　〃	
3	〃　蓋	15.8					〃　〃　〃	反転
4	〃　皿	13.6	2.9	6.2	ヘラケズリ	回転糸切後ヘラケズリ	〃　〃　〃	〃
5	〃　甕	28.1			ハケメ (内)ハケメ		粗い　〃　暗褐色	〃
6	〃　〃			6.2	ハケメ (内)ハケメ	木葉痕	〃　〃　〃	〃

第４号住居址（第30図）

番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	調整 体部	底部	胎土・焼成・色調	備考
1	土師　坏	12.0			ヘラケズリ (内)暗文		密　良好　暗褐色	反転
2	〃　〃	13.1	3.6	4.0	ヘラケズリ	回転糸切り後ヘラケズリ	〃　〃　褐色	〃

3	土師	坏	13.6					密	良好	褐色	反転
4	〃	〃	11.0			ヘラケズリ		〃	〃	〃	〃
5	〃	〃	13.3	5.0	5.0	ヘラケズリ (内)暗文	回転糸切り後ヘラケズリ	〃	〃	〃	〃
6	〃	〃	12.8	4.5	4.6	ヘラケズリ		〃	〃	〃	〃
7	〃	〃	13.2	2.3	6.0	ヘラケズリ	回転糸切り後ヘラケズリ	〃	〃	〃	〃
8	〃	甕	26.0			ハケメ (内)ハケメ		粗い	〃	〃	〃
9	〃	〃	15.4			ハケメ (内)ハケメ		〃	〃	〃	〃
10	〃	〃	24.0			ハケメ (内)ハケメ		〃	〃	〃	〃
11	〃	〃			6.7	ハケメ (内)ハケメ	木葉痕	〃	〃	〃	〃

第5号住居址（第31図）

番号	器種		法量(cm)			調整		胎土・焼成・色調			備考
			口径	器高	底径	体部	底部				
1	土師	坏	9.6					密	良好	(外)暗褐色 (内)黒色	反転
2	須恵器	〃	11.1					緻密	〃	青灰色	〃
3	土師	埦	15.4			ヘラケズリ		密	〃	褐色	〃
4	〃	坏	15.0					〃	〃	(外)褐色 (内)黒色	〃
5	〃	高坏	14.7	11.3	10.7	ヘラケズリ (内)ヘラケズリ		粗い	〃	褐色	
6	〃	甕			6.3		木葉痕	〃	〃	〃	
7	〃	〃			11.2	ハケメ (内)ハケメ	〃	〃	〃	〃	反転
8	〃	皿	12.8			ヘラケズリ		密	〃	〃	〃 混入品

第6号住居址（第32図）

番号	器種		法量(cm)			調整		胎土・焼成・色調			備考
			口径	器高	底径	体部	底部				
1	土師	坏	12.3	3.8		ヘラケズリ		密	良好	褐色	
2	〃	〃	12.8	3.9		ヘラケズリ後ミガキ		〃	〃	(外)褐色 (内)黒色	
3	〃	〃	14.1	3.6				〃	〃	褐色	
4	〃	〃	10.5	4.5		ヘラケズリ		〃	〃	〃	
5	〃	〃	13.0	4.3		ヘラケズリ		〃	〃	〃	
6	〃	〃	13.8	3.0		ヘラケズリ		〃	〃	〃	反転
7		〃	10.8	5.6		ヘラケズリ、指頭痕 (内)指頭痕		やや密	〃	〃	
8	〃	椀	20.6	7.0		ヘラケズリ		密	〃	褐色	反転
9	〃	〃	15.6			ヘラケズリ		〃	〃	暗褐色	〃
10	〃	高坏			9.4	ヘラケズリ (内)ヘラケズリ		〃	〃	(外)丹塗り (内)褐	〃
11	〃	甕	19.0	32.2	5.2	ハケメ (内)ハケメ	ヘラケズリ	やや粗い	〃	褐色	

第７号住居址（第33～37図）

番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	調整 体部	底部	胎土・焼成・色調	備考
1	土師 坏	13.4	4.0	8.6	(内)横位暗文	回転糸切後ヘラケズリ (内)暗文	密 良好 褐色	
2	〃 〃	14.0					〃 〃 〃	反転
3	〃 〃	13.0	4.9	8.0			〃 〃 〃	〃
4	〃 〃			9.0	ヘラケズリ	回転糸切り後ヘラケズリ	〃 〃 〃	
5	土師 削り出し高台坏	16.0	6.3	9.0			〃 〃 〃	反転
6	〃 〃			8.6		ヘラケズリ	〃 〃 〃	〃
7	〃 〃			9.0			〃 〃 〃	〃
8	〃 〃			8.6		ヘラケズリ	〃 〃 〃	〃
9	〃 蓋						〃 〃 〃	
10	〃 〃						〃 〃 〃	反転
11	〃 〃	14.0					〃 〃 〃	〃
12	〃 〃	16.0					〃 〃 〃	〃
13	〃 〃	15.0					〃 〃 〃	〃
14	〃	15.6	2.7		螺施状暗文 (内)暗文		〃 〃 〃	
15	〃	13.8			螺施状暗文 (内)螺施状暗文		〃 〃 〃	
16	須恵器 高台坏	14.0	3.9	9.0			緻密 〃 青灰白	反転
17	〃 〃			9.6			〃 〃 〃	〃
18	〃 高台皿	24.4	4.2	18.8			〃 〃 セピア色	
19	〃 〃			16.0			〃 〃 〃	反転
20	〃 坏	12.0					〃 〃 青灰色	〃 混入品
21	〃 蓋	14.0					〃 〃 〃	〃
22	〃 〃	15.2					粗い 〃 灰色	〃
23	土師 鉢	14.0					密 〃 褐色	〃
24	〃 〃	22.0					〃 〃 (外)褐色 (内)暗褐色	〃
25	〃 〃			6.0	ヘラケズリ (内)ヘラケズリ	木葉痕	粗い 〃 褐色	〃
26	〃 〃			6.0		回転糸切り後ヘラケズリ	密 〃 〃	〃
27	〃 高坏	9.0	6.5	6.8	ヘラケズリ		〃 〃 (内外)刷塗り	脚、裾部波状
28	〃 甕	30.0			ヘラケズリ		粗い 〃 褐色	反転
29	〃 〃	20.0			ハケメ (内)ハケメ		〃 〃 〃	〃
30	〃 〃	20.0			ハケメ (内)ハケメ		〃 〃 〃	〃
31	〃 〃			10.0	(内)ハケメ後ナデ		〃 〃 〃	〃
32	〃 〃			7.0	ヘラケズリ	木葉痕	〃 〃 〃	〃
33	〃 〃			8.5	ハケメ	木葉痕	〃 〃 〃	
34	須恵器 壺	18.2					緻密 〃 青灰色	反転
35	〃 甕				カキメ		〃 〃	

36	須恵器	甕						緻密	青灰色	
37	〃	〃						〃	〃	
38	〃	〃						〃	〃	

第８号住居址（第38図）

番号	器種		法量(cm)			調整		胎土・焼成・色調			備考
			口径	器高	底径	体部	底部				
1	土師	坏	14.2	4.0	4.0	ヘラケズリ	回転糸切り後ヘラケズリ	密	良好	茶褐色	反転
2	〃	〃	13.0	4.1	6.0		回転糸切り	〃	〃	褐色	〃
3	〃	〃	9.8	3.5	5.0		回転糸切り	〃	〃	暗褐色	〃
4	〃	〃	14.0					〃	〃	褐色	〃
5	〃	〃			5.0		回転糸切り	〃	〃	茶褐色	
6	〃	〃			5.5		回転糸切り	〃	〃	褐色	
7	〃	〃	14.0					〃	〃	〃	反転
8	〃	〃			5.4		回転糸切り	〃	〃	〃	〃
9	〃	蓋						〃	〃	〃	
10	須恵器	〃	13.8					緻密	〃	灰色	反転
11	〃	〃	27.0					〃	〃	〃	〃
12	土師	甕	12.4					粗い	〃	褐色	〃
13	〃	〃			8.0	(内)ハケメ後ナデ	木葉痕	〃	〃	〃	〃
14	須恵器	甕	18.3					緻密	〃	青灰色	〃
15	〃	壺			8.4			〃	〃	〃	〃
16	土師	羽釜	22.0			ハケメ (内)ハケメ		密	〃	茶褐色	〃
17	〃	〃						〃	〃	褐色	〃

第９号住居址（第39～41図）

番号	器種		法量(cm)			調整		胎土・焼成・色調			備考
			口径	器高	底径	体部	底部				
1	土師	坏	15.0	6.7	8.0			緻密	良好	茶褐色	反転
2	須恵器	皿	15.0	3.3	8.6			〃	〃	青灰色	〃
3	〃	坏	13.0					〃	〃	灰白色	〃
4	〃	坏	11.0					〃	〃	青灰色	〃 混入品
5	土師	鉢	21.0					粗い	〃	褐色	〃
6	〃	鉢	19.0			ヘラケズリ		緻密	〃	〃	〃
7	〃	甕	31.0					粗い	〃	〃	〃
8	〃	手捏	4.6	3.8	4.0	指頭ナデ		密	〃	〃	
9	〃	〃	6.6	3.5	4.7		木葉痕	〃	〃	茶褐色	一部反転
10	〃	甕	27.0			ハケメ後ナデ		粗い	〃	〃	反転

11	土師　甕			11.0	ヘラケズリ	木葉痕	やや粗い	良好	褐色	反転
12	〃　〃			8.0	ヘラケズリ	ヘラケズリ	密	〃	〃	
13	〃　〃			9.8	ヘラケズリ (内)ハケメ、ヘラケズリ	木葉痕	粗い	〃	茶褐色	反転
14	〃　〃	19.0			ヘラケズリ		〃	〃	暗褐色	〃
15	〃　〃	26.0			ハケメ (内)ヘラケズリ		〃	〃	〃	〃
16	〃　〃	19.5			ハケメ (内)ハケメ		〃	〃	〃	〃
17	須恵器　長頸壺	9.0					緻密	〃	灰白色	〃
18	〃　〃	8.0					密	〃	青灰色	
19	〃　甕	16.0					緻密	〃	〃	反転
20	〃　〃	25.0					〃	〃	〃	〃
21	〃　〃	36.0					〃	〃	〃	〃
22	土師　置きかまど						粗い	〃	褐色	

第10号住居址（第42～43図）

番号	器　種	法量(cm)			調	整	胎土・焼成・色調			備　考
		口径	器高	底径	体　部	底　部				
1	土師　坏	11.2	4.5	5.3	ヘラケズリ	回転糸切り後ヘラケズリ	密	良好	褐色	1部反転
2	〃　〃	12.0	4.0	5.0	ヘラケズリ	〃	〃	〃	茶褐色	反転
3	〃　〃	12.4	3.9	6.0	ヘラケズリ		〃	〃	褐色	〃
4	〃　〃	12.0	4.4	5.0			〃	〃	暗褐色	〃
5	〃　〃	13.0	4.0	6.0			〃	〃	褐色	〃
6	〃　〃	13.0					緻密	〃	(外)褐色 (内)黒色	〃
7	〃　〃	14.4					密	〃	茶褐色	〃
8	〃　〃	16.0					〃	〃	(外)褐色 (内)黒色	〃
9	〃　高台坏			7.0		削出高台	〃	〃	褐色	〃
10	〃　〃			5.8		〃	〃	〃	〃	〃
11	〃　〃			8.0		〃	〃	〃	〃	〃
12	〃　〃			7.6		〃	緻密	〃	(外)褐色 (内)黒色	〃
13	〃　〃			8.0		〃	密	〃	(外)褐色 (内)黒色	〃
14	須恵器　高台坏			9.6			緻密	〃	青灰色	〃
15	土師　蓋						密	〃	茶褐色	
16	〃　〃						密	〃	〃	
17	〃　〃						緻密	〃	〃	
18	〃　〃						密	〃	褐色	反転 環状紐(削り出し)
19	〃　〃	16.0					緻密	〃	〃	反転
20	〃　〃	16.0					密	〃	茶褐色	〃
21	〃　〃	17.0					緻密	〃	〃	〃
22	須恵器　〃	13.0					密	〃	青灰色	〃

23	土師	皿	13.2	2.7	5.8	ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	密	良好	褐色	反転
24	〃	〃	13.2	2.5	6.0		〃	〃	〃	〃	〃
25	〃	〃	13.6	2.7	6.0		〃	〃	〃	〃	
26	〃	〃	12.0					〃	〃	茶褐色	反転
27	〃	甕	28.0			ハケメ (内)ハケメ		粗い	〃	暗褐色	〃
28	〃	鉢	21.0					密	〃	(外)褐色 (内)黒色	〃
29	灰釉	高台皿	12.8	2.3	8.2			緻密	〃	灰白色	〃
30	土師	甕			10.0		木葉痕	粗い	〃	暗褐色	〃

第12号住居址（第44図）

番号	器種		法量(cm)			調整		胎土・焼成・色調			備考
			口径	器高	底径	体部	底部				
1	土師	坏	11.8	4.3	4.4		回転糸切後ヘラケズリ	密	良好	褐色	反転
2	〃	〃	13.4	4.6	6.0		〃	〃	〃	(外)褐色 (内)黒色	〃
3	〃	〃	12.4	4.0	5.4		〃	〃	〃	茶褐色	〃
4	〃	〃	15.0					〃	〃	褐色	〃
5	〃	〃	13.4	4.5	5.6		回転糸切後ヘラケズリ	〃	〃	〃	〃
6	〃	〃	15.0					〃	〃	〃	〃
7	〃	〃	14.0					〃	〃	〃	〃
8	〃	〃			5.4		回転糸切後ヘラケズリ	やや粗い	〃	茶褐色	
9	〃	皿	13.0	2.5	5.0		〃	〃	〃	褐色	
10	〃	〃	12.0	2.7	5.0		〃	密	〃	〃	口縁部かなりゆがみあり
11	〃	甕	13.6					やや粗い	〃	暗褐色	反転
12	〃	〃			7.4			密	〃	褐色	〃
13	〃	〃	30.0			ハケメ (内)ハケメ		やや粗い	〃	暗褐色	〃

第13号住居址（第45～48図）

番号	器種		法量(cm)			調整		胎土・焼成・色調			備考
			口径	器高	底径	体部	底部				
1	土師	坏	11.4	4.3	4.8	(内)暗文	回転糸切り後ヘラケズリ	密	良好	褐色	タール付着
2	〃	〃	11.5	4.1	4.0	ヘラケズリ (内)暗文	〃	〃	〃	〃	
3	〃	〃	13.5	4.5	6.5	ヘラケズリ (内)暗文	〃	〃	〃	〃	一部反転
4	〃	〃	12.0	4.2	4.4	ヘラケズリ	〃	〃	〃	〃	
5	〃	〃	11.8	4.5	5.1	ヘラケズリ	〃	〃	〃	〃	反転
6	〃	〃	13.1	4.3	5.0	ヘラケズリ	〃	〃	〃	〃	
7	〃	〃	11.8	4.2	5.1	ヘラケズリ	〃	〃	〃	〃	
8	〃	〃	12.0	4.2	5.0	ヘラケズリ	〃	〃	〃	〃	
9	〃	〃	11.9	4.2	4.0	ヘラケズリ	〃	〃	〃	〃	

10	土師	坏	11.5	4.3	4.6	ヘラケズリ (内)暗文	回転糸切り後ヘラケズリ	密	良好	褐色	
11	〃	〃	12.2	4.1	4.0	ヘラケズリ	〃	〃	〃	〃	
12	〃	〃	11.8	4.2	4.5	ヘラケズリ	〃	〃	〃	〃	
13	〃	〃	11.2	4.0	4.2	ヘラケズリ	〃	〃	〃	暗褐色	
14	〃	〃	11.0	4.0	4.0	ヘラケズリ	〃	〃	〃	褐色	反転
15	〃	〃	11.2	3.5	4.6	ヘラケズリ (内)暗文	〃	〃	〃	〃	
16	〃	〃	11.8	3.8	5.3	ヘラケズリ	〃	〃	〃	〃	
17	〃	〃	11.9	4.5	4.9	ヘラケズリ	〃	〃	〃	〃	
18	〃	〃	12.0	4.1	5.0		〃	〃	〃	〃	反転
19	〃	〃	11.5	4.1	5.2		〃	〃	〃	〃	
20	〃	〃	11.3	4.0	4.0			〃	〃	〃	反転
21	〃	〃	12.0	3.9	4.7			〃	〃	〃	〃
22	〃	〃	13.0			ヘラケズリ (内)暗文		〃	〃	(外)褐色 (内)黒色	〃
23	〃	〃	13.3			ヘラケズリ (内)暗文		〃	〃	褐色	〃
24	〃	〃	13.8					〃	〃	(外)褐色 (内)黒色	〃
25	〃	〃	14.8	5.4	7.0	ヘラケズリ (内)暗文	回転糸切り後ヘラケズリ	〃	〃	褐色	
26	〃	高台坏			6.0		削出高台	〃	〃	〃	反転
27	〃	〃			5.8	(内)暗文	〃	〃	〃	〃	〃
28	〃	〃			6.6	(内)暗文	〃	〃	〃	〃	〃
29	〃	蓋	13.8					〃	〃	〃	〃
30	〃	〃						〃	〃	〃	〃 環状紐(削り出し)
31	須恵器	〃	16.0					緻密	〃	青灰白	反転
32	〃	〃	17.6					〃	〃	〃	〃
33	〃	坏	14.0					〃	〃	〃	〃
34	土師	皿	12.9	3.0			回転ヘラケズリ	密	〃	褐色	
35	〃	〃	17.9	2.4	4.1		回転糸切り後ヘラケズリ	〃	〃	〃	反転
36	〃	〃	13.5	2.4				〃	〃	〃	〃
37	〃	〃	11.9	2.2	5.1	ヘラケズリ	回転糸切り後ヘラケズリ	〃	〃	〃	〃
38	〃	〃	13.4	3.1	5.0	ヘラケズリ	回転糸切り後ヘラケズリ	やや粗い	〃	〃	
39	〃	〃	12.6					密	〃	〃	反転
40	〃	甕	28.6			ハケメ (内)ハケメ		粗い	〃	〃	〃
41	〃	〃				ハケメ (内)ヘラケズリ		〃	〃	暗褐色	〃
42	〃	〃	29.0			ハケメ (内)ハケメ		〃	〃	褐色	〃
43	〃	〃				ハケメ (内)ハケメ		粗い	〃	〃	〃
44	〃	〃	16.6			〃 〃		〃	〃	〃	〃
45	〃	〃			9.0	〃 〃	木葉痕	〃	〃	〃	〃
46	〃	〃			8.5	ヘラケズリ (内)ヘラケズリ	〃	〃	〃	暗褐色	〃
47	〃	〃			8.4	ハケメ (内)ヘラケズリ	木葉痕	〃	〃	褐色	反転

第14号住居址（第49図）

番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	調整 体部	底部	胎土・焼成・色調			備考
1	土師 坏	15.0	4.7	5.4		回転糸切り後ヘラケズリ	密	良好	茶褐色	
2	〃 〃	14.0					〃	〃	〃	反転
3	〃 〃			4.0	ヘラケズリ	回転糸切り後ヘラケズリ	緻密	〃	(外)褐色 (内)黒色	
4	〃 皿	13.0	2.5	5.0		〃	粗い	〃	褐色	反転
5	〃 〃	13.0					やや粗い	〃	茶褐色	〃
6	〃 羽釜	23.0			(内)ハケメ		密	〃	暗褐色	〃

第15号住居址（第50～56図）

番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	調整 体部	底部	胎土・焼成・色調			備考
1	土師 坏	11.6	3.8	4.8	ヘラケズリ (内)暗文	回転糸切り後ヘラケズリ	密	良好	褐色	タール付着
2	〃 〃	12.0	4.4	4.5	〃 〃	〃	〃	〃	〃	反転
3	〃 〃	11.2	3.1	4.0	ヘラケズリ	〃	〃	〃	〃	〃
4	〃 〃	12.8	3.8	5.0	〃	〃	〃	〃	〃	
5	〃 〃	11.6	4.2	5.0	〃	〃	〃	〃	〃	
6	〃 〃	12.0	4.0	4.5	〃	〃	〃	〃	〃	
7	〃 〃	11.3	4.0	4.7	〃	〃	〃	〃	〃	タール付着
8	〃 〃	10.6	4.3	5.2		〃	〃	〃	〃	反転
9	〃 〃	12.0					〃	〃	〃	〃
10	〃 〃	12.0			ヘラケズリ		〃	〃	〃	〃
11	〃 〃	13.6	4.4	7.0	〃		〃	〃	〃	〃
12	〃 〃						〃	〃	〃	内外線刻『キ』
13	須恵器 〃	13.6					緻密	〃	青灰色	反転
14	〃 〃	12.4					〃	〃	〃	〃
15	〃 〃	20.0	4.1	18.0			〃	〃	〃	〃
16	土師 〃	14.0		5.6	ヘラケズリ	回転糸切り後ヘラケズリ	密	〃	褐色	〃
17	〃 〃	15.4					〃	〃	〃	〃
18	〃 〃			6.4	ヘラケズリ (内)ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	〃	〃	(外)褐色 (内)黒色	
19	〃 〃	18.0					〃	〃	(外)褐色 (内)黒色	反転
20	〃 鉢	21.1	8.1	9.0	ヘラケズリ (内)ヘラミガキ	回転ヘラケズリ	〃	〃	(外)褐色 (内)黒色	
21	〃 高台鉢	20.0	7.2	8.0	ヘラケズリ	削出高台	やや密	〃	(外)褐色 (内)黒色	反転
22	〃 高台坏	16.4	5.6	7.4		〃	密	〃	(外)褐色 (内)黒色	〃
23	〃 〃			5.8		〃	〃	〃	(外)褐色 (内)黒色	〃
24	〃 〃			7.0	(内)暗文	削出高台	〃	〃	褐色	反転
25	〃 〃			7.0		〃	〃	〃	〃	〃

26	土師	高台坏			6.0		前出高台	密	良好	(外)褐色 (内)黒色	反転
27	〃	〃			6.0		〃	〃	〃	褐色	〃
28	〃	〃			7.2	(内)暗文(?)	〃	〃	〃	(外)褐色 (内)黒色	
29	〃	〃			7.0		〃	〃	〃	〃	反転
30	〃	〃			7.5			〃	〃	〃	
31	〃	〃			6.6			〃	〃	〃	
32	〃	〃			6.6	(内)ヘラミガキ		〃	〃	〃	
33	〃	蓋	16.8	3.7	6.0			〃	〃	〃	環状紐(削り出し)
34	〃	〃	15.0					〃	〃	〃	反転
35	〃	〃						〃	〃	〃	反転
36	〃	〃						〃	〃	〃	
37	〃	〃			5.0			〃	〃	〃	反転 環状紐(削り出し)
38	〃	〃			3.8			〃	〃	〃	〃 〃
39	〃	〃			6.0			〃	〃	〃	〃 〃
40	〃	〃			4.0			〃	〃	〃	〃 〃
41	須恵器	〃	12.0					緻密	〃	青灰色	反転
42	〃	〃	13.8					〃	〃	〃	〃
43	土師	皿	14.0	1.5	10.0		回転糸切り後ヘラケズリ	密	〃	褐色	〃
44	〃	〃	13.1	2.4		ヘラケズリ (内)累施状暗文	ヘラケズリ、3本の線刻	〃	〃	〃	
45	〃	〃	13.0	2.4	5.2	ヘラケズリ	回転糸切後ヘラケズリ	〃	〃	〃	反転
46	〃	〃	13.0	2.3	7.0	ヘラケズリ	〃	〃	〃	〃	
47	〃	〃	15.2	2.6	6.0	ヘラケズリ	〃	〃	〃	〃	反転
48	〃	〃	12.3	2.7	4.8	ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	〃	〃	〃	
49	〃	〃	12.0			ヘラケズリ		〃	〃	〃	反転
50	〃	〃	13.0	2.1	5.0	ヘラケズリ		〃	〃	〃	
51	〃	〃	14.0			ヘラケズリ		〃	〃	〃	反転
52	〃	〃	14.0					〃	〃	(外)褐色 (内)黒色	〃
53	〃	甕	27.0			ハケメ (内)ハケメ		やや粗い	〃	褐色	〃
54	〃	〃	28.0			ハケメ (内)ハケメ		粗い	〃	茶褐色	〃
55	〃	〃	31.0			ハケメ (内)ハケメ		やや粗い	〃	暗褐色	〃
56	〃	〃				ハケメ (内)ハケメ		〃	〃	〃	〃
57	〃	〃	29.5			ハケメ (内)ハケメ		粗い	〃	〃	〃
58	〃	〃	30.0			ハケメ (内)ハケメ		やや粗い	〃	褐色	〃
59	〃	〃	29.0			ハケメ (内)ハケメ		粗い	〃	褐色	〃
60	〃	〃	16.0			ハケメ (内)ハケメ		〃	〃	暗褐色	〃
61	〃	〃			11.0	ハケメ (内)ハケメ		やや粗い	〃	暗褐色	〃
62	〃	〃			9.0	ハケメ (内)ハケメ		〃	〃	褐色	〃
63	〃	置きかまど						〃	〃	〃	

64	須恵器	長頸壺						緻密	良好	青灰色	反転
65	〃	〃						〃	〃	〃	反転 肩部に自然釉
66	〃	甕			7.6			〃	〃	〃	自然釉
67	〃	浅鉢			16.0	叩き文		やや粗い	〃	灰褐色	反転
68	〃	甕	27.0					緻密	〃	青灰色	〃
69	灰釉	高台皿	15.0	2.6	7.2			〃	〃	灰白色	
70	〃	瓶	10.4					〃	〃	〃	反転
71	〃	〃	13.0					〃	〃	〃	〃

第16号住居址（第57～58図）

番号	器種		法量(cm)			調	整	胎土・焼成・色調			備考
			口径	器高	底径	体部	底部				
1	土師	坏	11.4	3.9	4.4	(内)暗文	回転糸切り後ヘラケズリ	密	良好	褐色	反転
2	〃	〃	11.3	3.9	4.2	ヘラケズリ後ミガキ・(内)暗文	〃	〃	〃	暗褐色	タール付着
3	〃	〃	11.5	3.9	5.4	ヘラケズリ (内)暗文	〃	〃	〃	褐色	反転
4	〃	〃			6.3	ヘラケズリ (内)暗文	〃	〃	〃	〃	
5	〃	〃	11.3	4.2	5.0	ヘラケズリ	〃	〃	〃	〃	タール付着
6	〃	〃	11.5	4.5	4.5	ヘラケズリ	〃	〃	〃	〃	
7	〃	〃	12.4	3.8	6.0	ヘラケズリ	〃	〃	〃	〃	一部反転
8	〃	〃	11.0			ヘラケズリ		〃	〃	〃	反転
9	〃	〃	11.6			ヘラケズリ		〃	〃	(外)褐色 (内)黒色	〃 混入品?
10	須恵器	〃	16.0					緻密	〃	青灰色	〃
11	〃	〃	10.0					〃	〃	〃	〃
12	土師	蓋						密	〃	褐色	
13	須恵器	〃	15.8					緻密	〃	青灰色	反転
14	土師	皿	14.2	2.6	5.6	ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	密	〃	褐色	
15	〃	〃	13.0	2.1	4.8	ヘラケズリ	〃		〃	〃	反転
16	〃	〃	13.3	2.4	5.4	ヘラケズリ	〃	密	〃	〃	
17	〃	〃	13.3	2.0	6.5	ヘラケズリ	〃	〃	〃	〃	反転
18	〃	〃	13.8	2.1	7.0	ヘラケズリ	〃	〃	〃	〃	〃
19	〃	〃	12.0					〃	〃	〃	〃
20	〃	高台坏	15.7	5.5	7.7	(内)暗文	削出高台	〃	〃	〃	〃
21	〃	坏	15.8			(内)暗文		〃	〃	(外)褐色 (内)黒色	〃
22	〃	高台坏			6.2	(内)暗文	削出高台	〃	〃	褐色	〃
23	灰釉	浄瓶									
24	土師	甕	11.3	9.6	5.6	ハケメ (内)ハケメ	木葉痕	粗い	良好	褐色	一部反転
25	〃	〃			8.4	(内)ハケメ	木葉痕	やや粗い	〃	褐色	反転
26	須恵器	〃						緻密	〃	青灰色	

第17号住居址（第59図）

番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	調整 体部	底部	胎土・焼成・色調	備考
1	土師 坏	16.0	4.9	5.5	ヘラケズリ		密 良好 褐色	反転
2	須恵器 高台坏			9.0			緻密 〃 灰色	
3	土師 皿	13.7			ヘラケズリ		密 〃 褐色	反転
4	〃 〃	12.5			ヘラケズリ		〃 〃 〃	〃

第18号住居址（第59図）

番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	調整 体部	底部	胎土・焼成・色調	備考
1	土師 坏	13.6	5.0	5.2	ヘラケズリ	回転糸切り後ヘラケズリ	密 良好 茶褐色	反転
2	〃 〃	12.0	4.0	6.0	ヘラケズリ	〃	〃 〃 暗褐色	〃
3	〃 〃	13.0					〃 〃 褐色	〃
4	〃 〃	14.0					〃 〃 暗褐色	〃
5	〃 甕	16.0			ハケメ (内)ハケメ		やや粗い 〃 〃	〃
6	〃 〃	12.0			ハケメ (内)ハケメ		密 〃 褐色	〃
7	〃 〃	13.4					〃 〃 〃	〃
8	須恵器 〃						緻密 〃 青灰色	

第１号住居址（石器）（第28～29図）

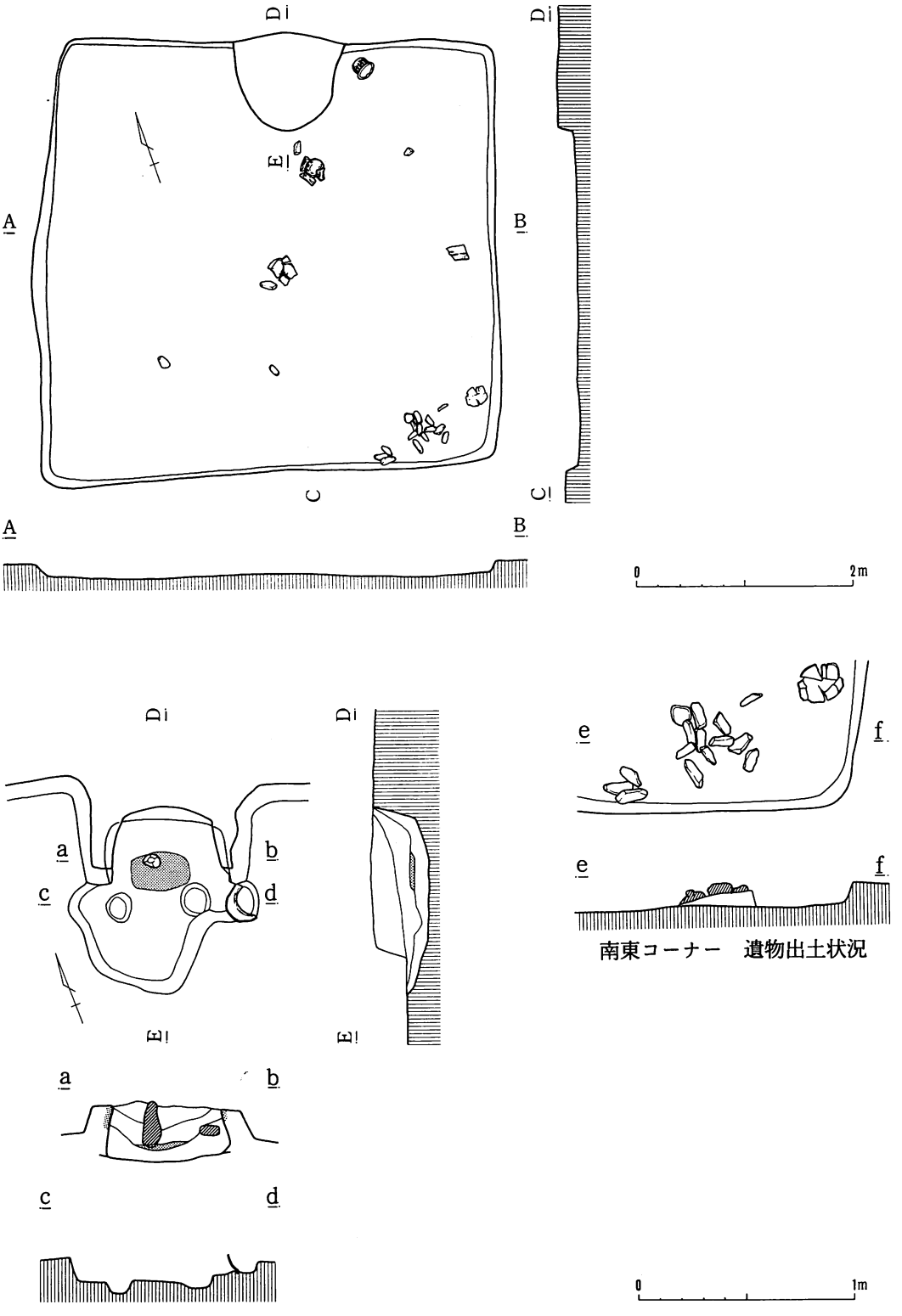
番号	種類	材質	重さ	番号	種類	材質	重さ
1	ムシロアミ	凝灰角礫岩	265 g	11	ムシロアミ	ホルンフェルス	385 g
2	〃	安山岩	161 g	12	〃	〃	184 g
3	〃	ホルンフェルス	332 g	13	〃	凝灰角礫岩	375 g
4	〃	泥質ホルンフェルス	257 g	14	〃	花崗岩類	450 g
5	〃	泥岩	321 g	15	〃	凝灰角礫岩	251 g
6	〃	ホルンフェルス	248 g	16	〃	凝灰岩	394 g
7	〃	輝石安山岩	261 g	17	〃	安山岩	536 g
8	〃	安山岩	192 g	18	〃	ホルンフェルス	396 g
9	〃	細粒砂岩	344 g	19	〃	凝灰岩	514 g
10	〃	中粒砂岩	426 g	20	〃	デイサイト	160 g

第７号住居址（石器）（第37図）

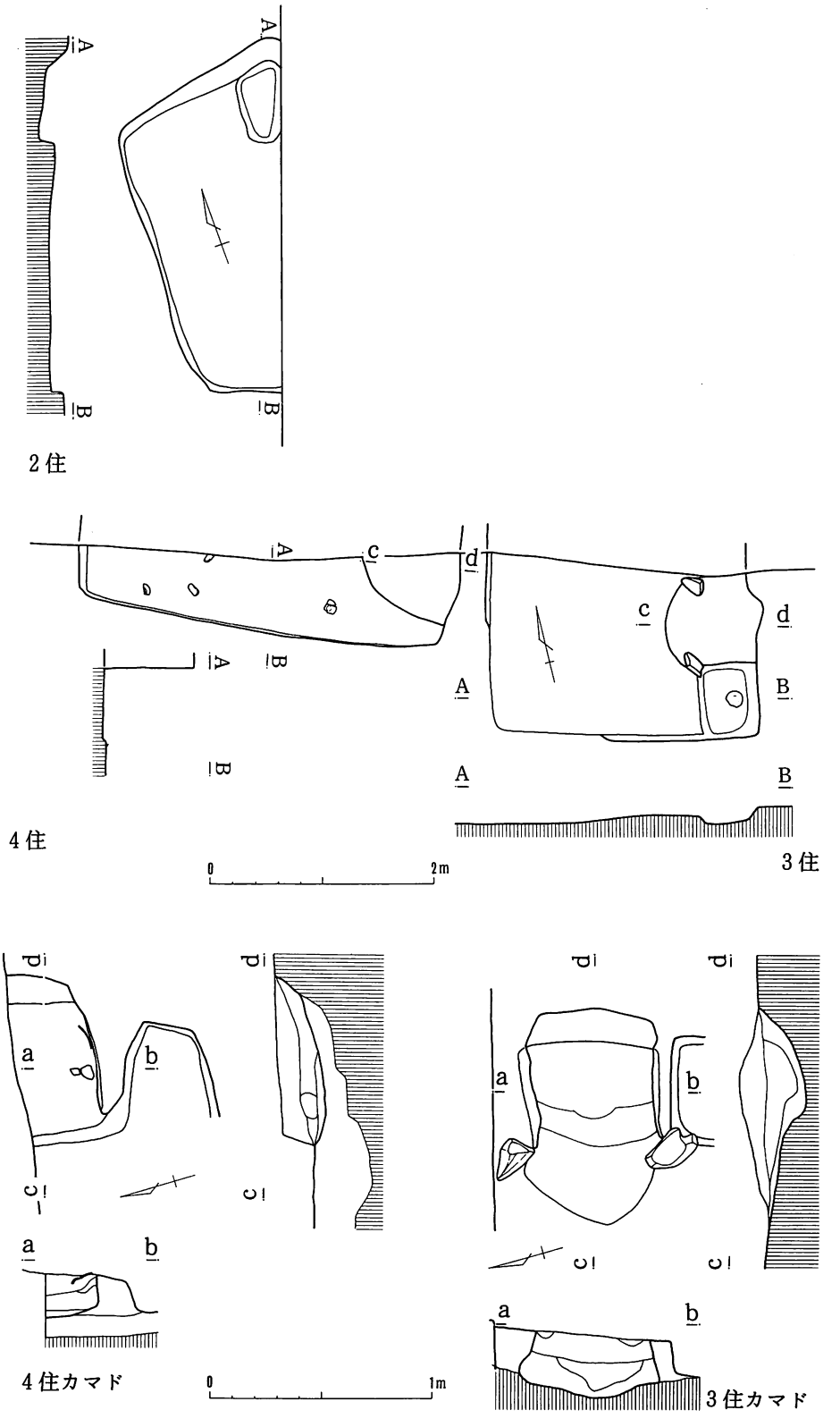
番号	種類	材質	重さ
39	砥石	凝灰岩	65 g

第15号住居址（石器）（第56図）

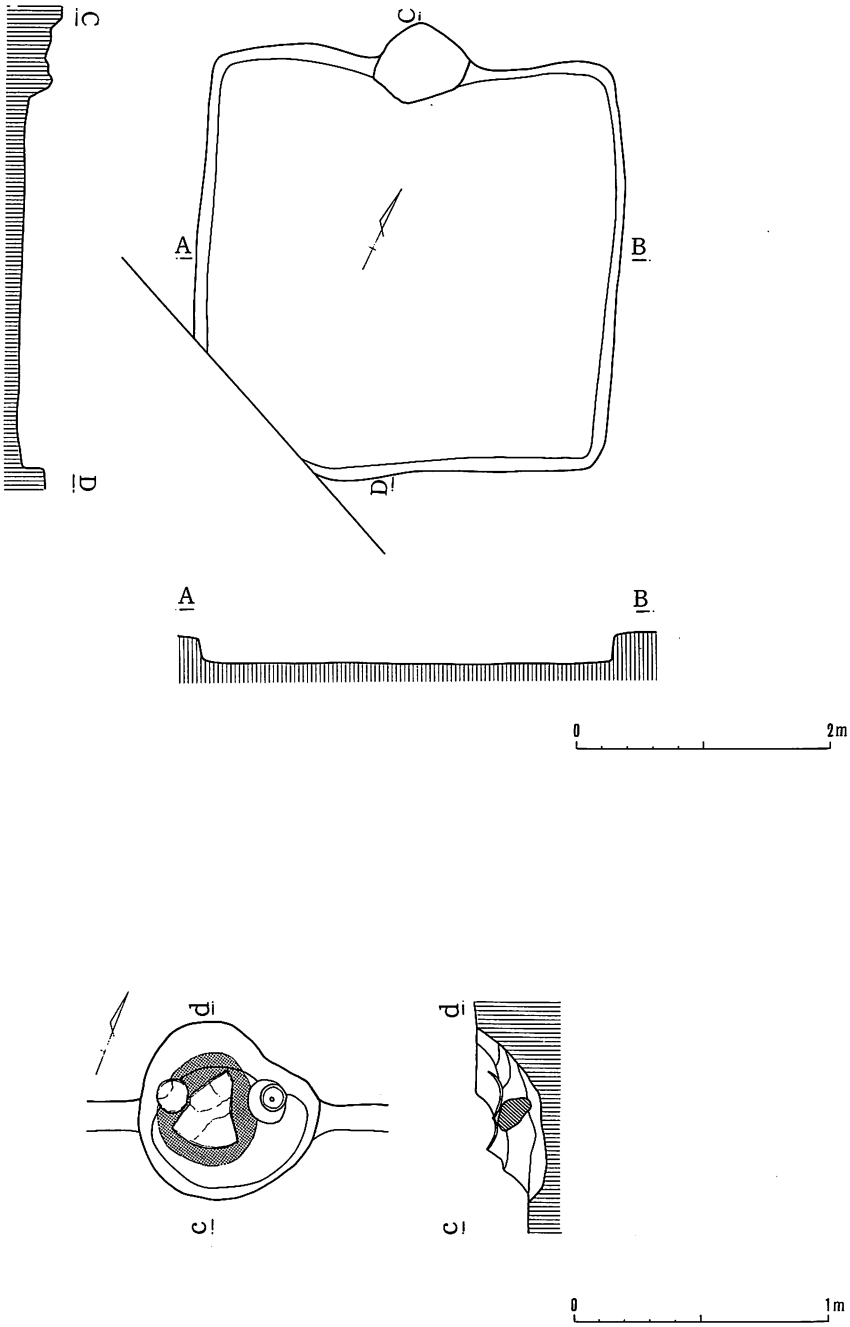
番号	種類	材質	重さ
72	磨石	安山岩	349 g



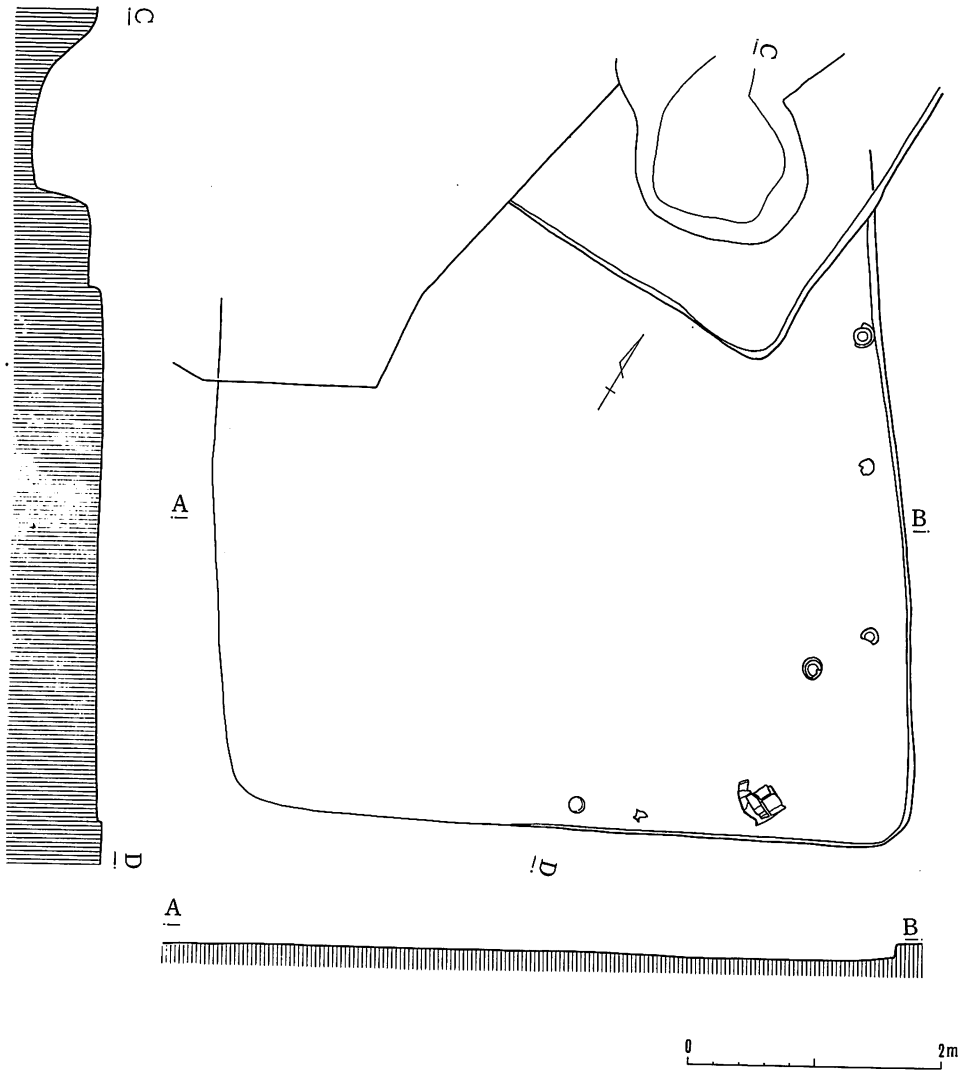
第11図　1号住居址・カマド平面図



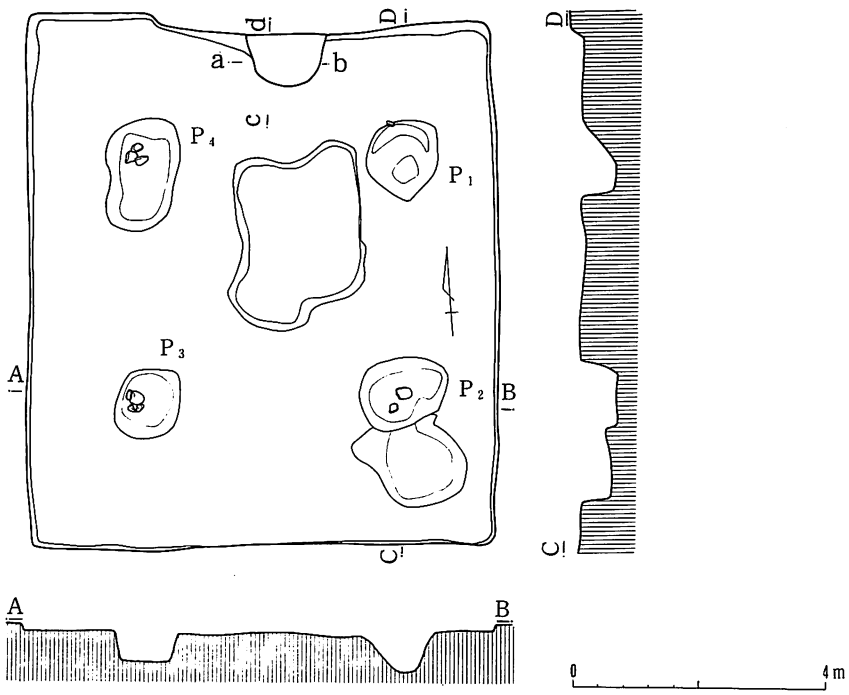
第12図　2・3・4号住居址・カマド平面図

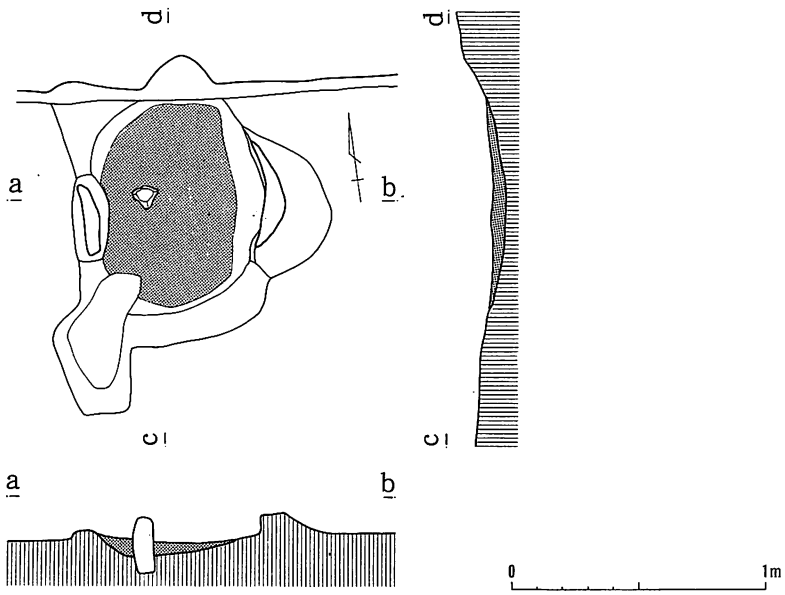


第13図　5号住居址・カマド平面図

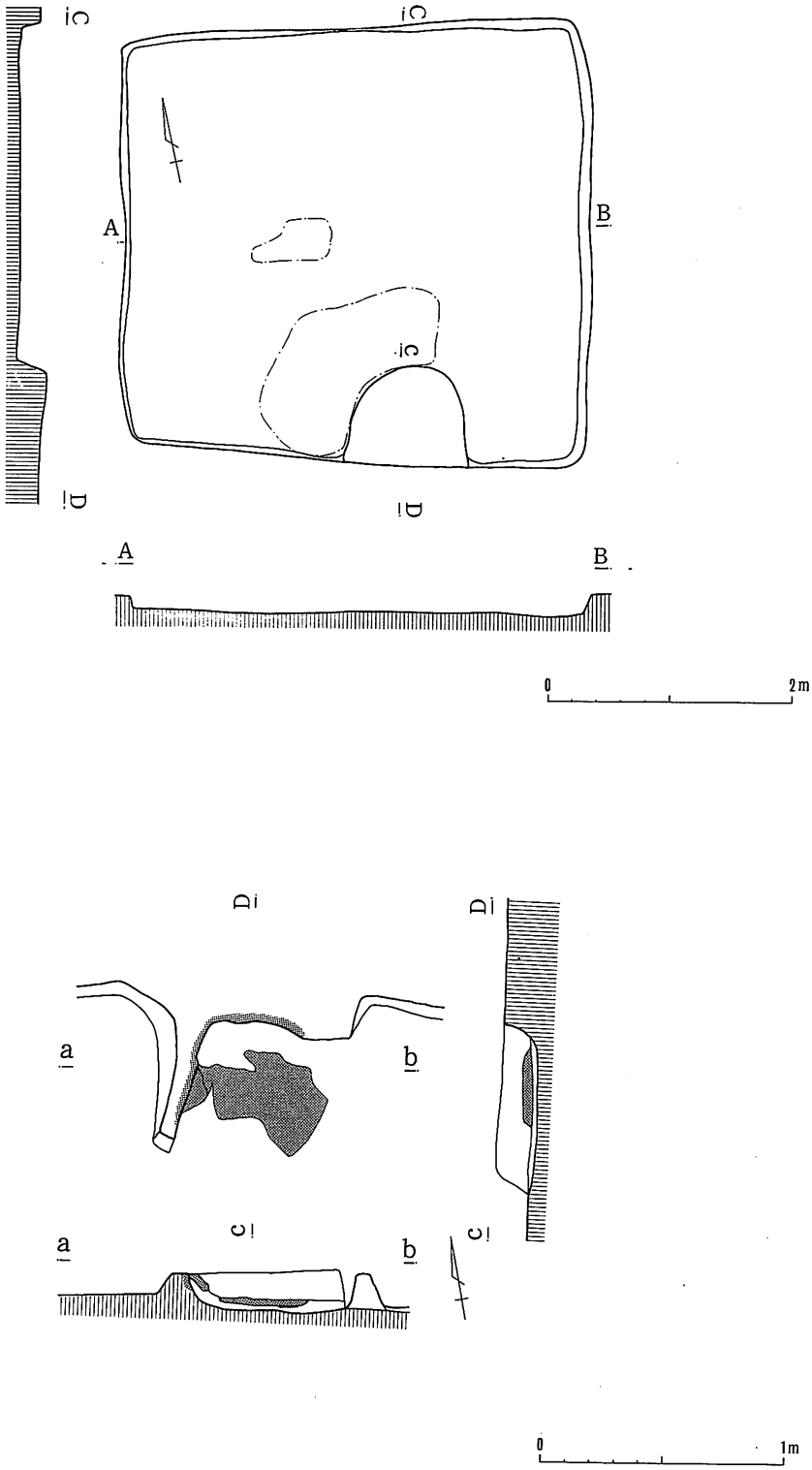


第14図　6号住居址平面図

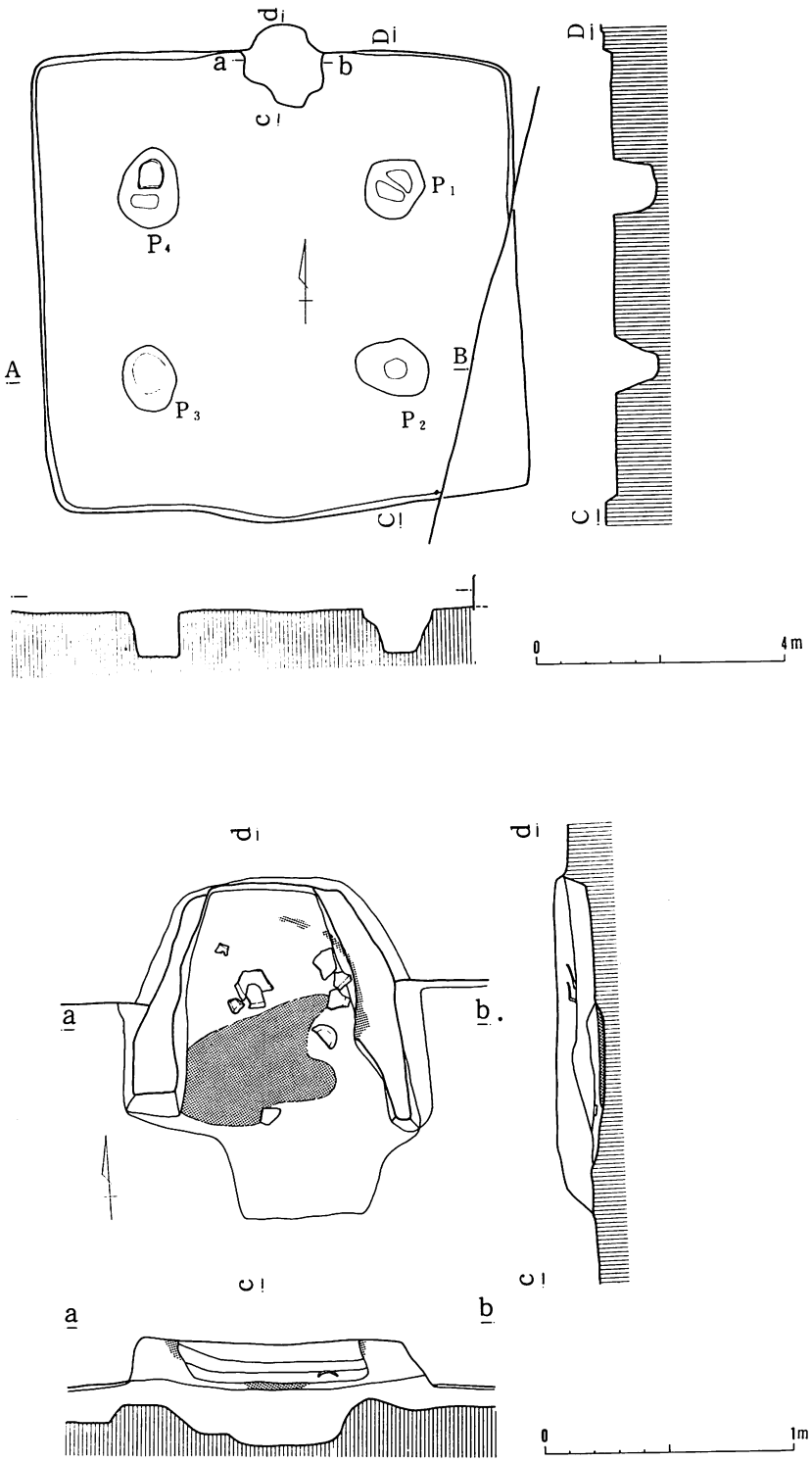




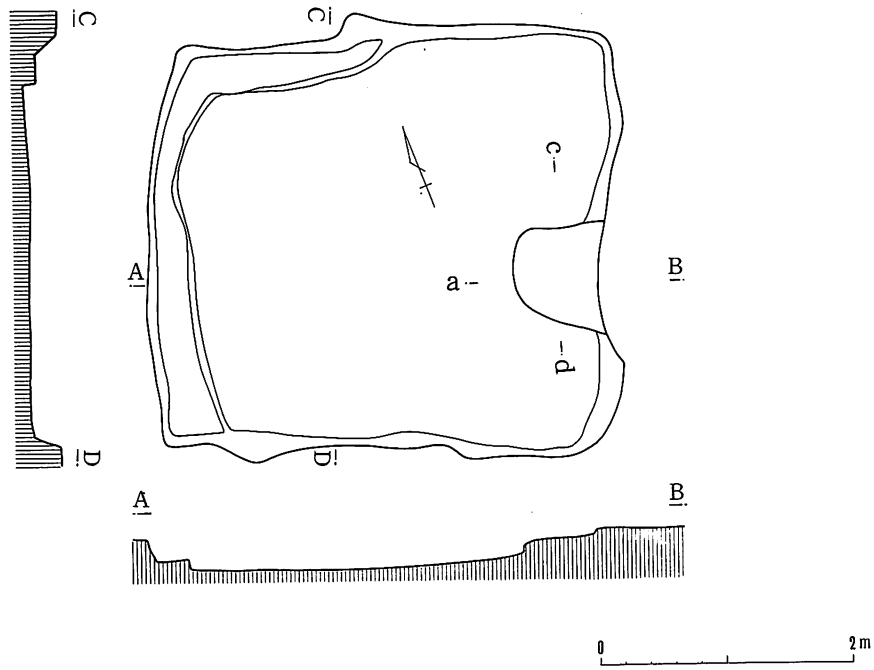
第15図　7号住居址・カマド平面図

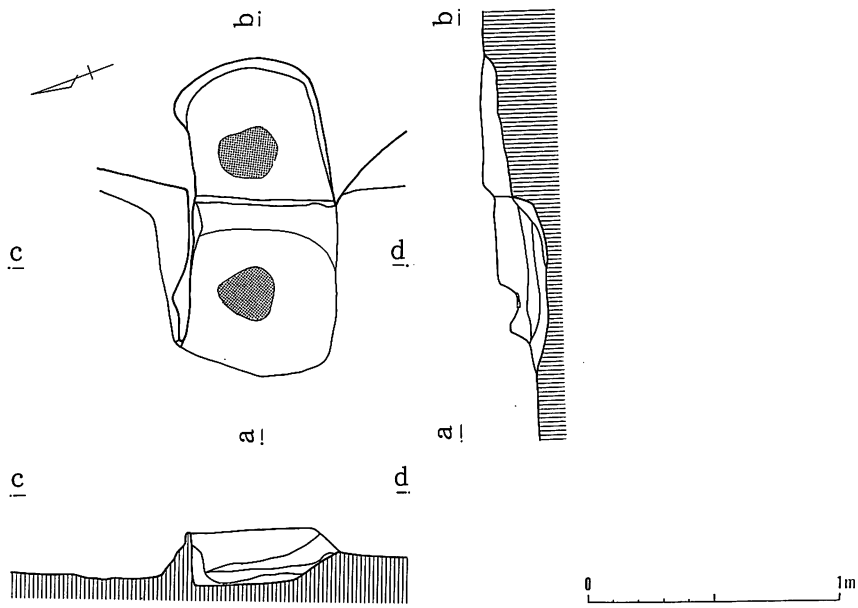


第16図　8号住居址・カマド平面図

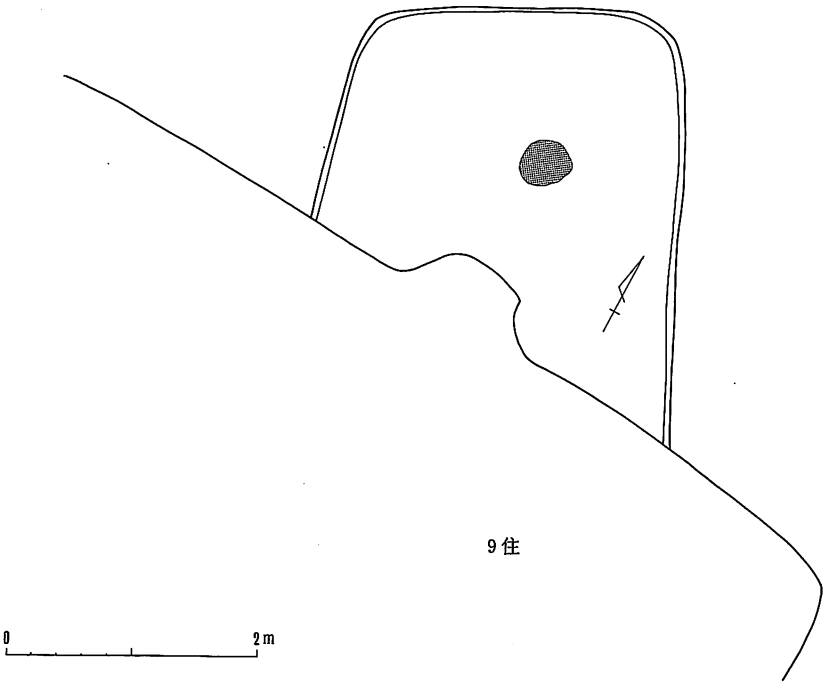


第17図　9号住居址・カマド平面図

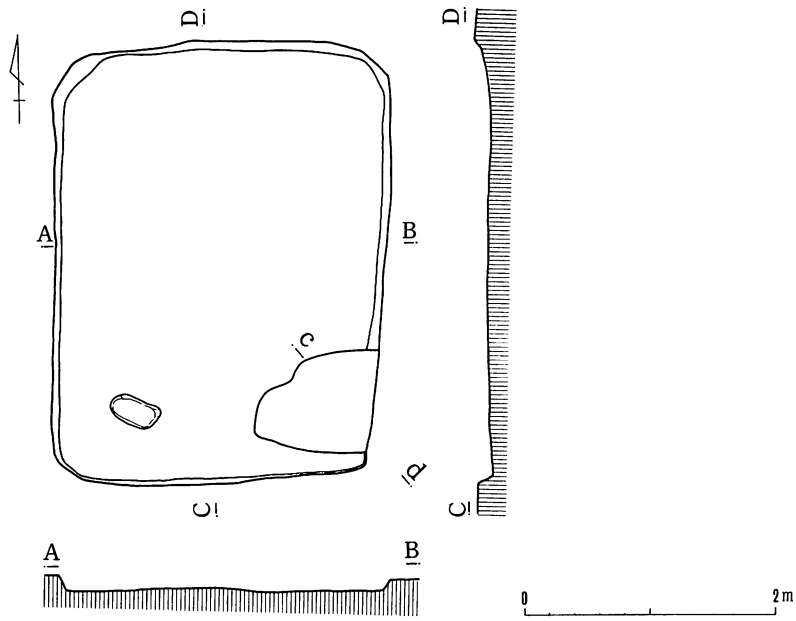


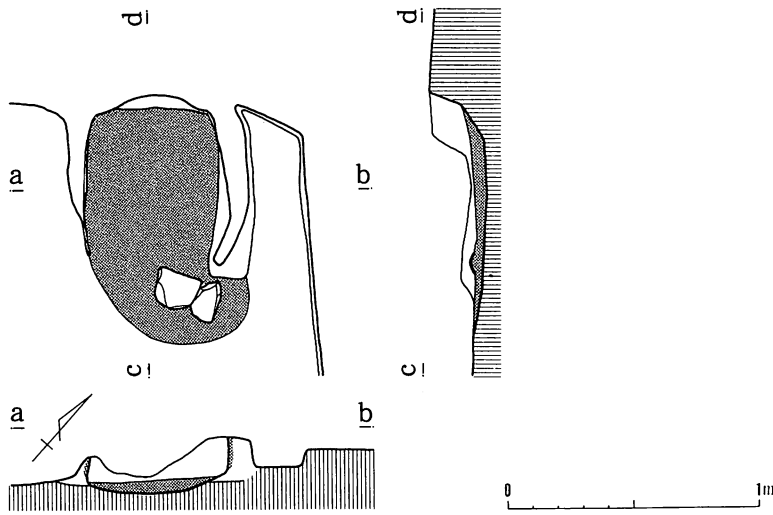


第18図　10号住居址・カマド平面図

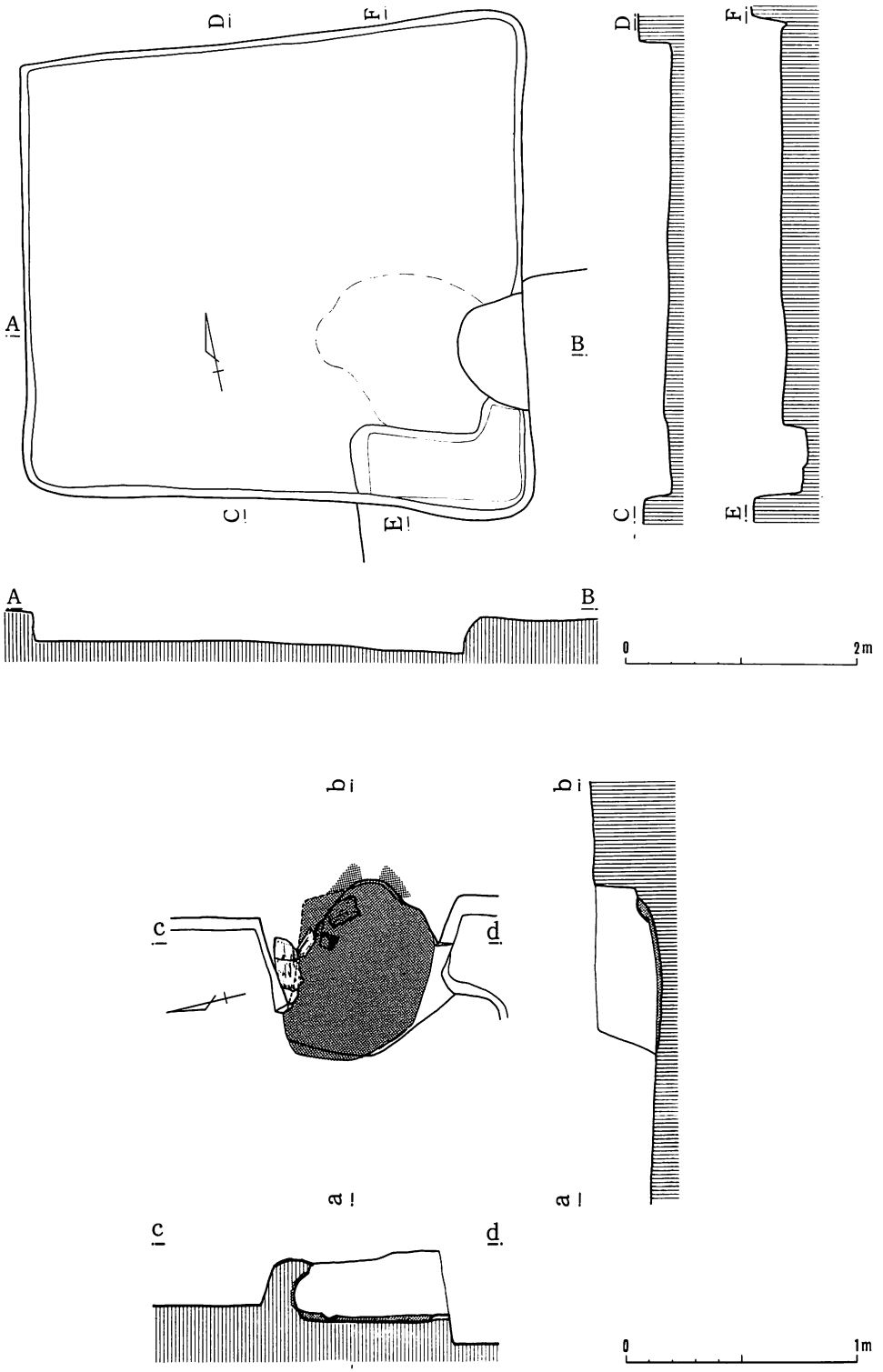


第19図　11号住居址平面図

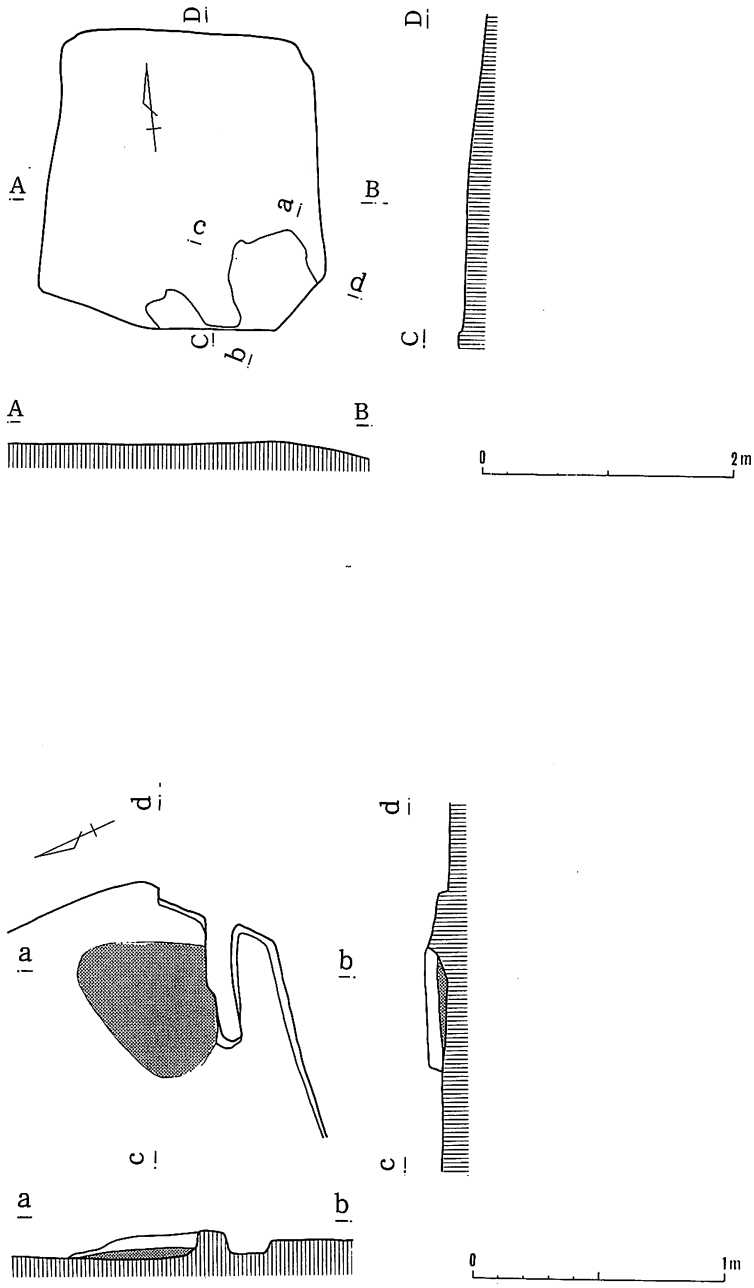




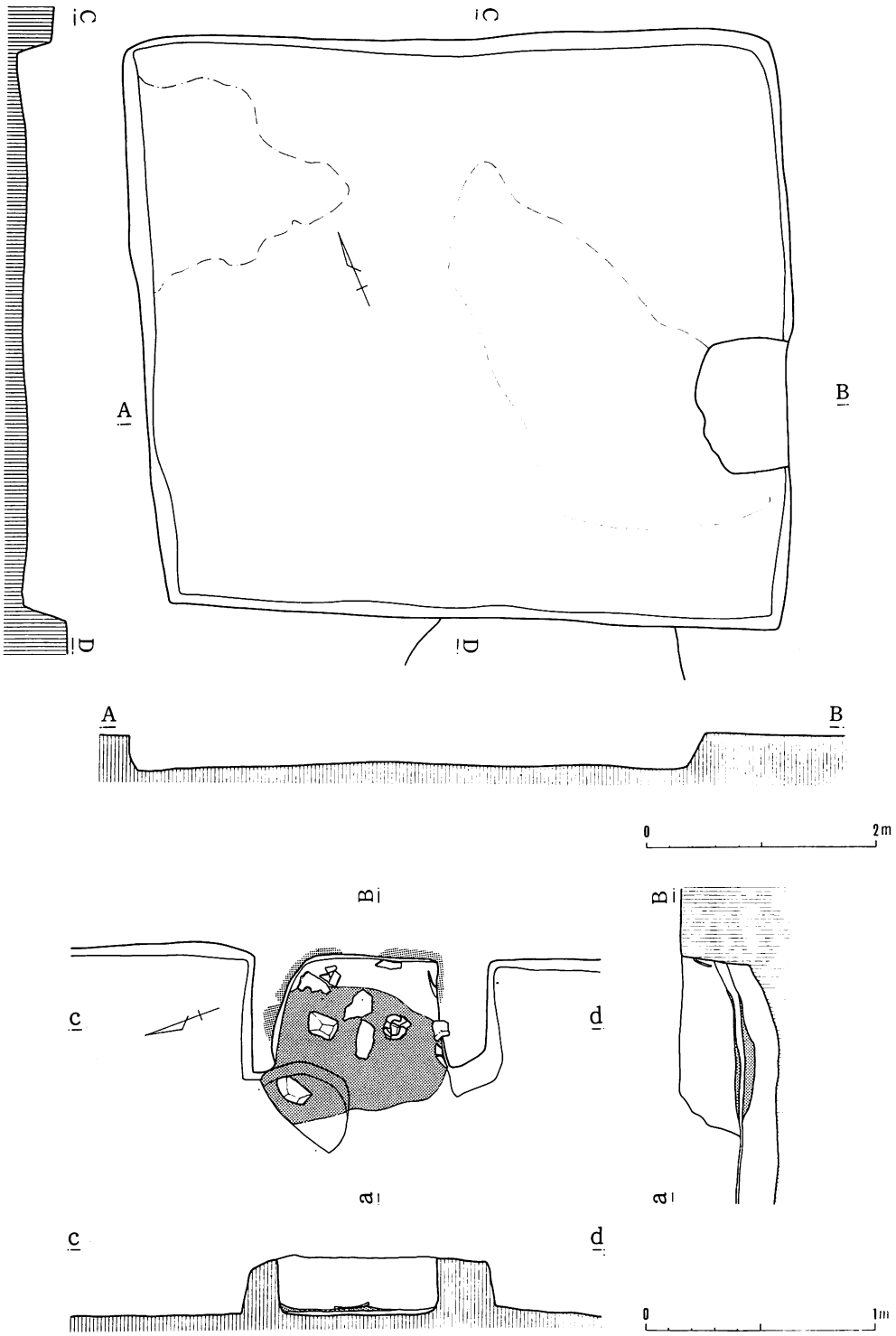
第20図　12号住居址・カマド平面図



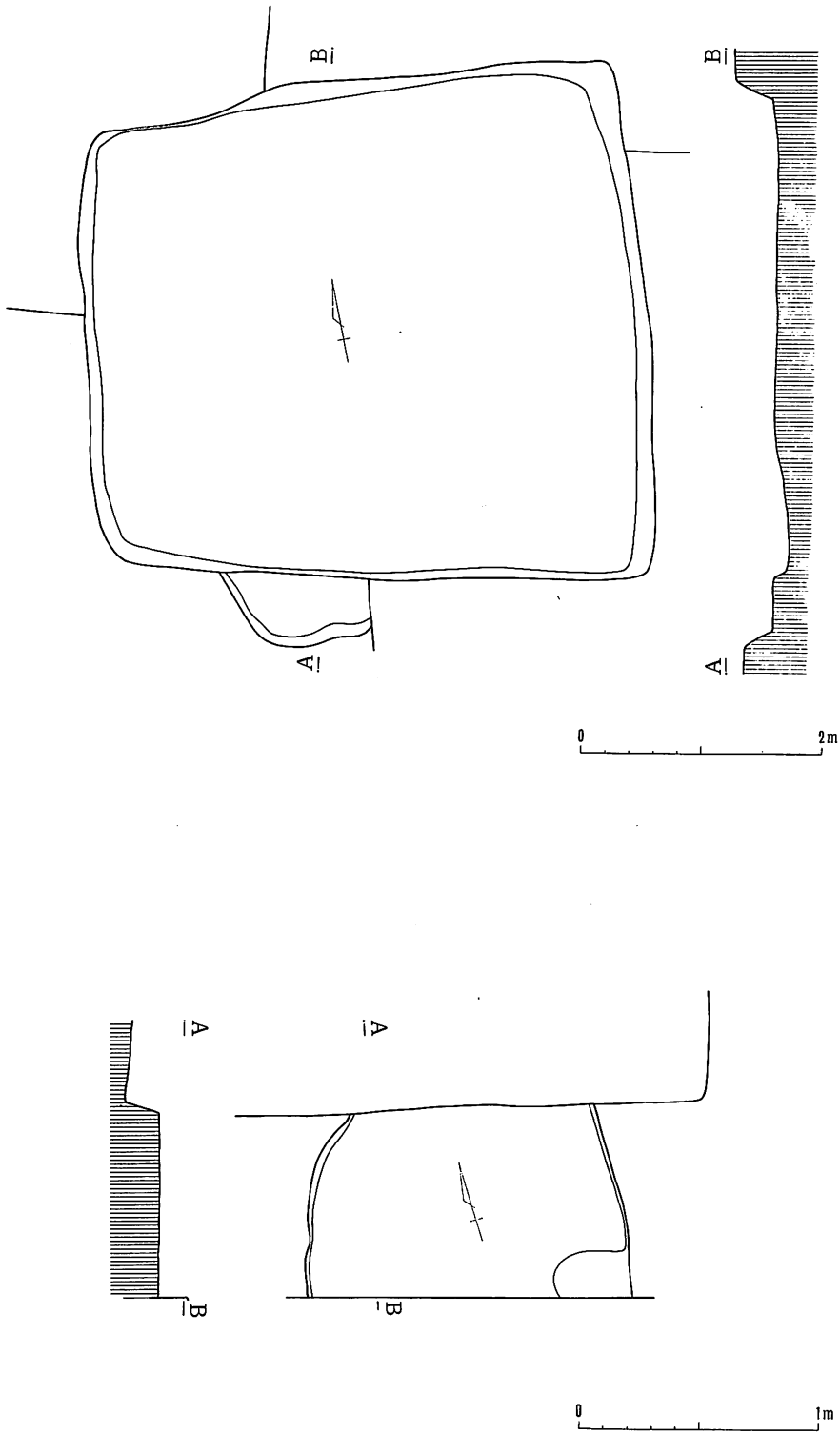
第21図　13号住居址・カマド平面図



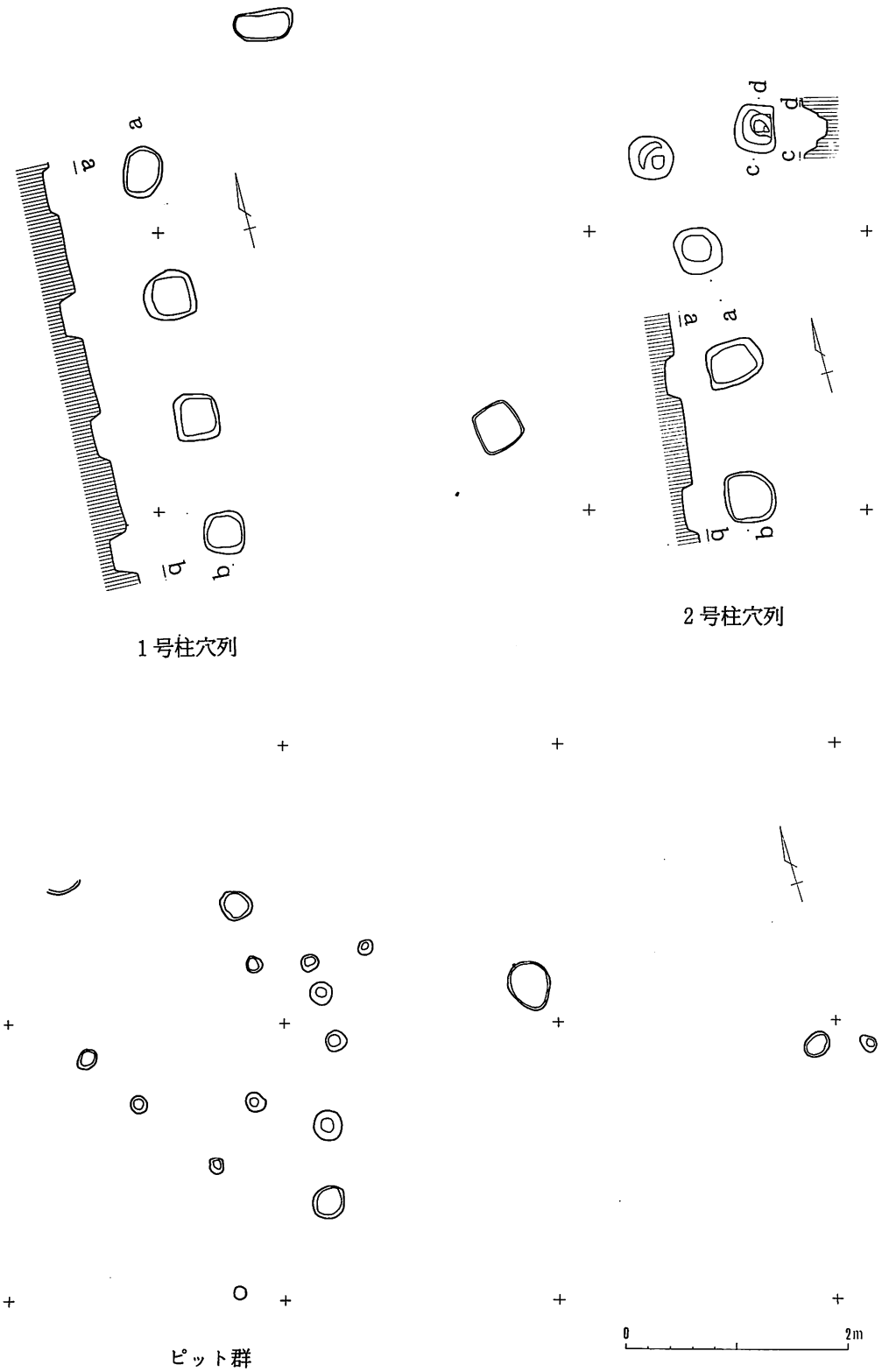
第22図　14号住居址・カマド平面図



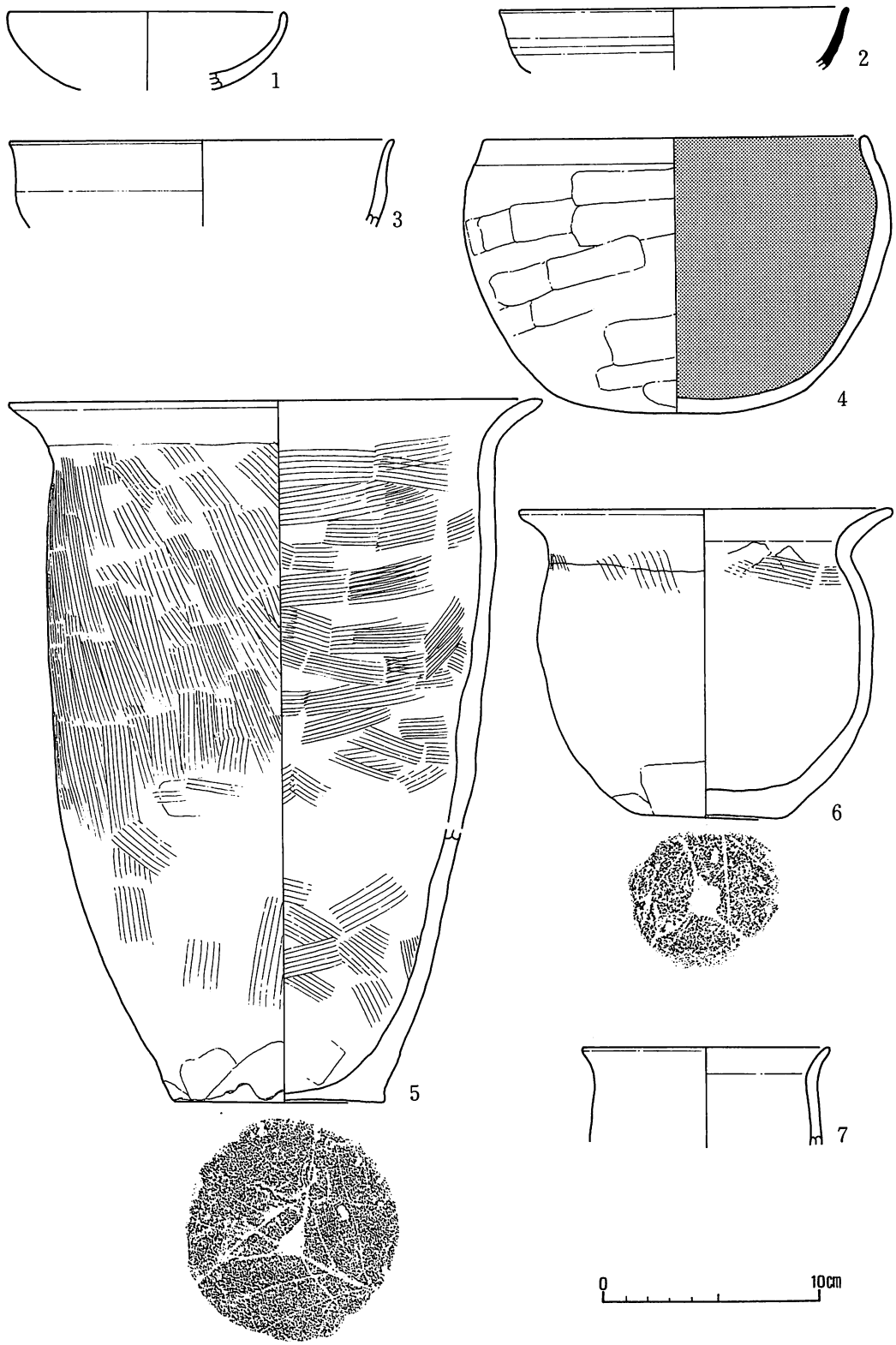
第23図　15号住居址・カマド平面図



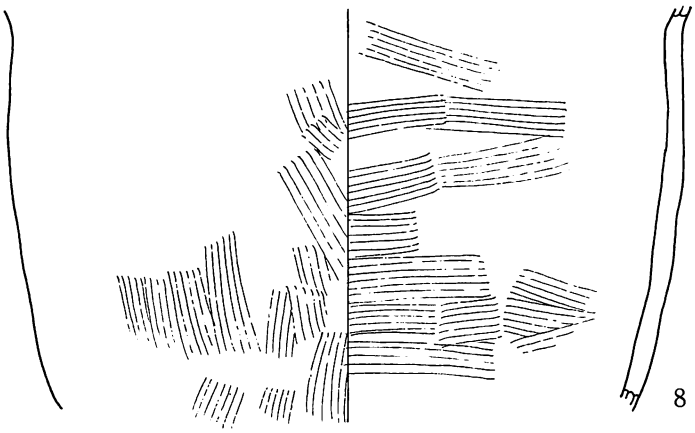
第24図　16・18・17号住居址平面図

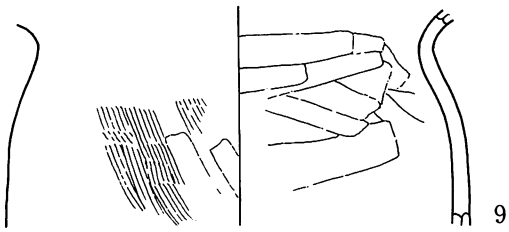


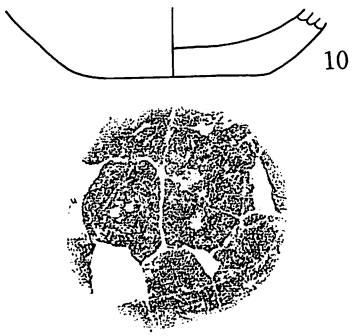
第25図　1・2号柱穴列、ピット群平面図

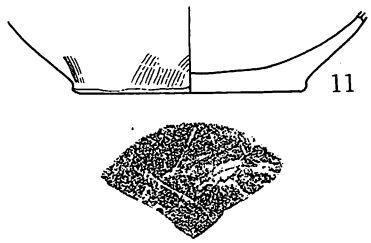


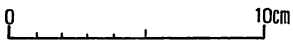
第26図　1号住居址出土遺物(1)



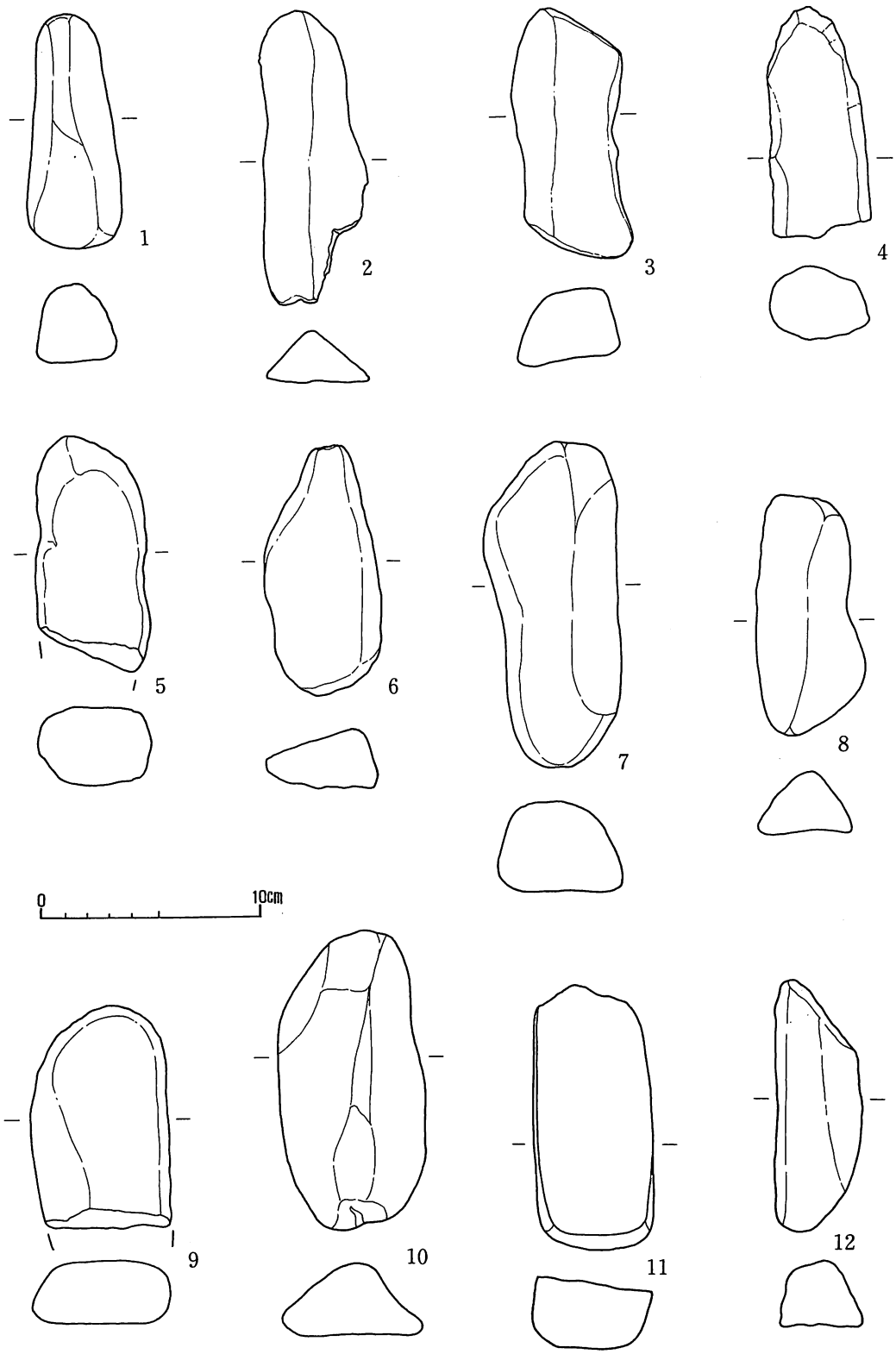




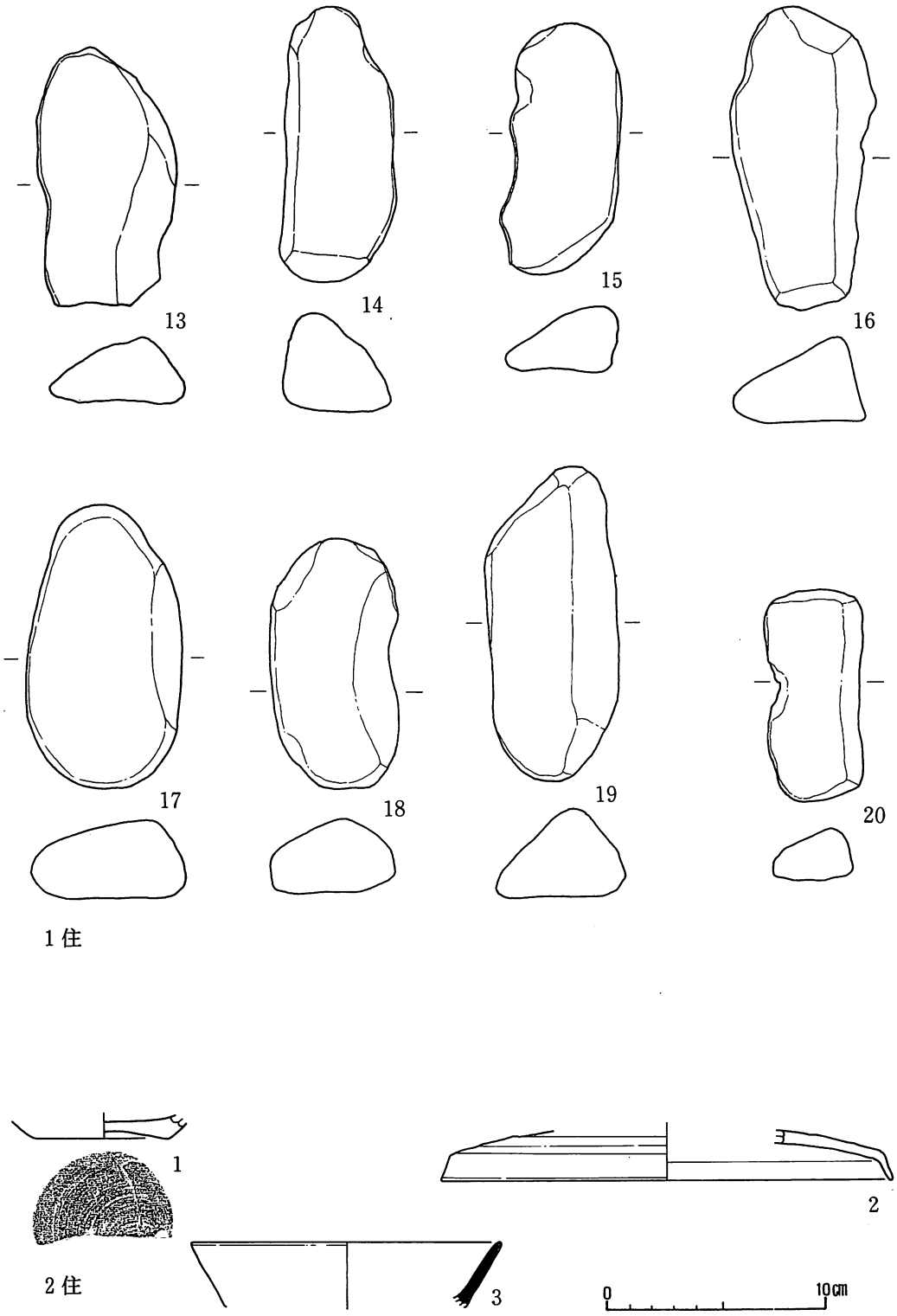




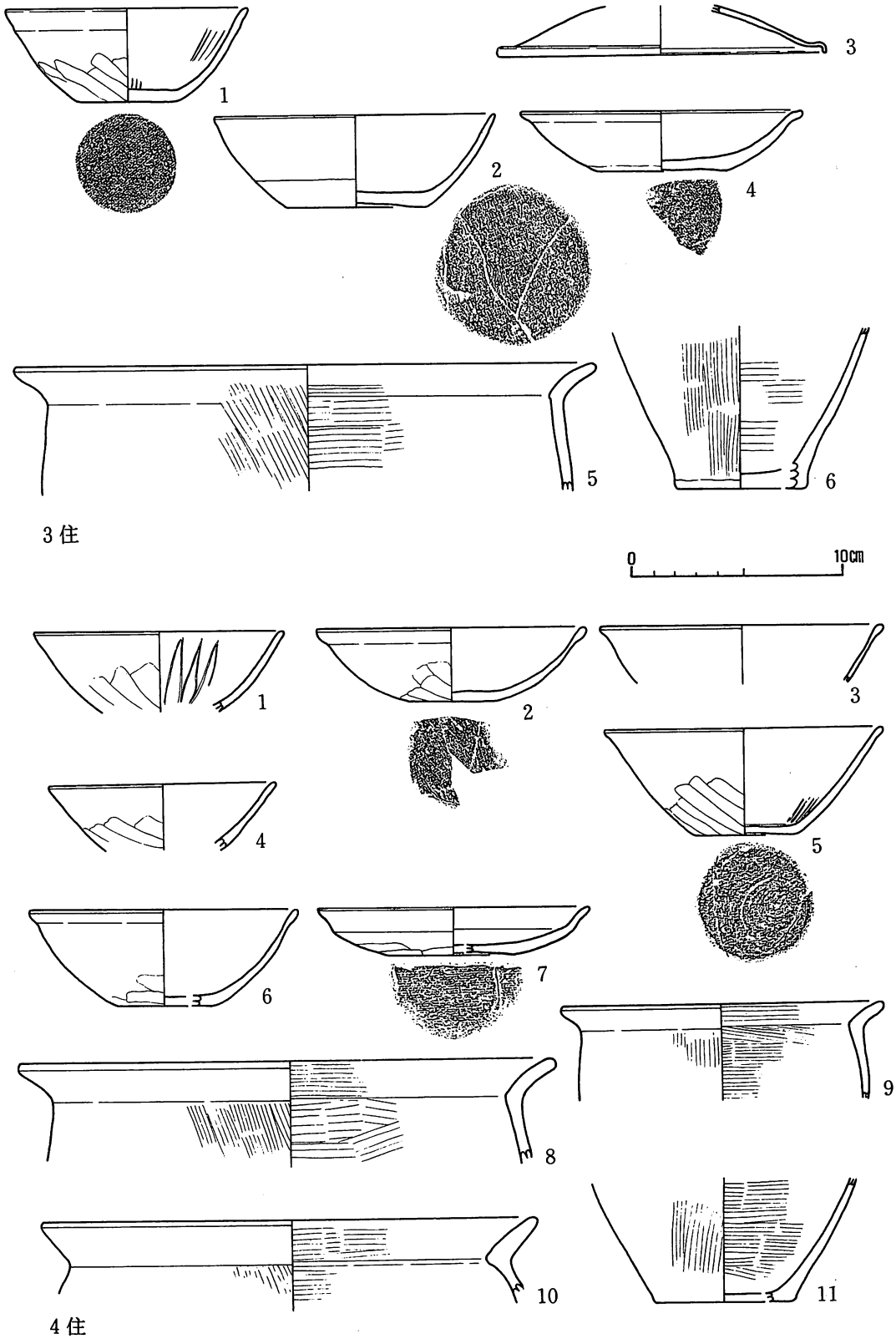
第27図　1号住居址出土遺物(2)



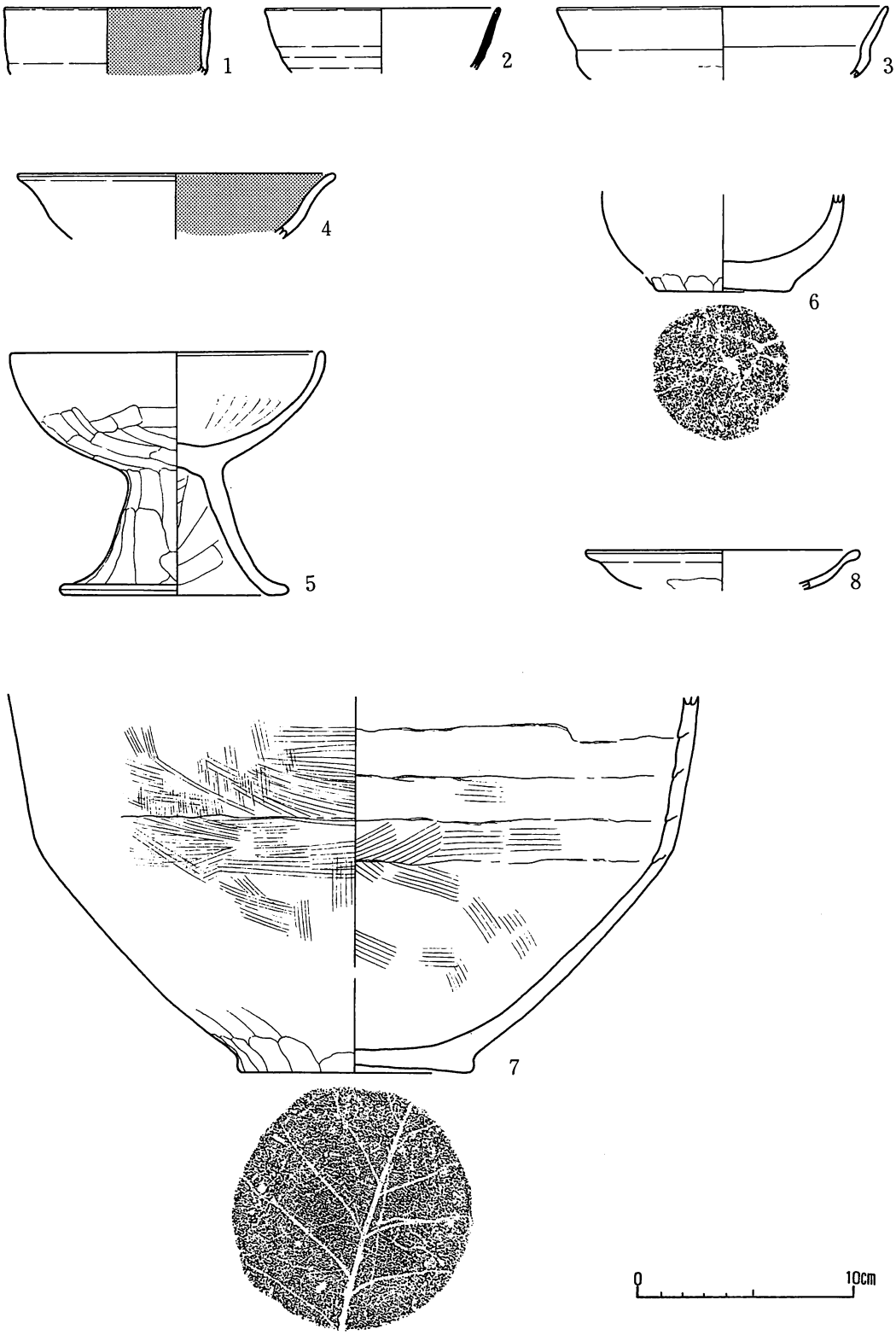
第28図　1号住居址出土遺物(3)



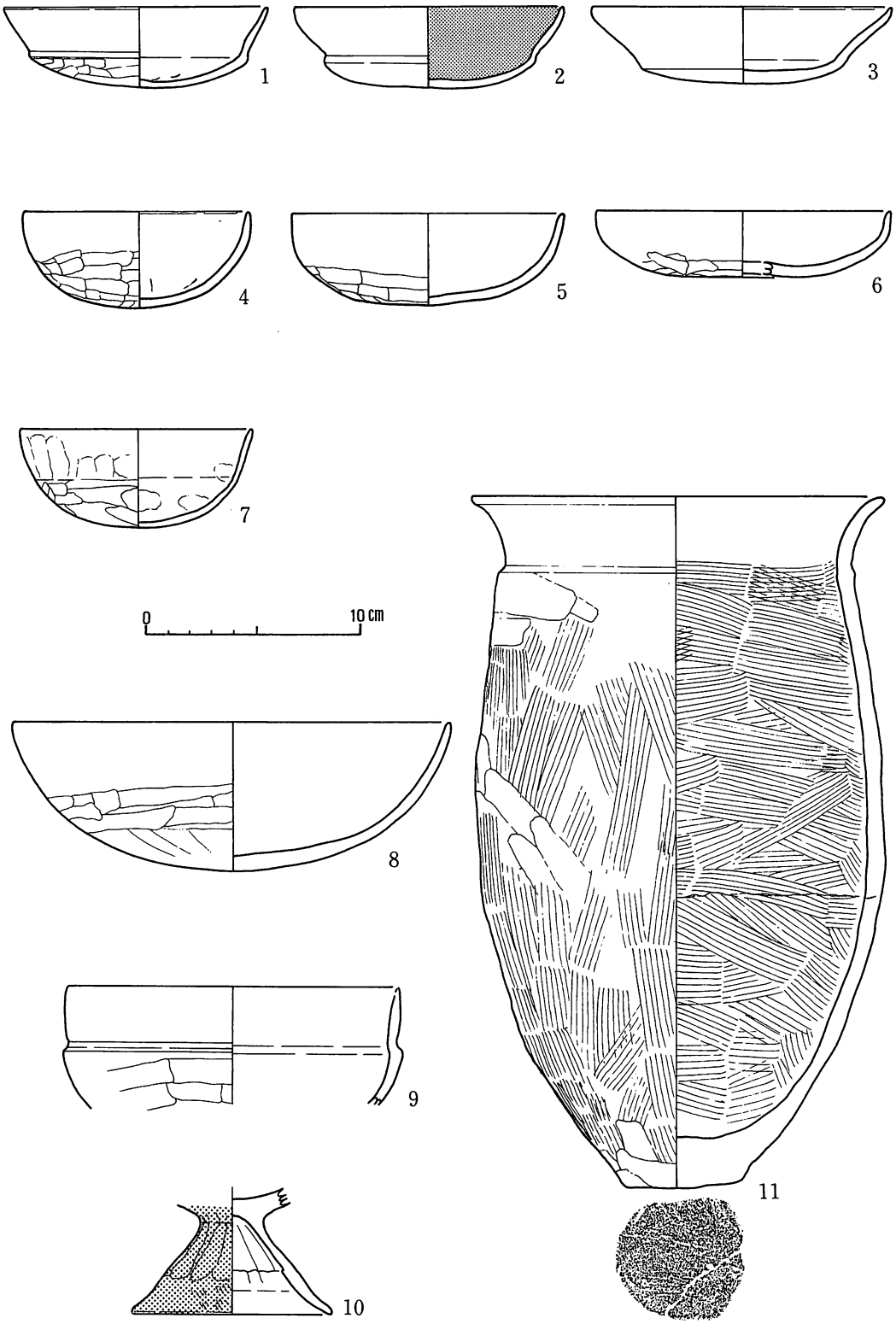
第29図　1号住居址出土遺物(4)、2号住居址出土遺物



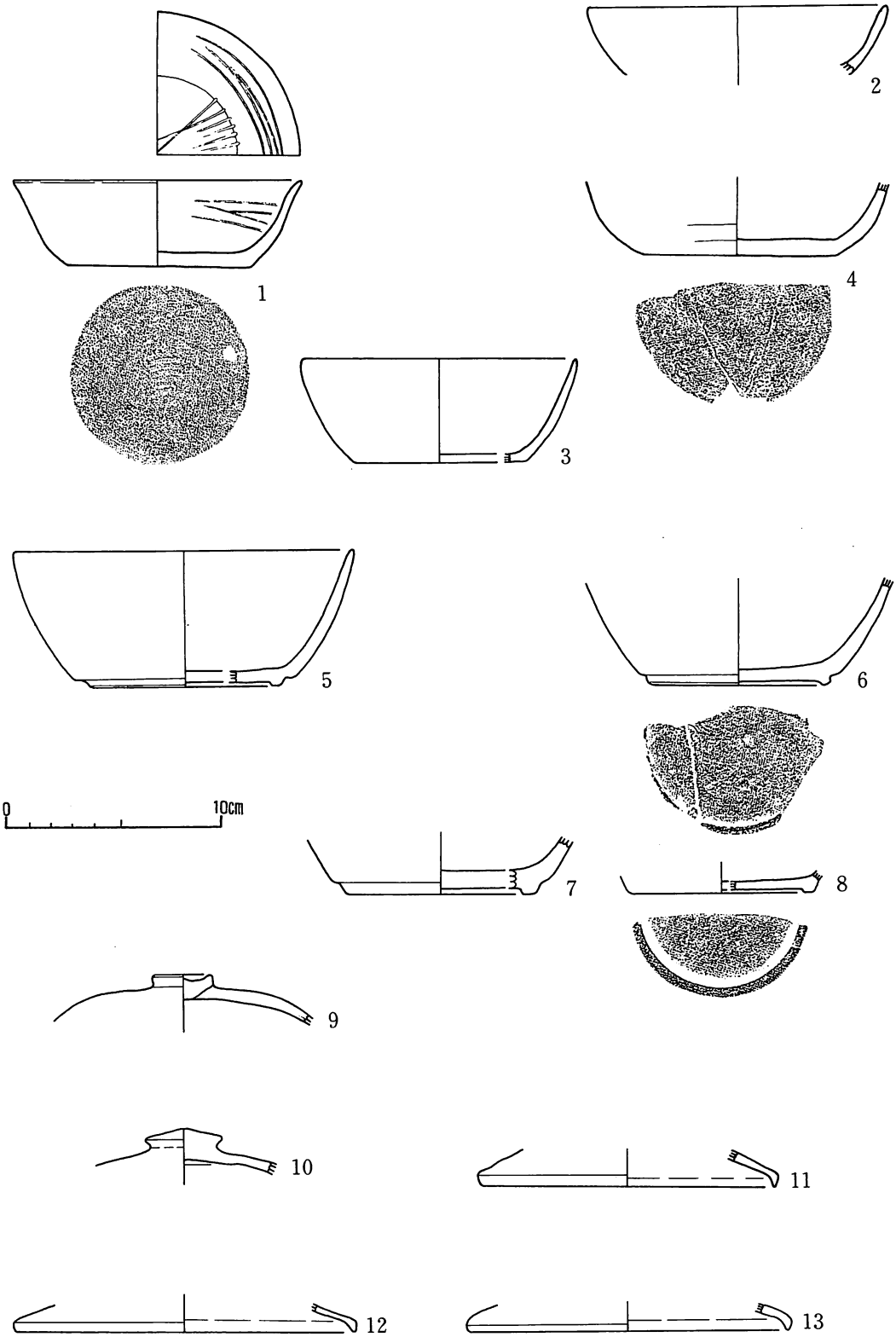
第30図　3号住居址、4号住居址出土遺物



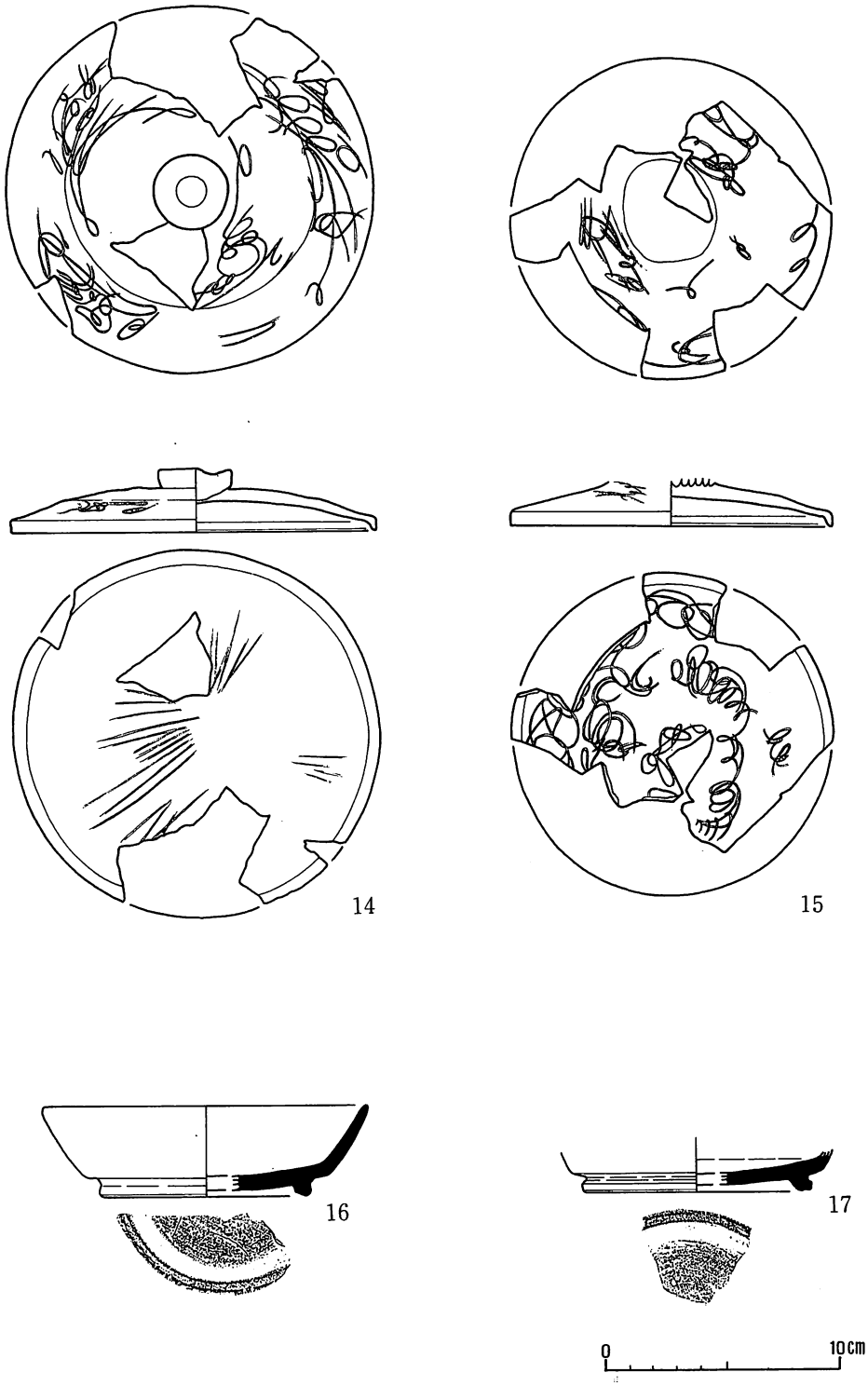
第31図　5号住居址出土遺物



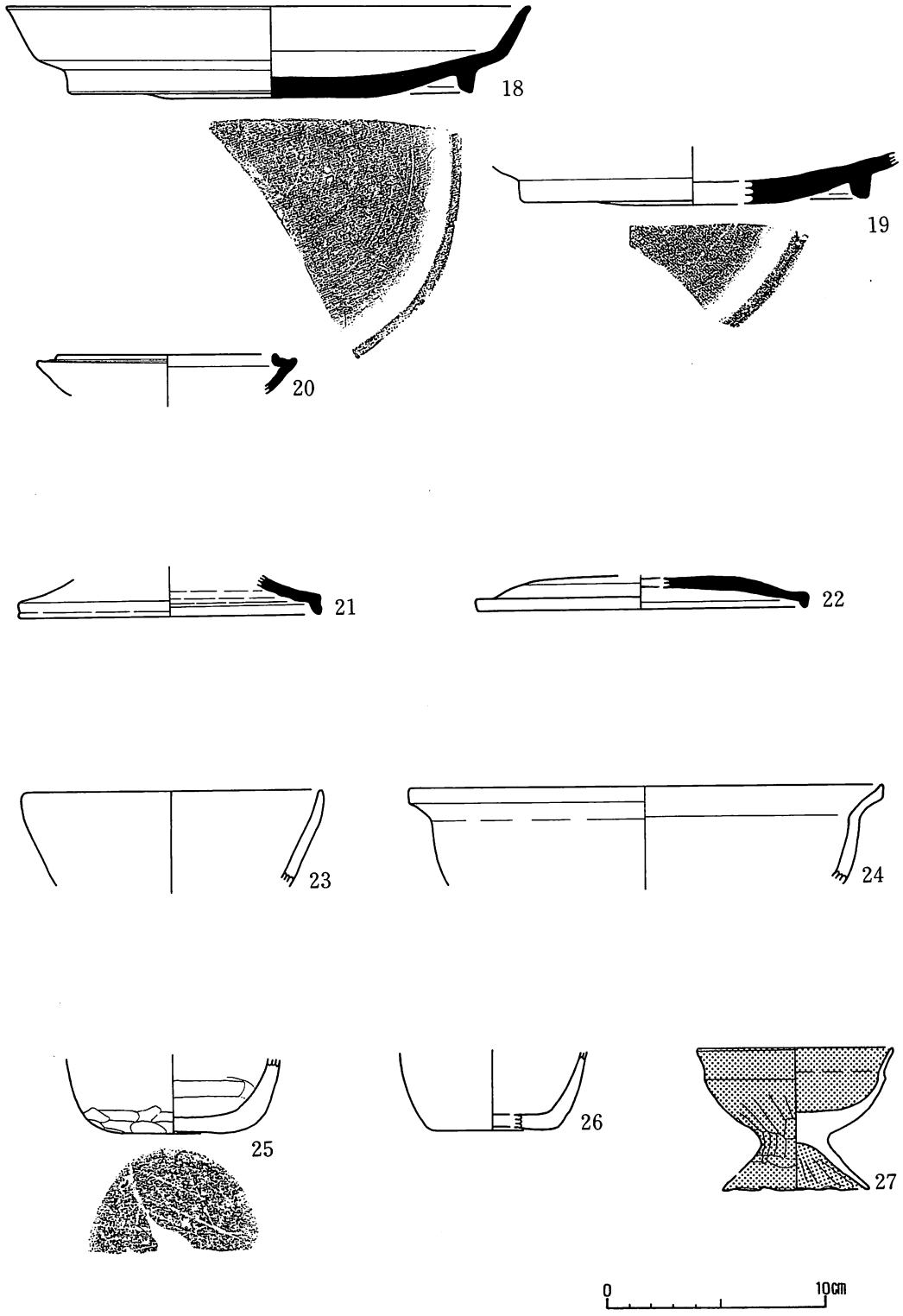
第32図　6号住居址出土遺物



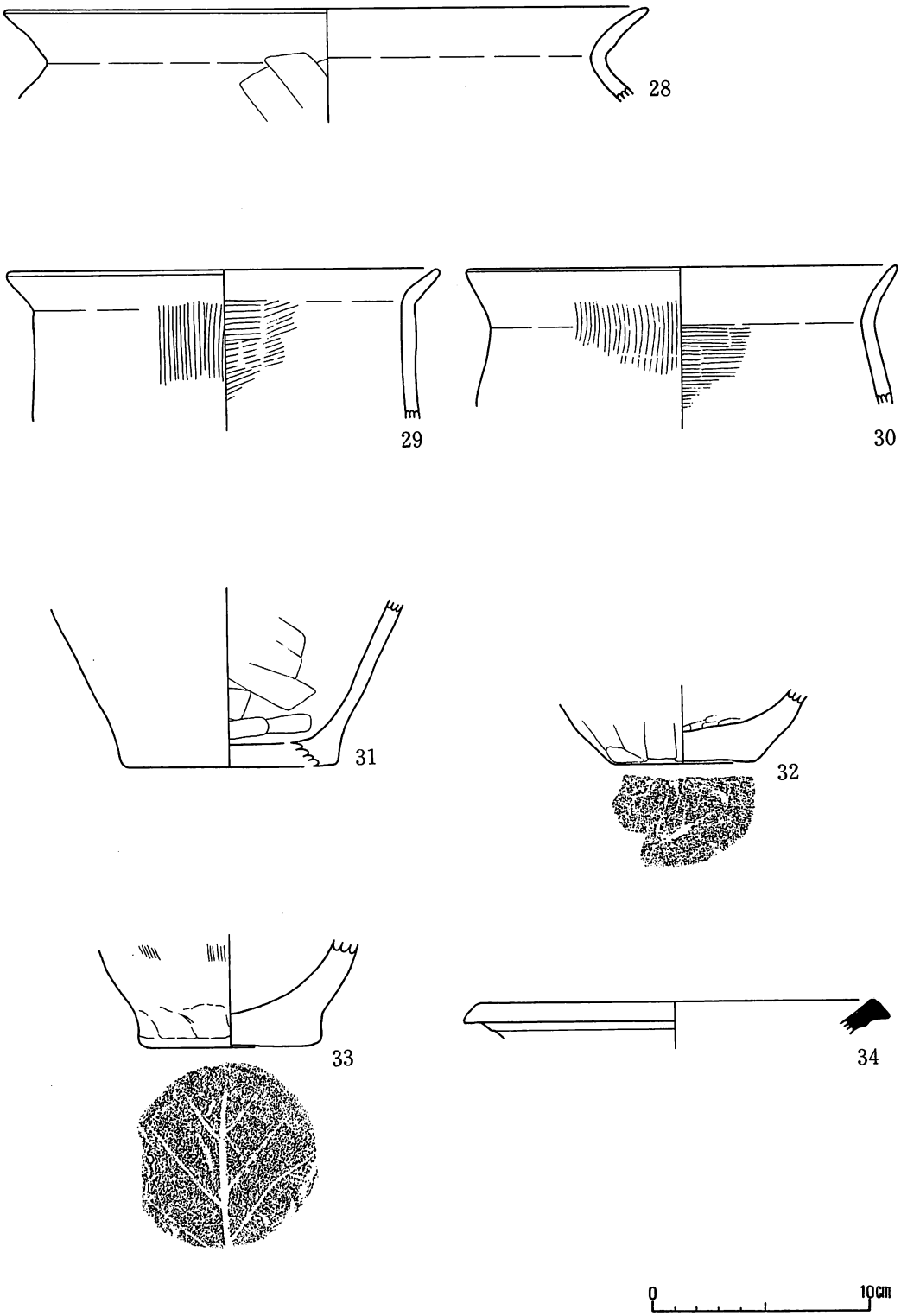
第33図　7号住居址出土遺物(1)



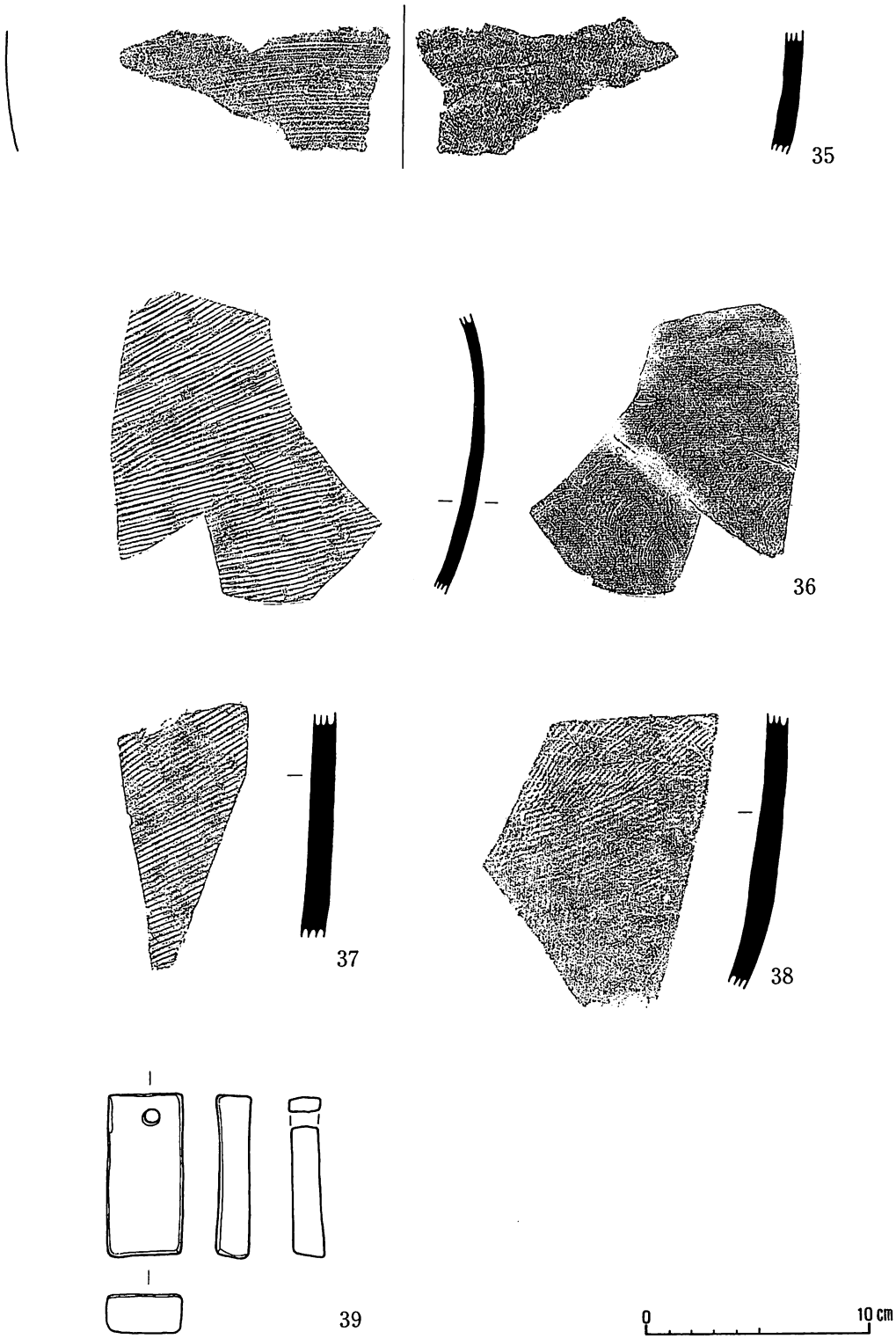
第34図　7号住居址出土遺物(2)



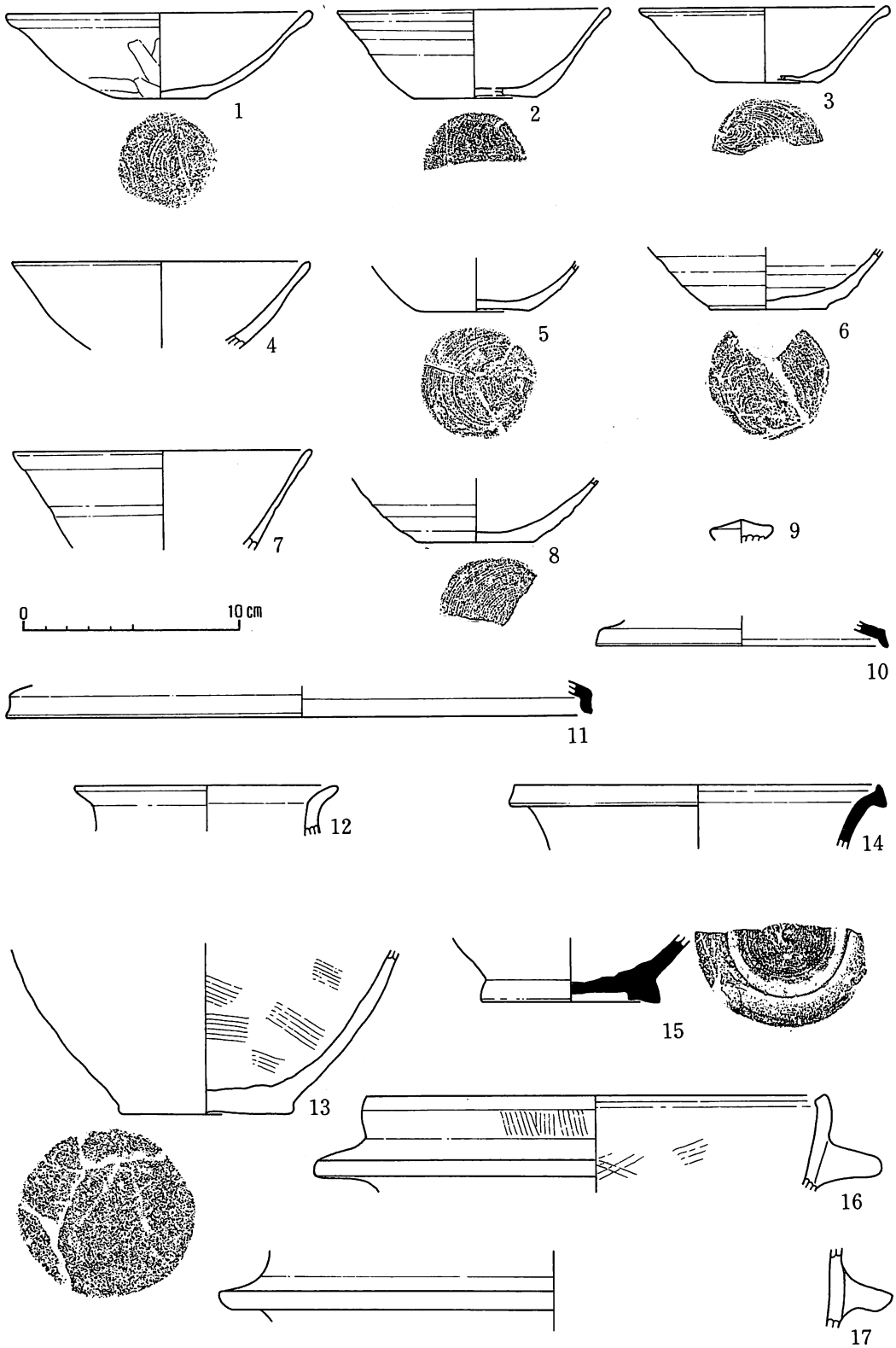
第35図　7号住居址出土遺物(3)



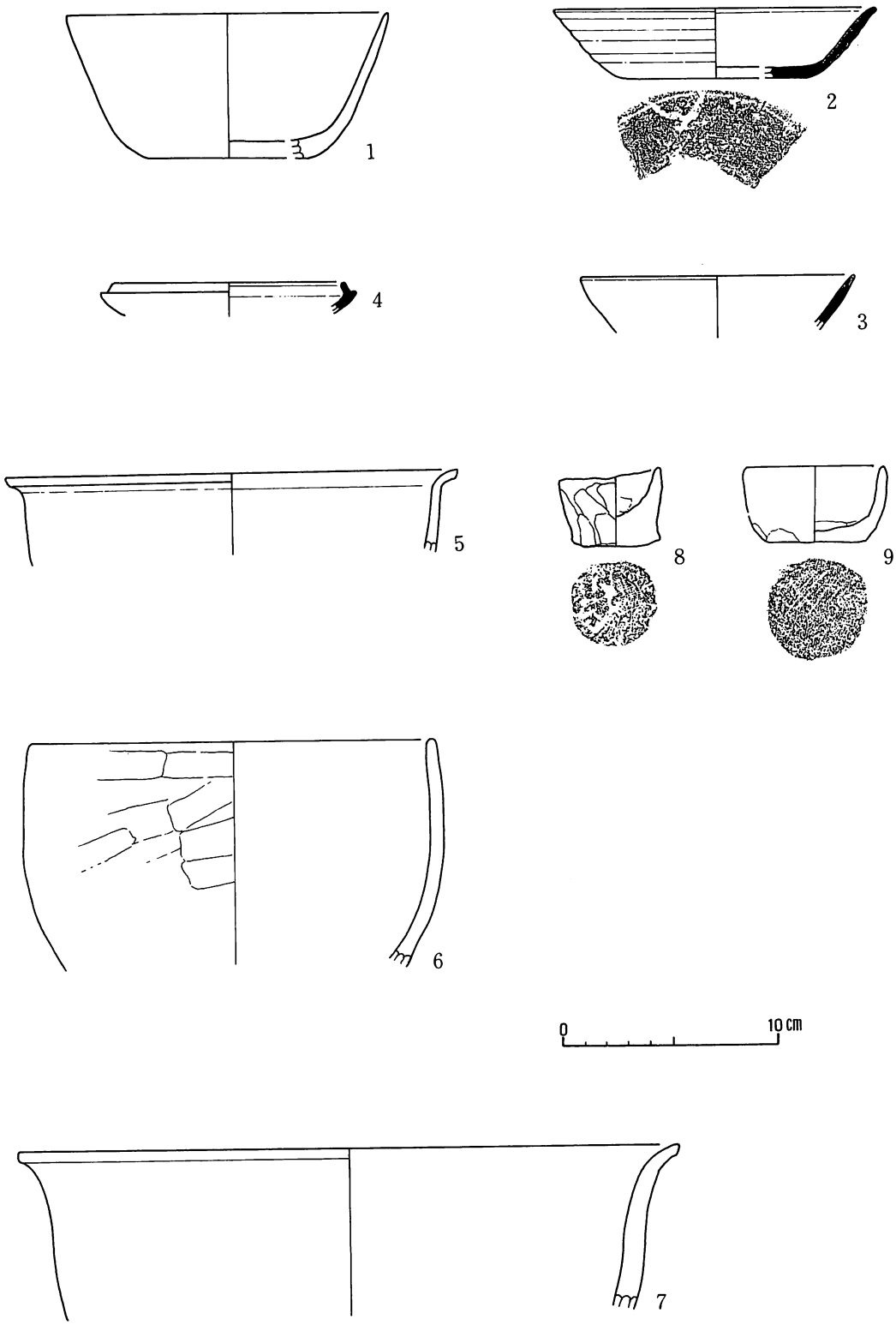
第36図　7号住居址出土遺物(4)



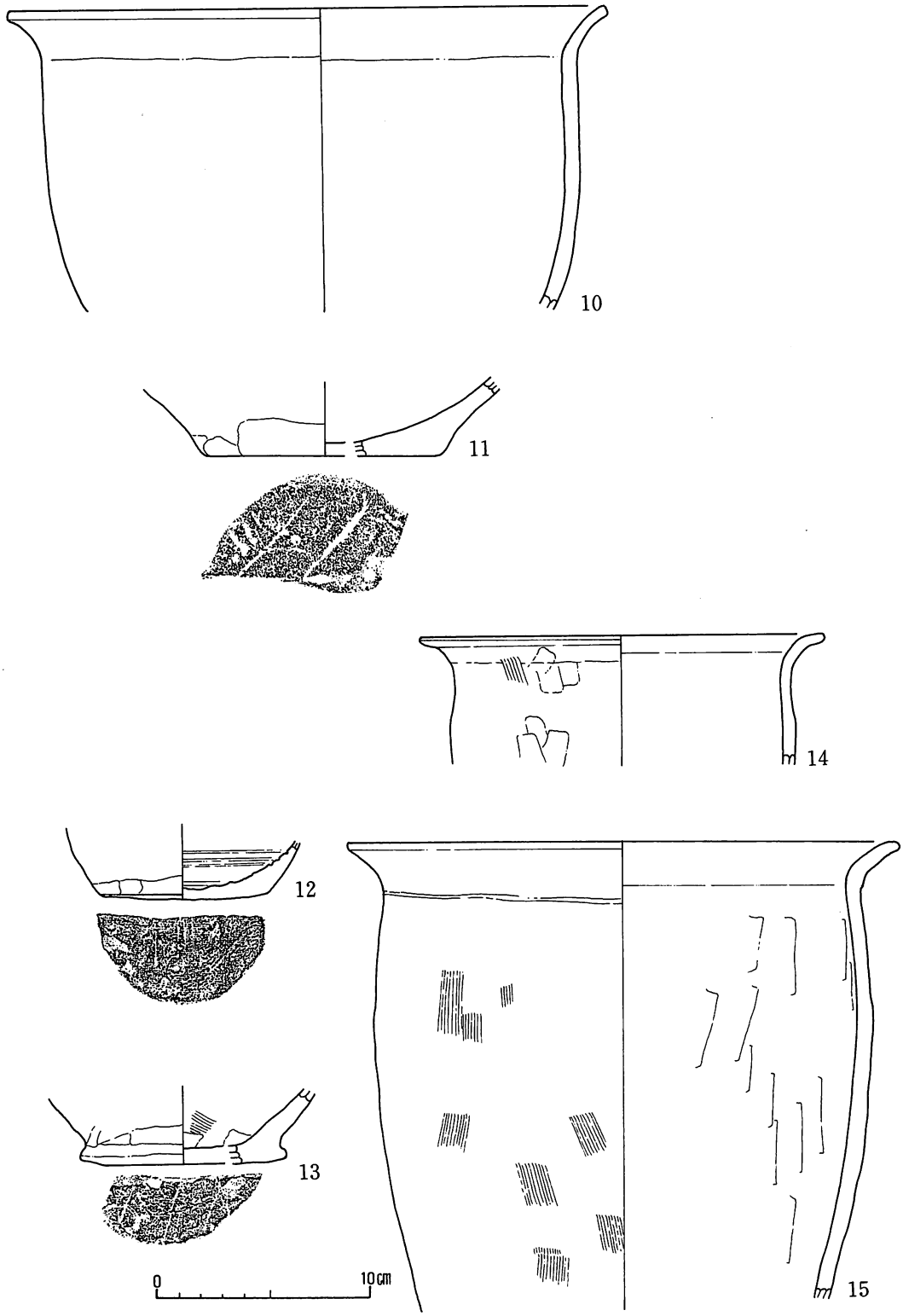
第37図　7号住居址出土遺物(5)



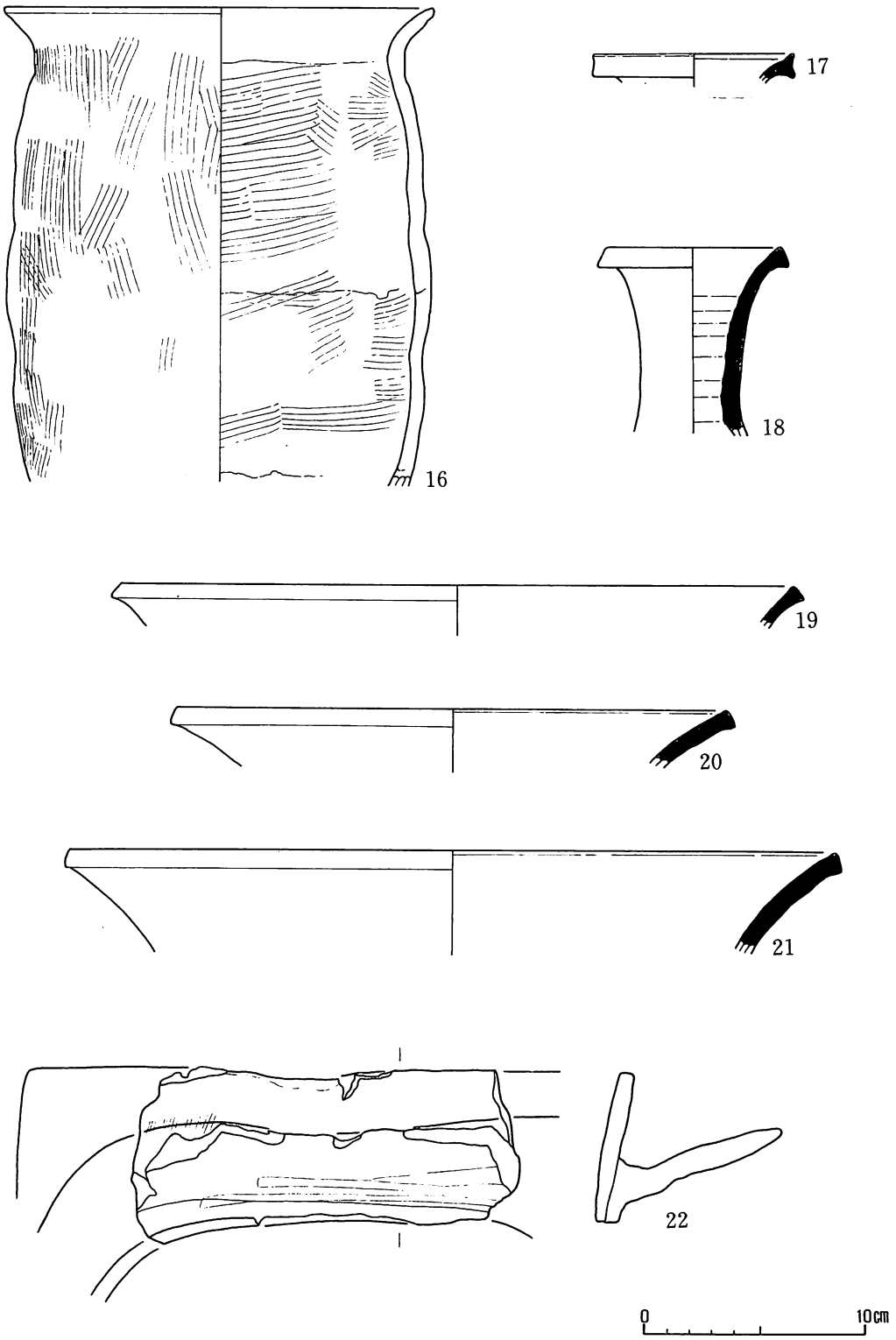
第38図　8号住居址出土遺物



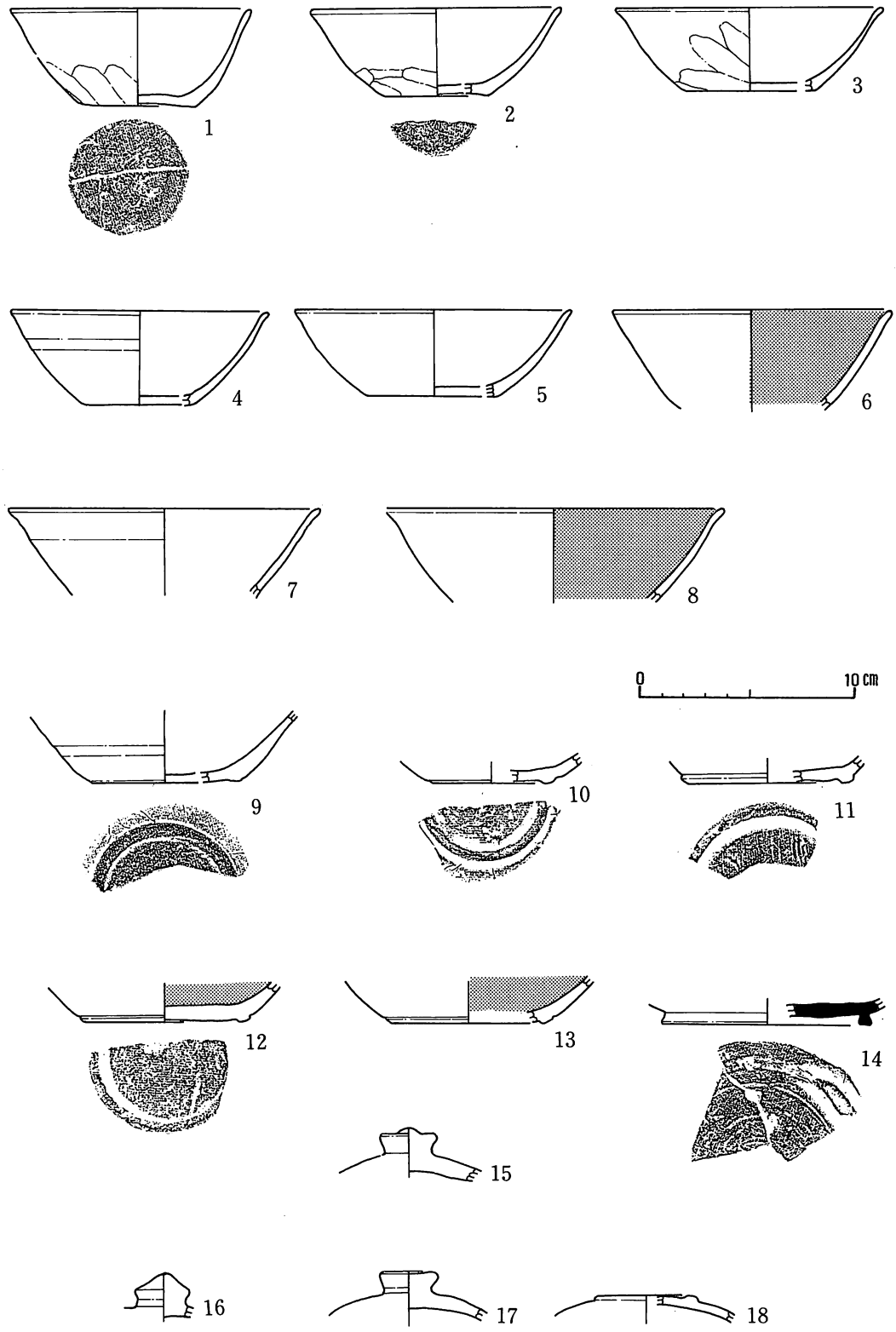
第39図　9号住居址出土遺物(1)



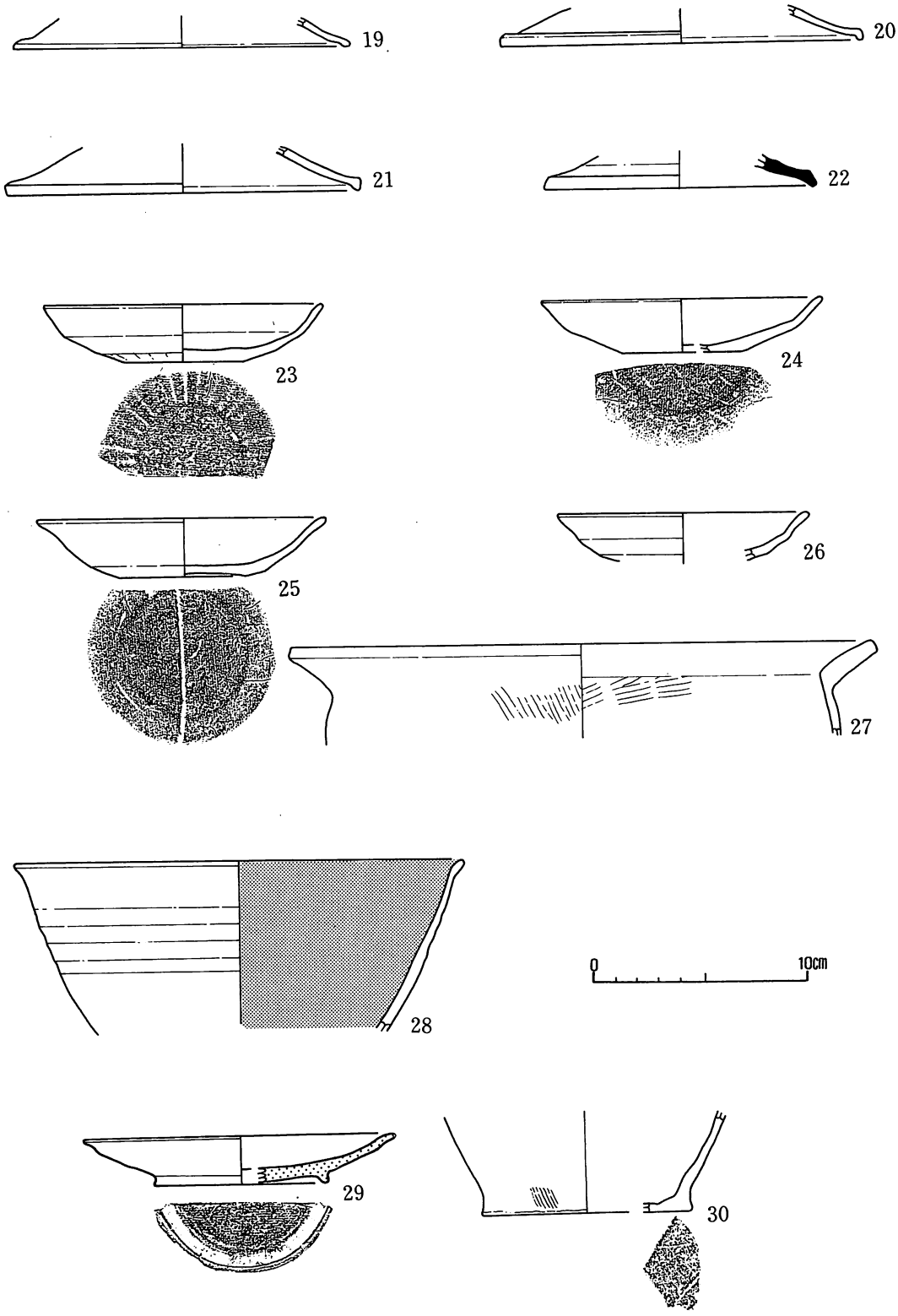
第40図　9号住居址出土遺物(2)



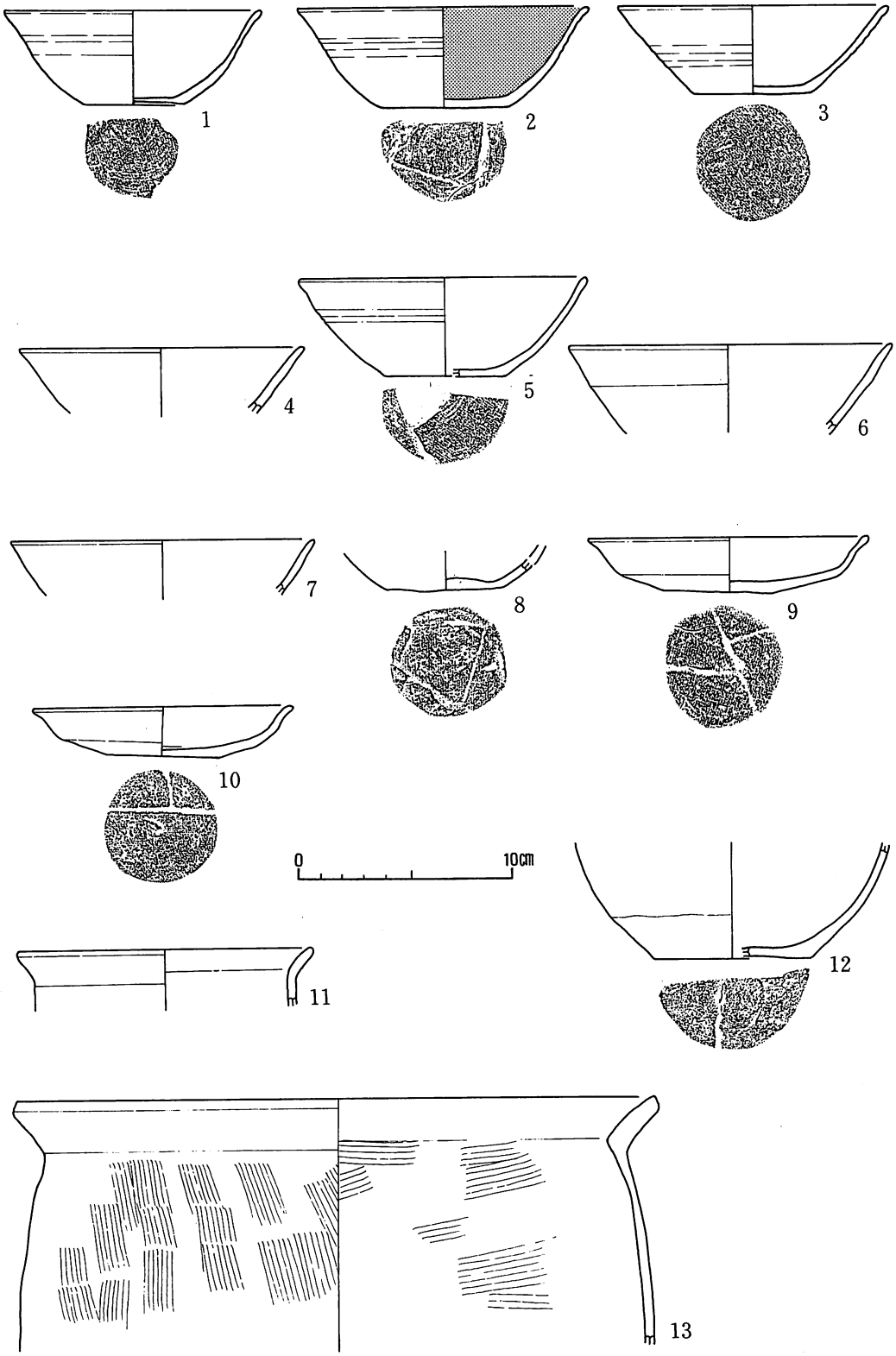
第41図　9号住居址出土遺物(3)



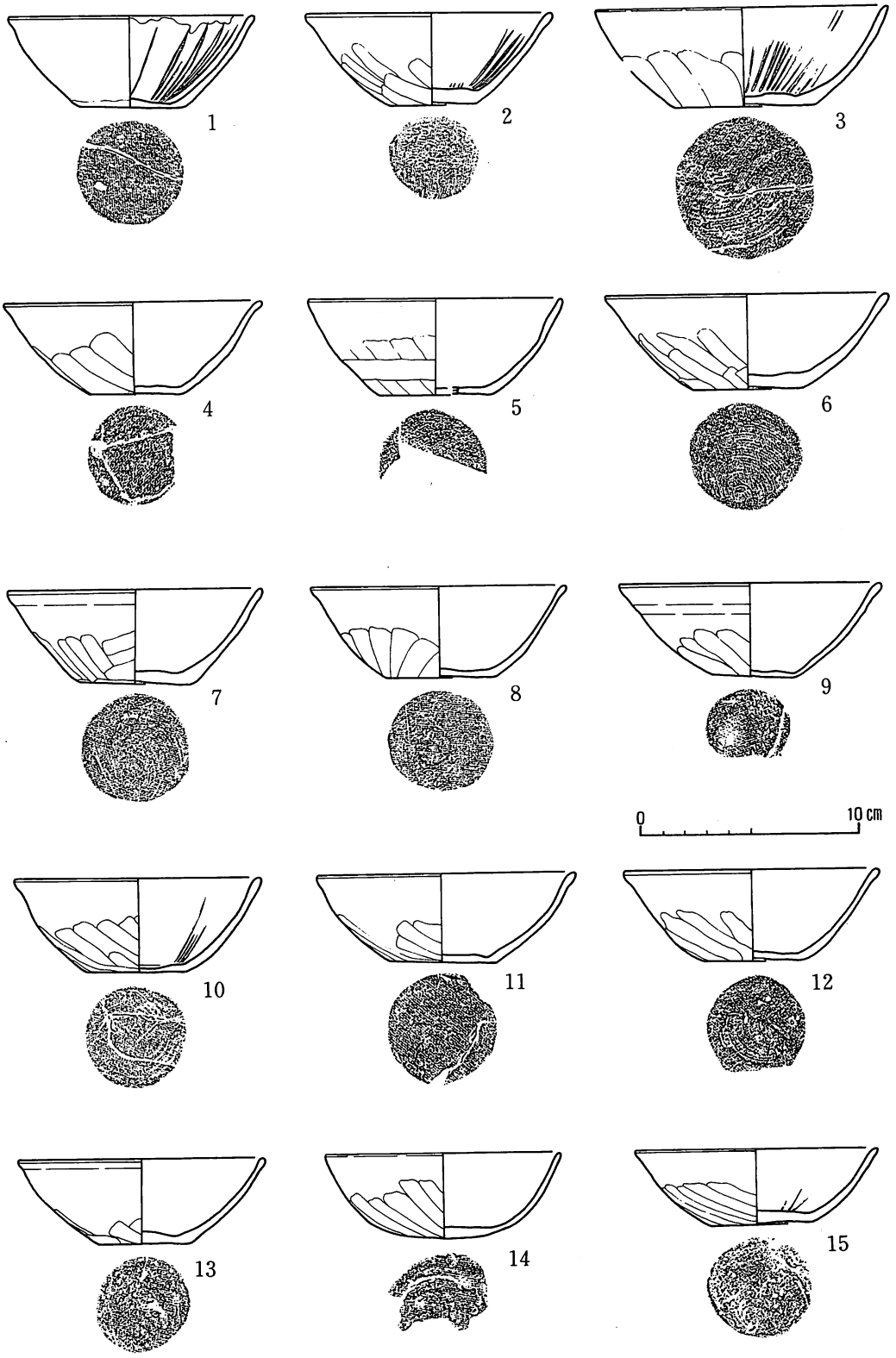
第42図　10号住居址出土遺物(1)



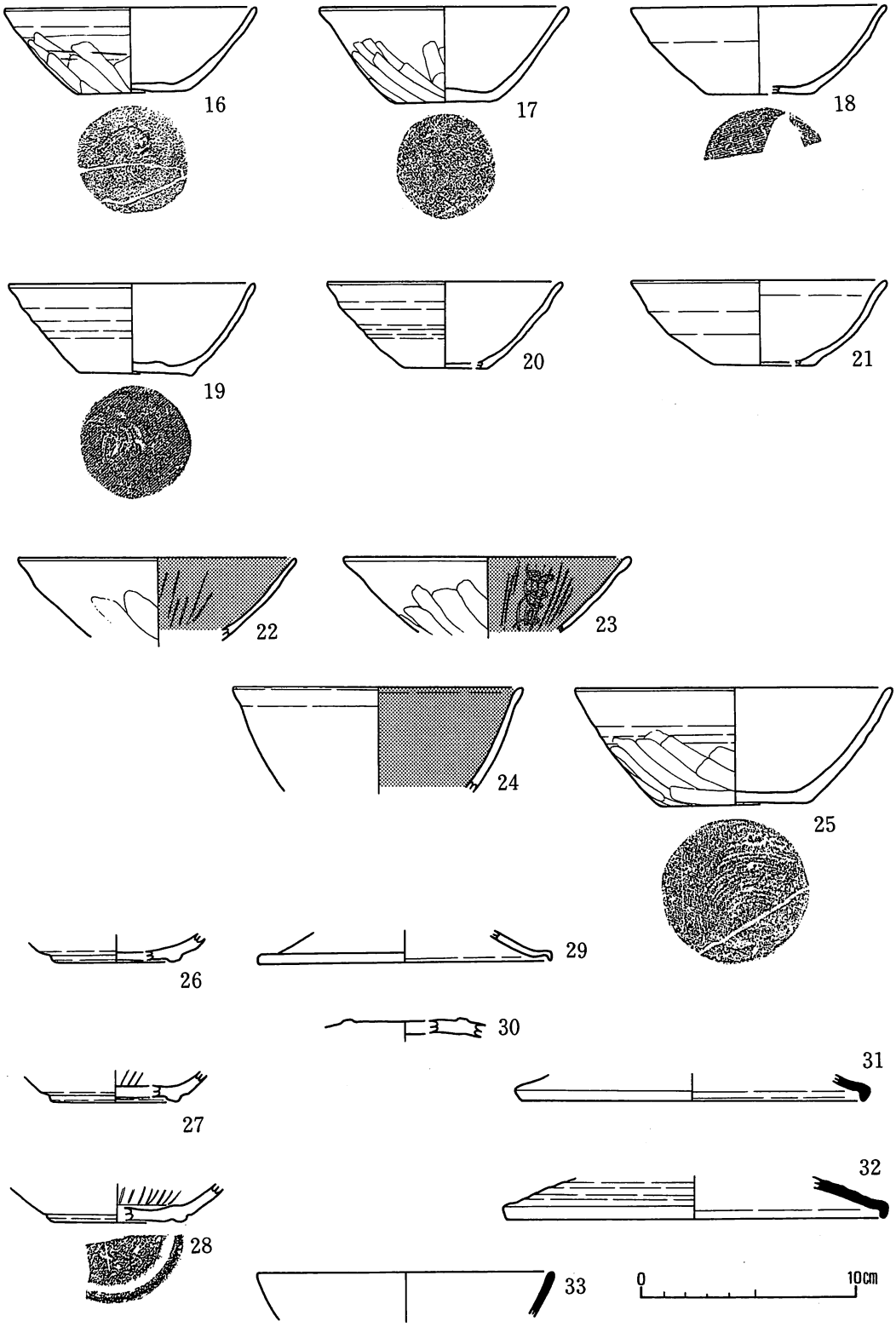
第43図　10号住居址出土遺物(2)



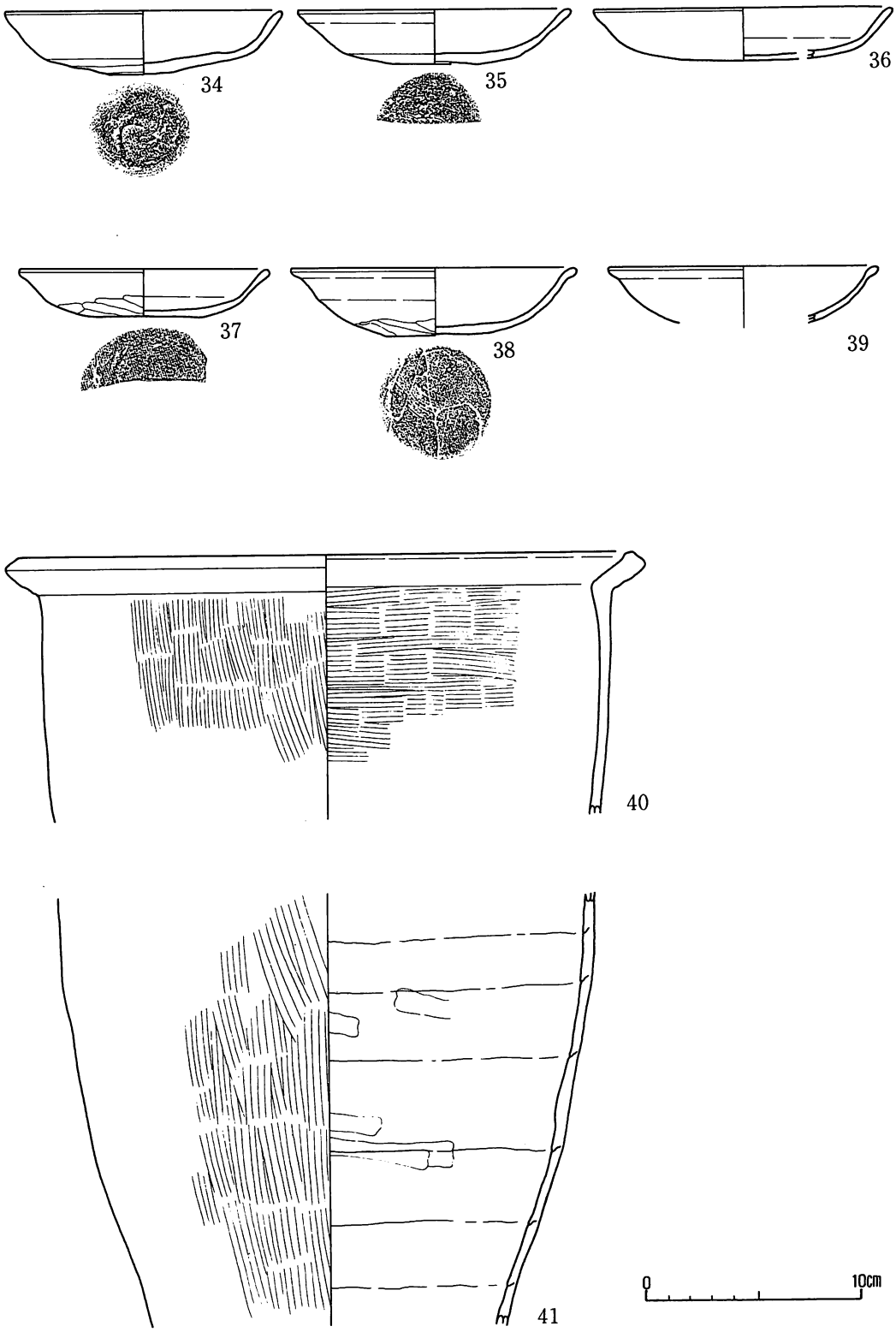
第44図　12号住居址出土遺物



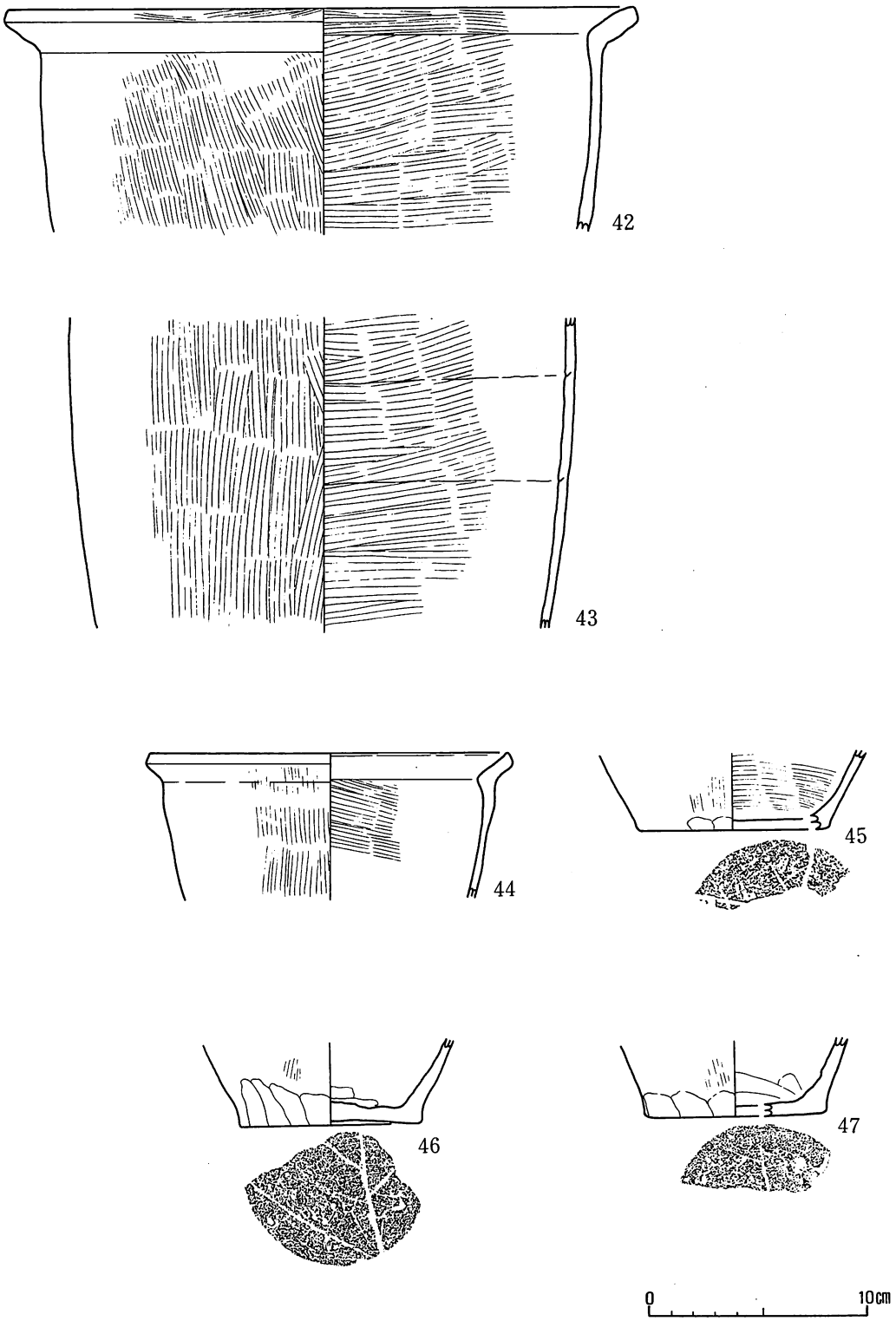
第45図　13号住居址出土遺物(1)



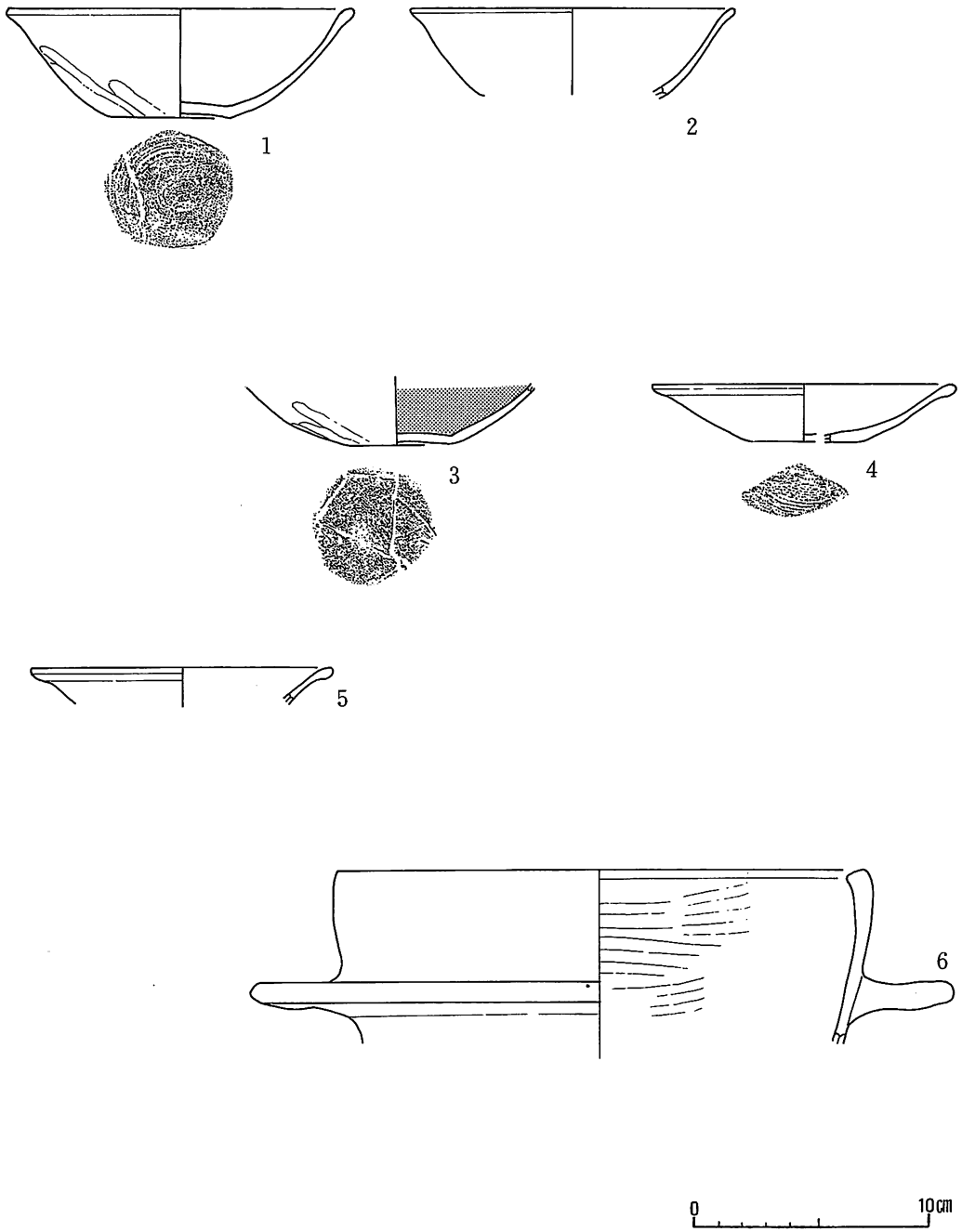
第46図　13号住居址出土遺物(2)



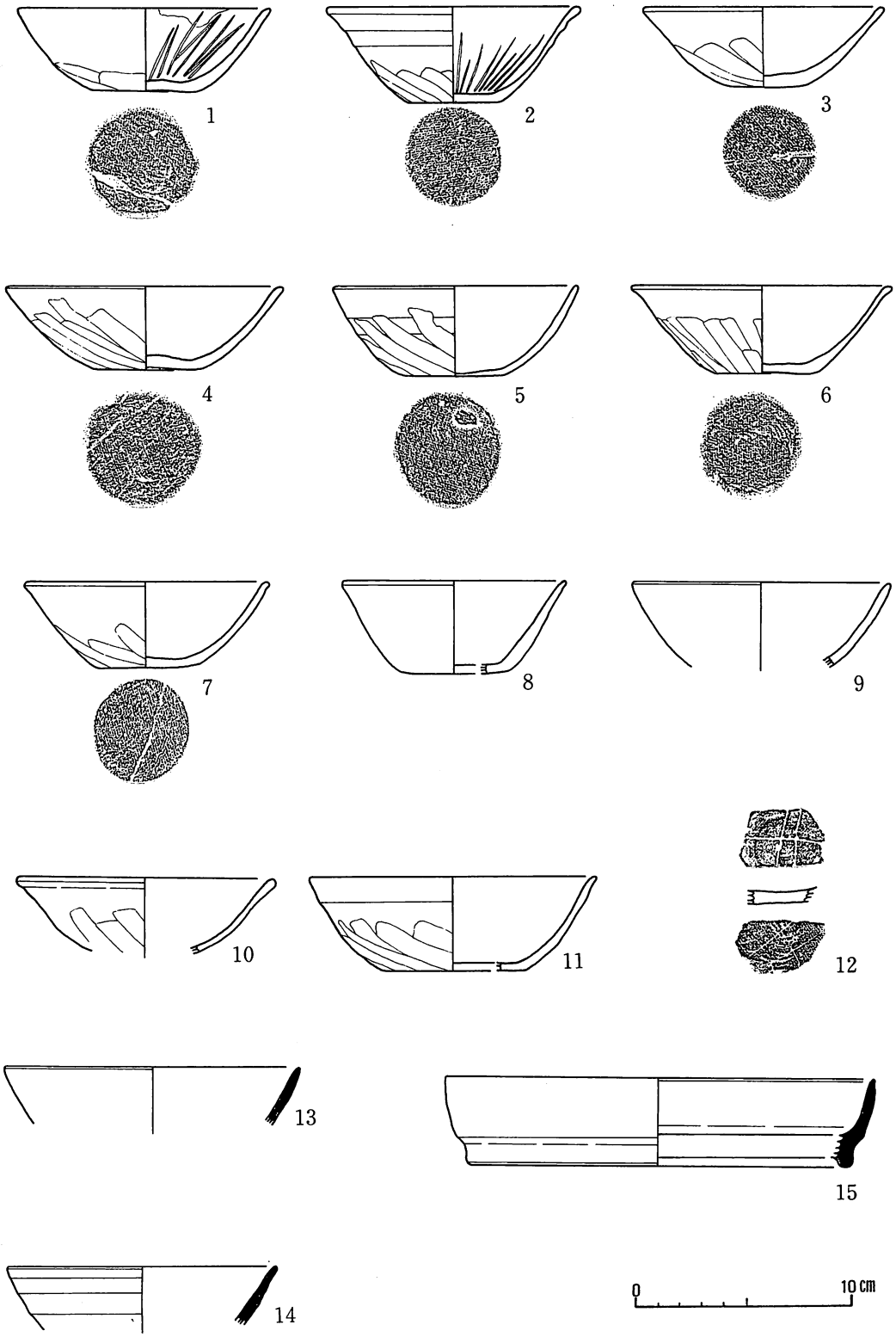
第47図　13号住居址出土遺物(3)



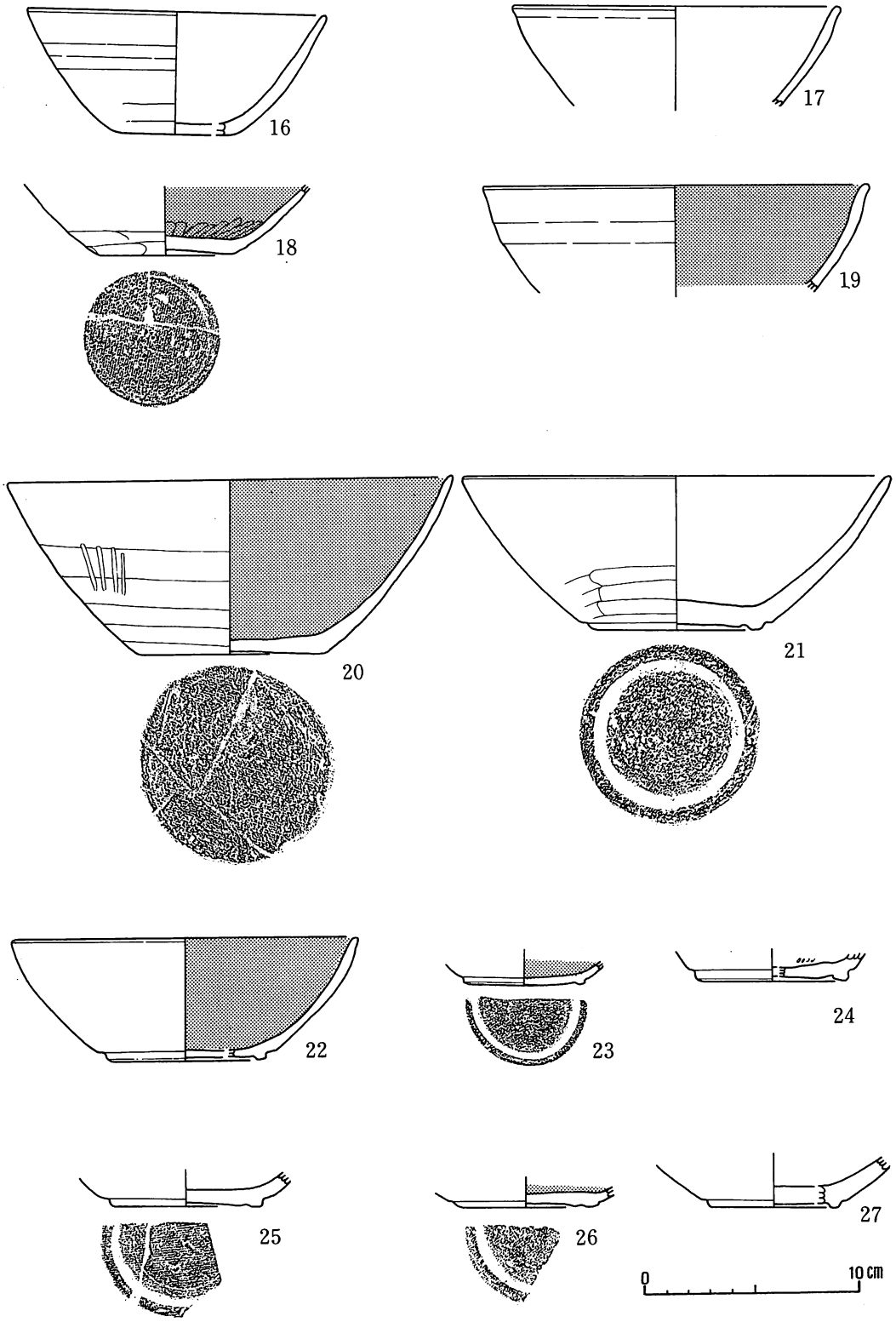
第48図　13号住居址出土遺物(4)



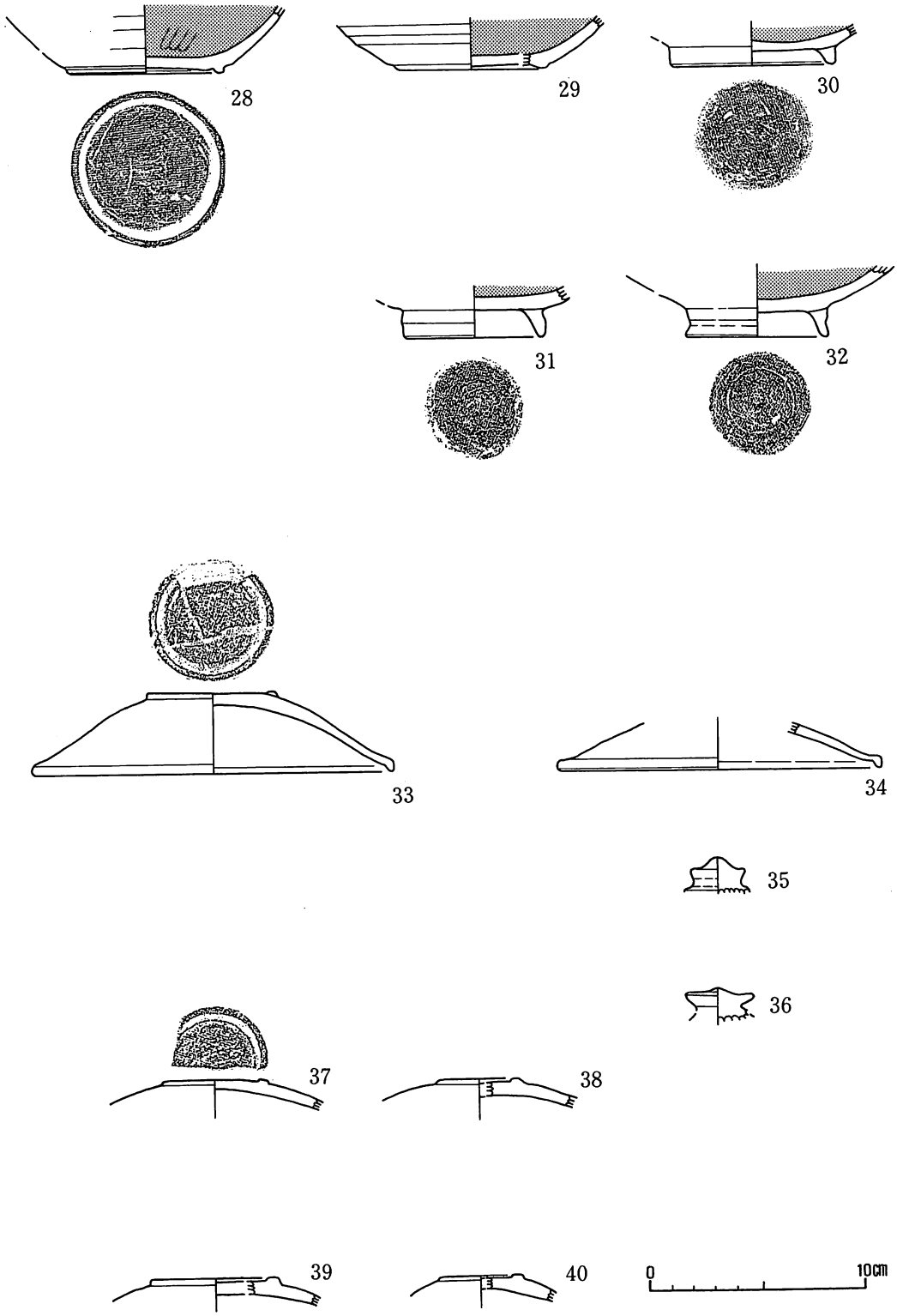
第49図　14号住居址出土遺物



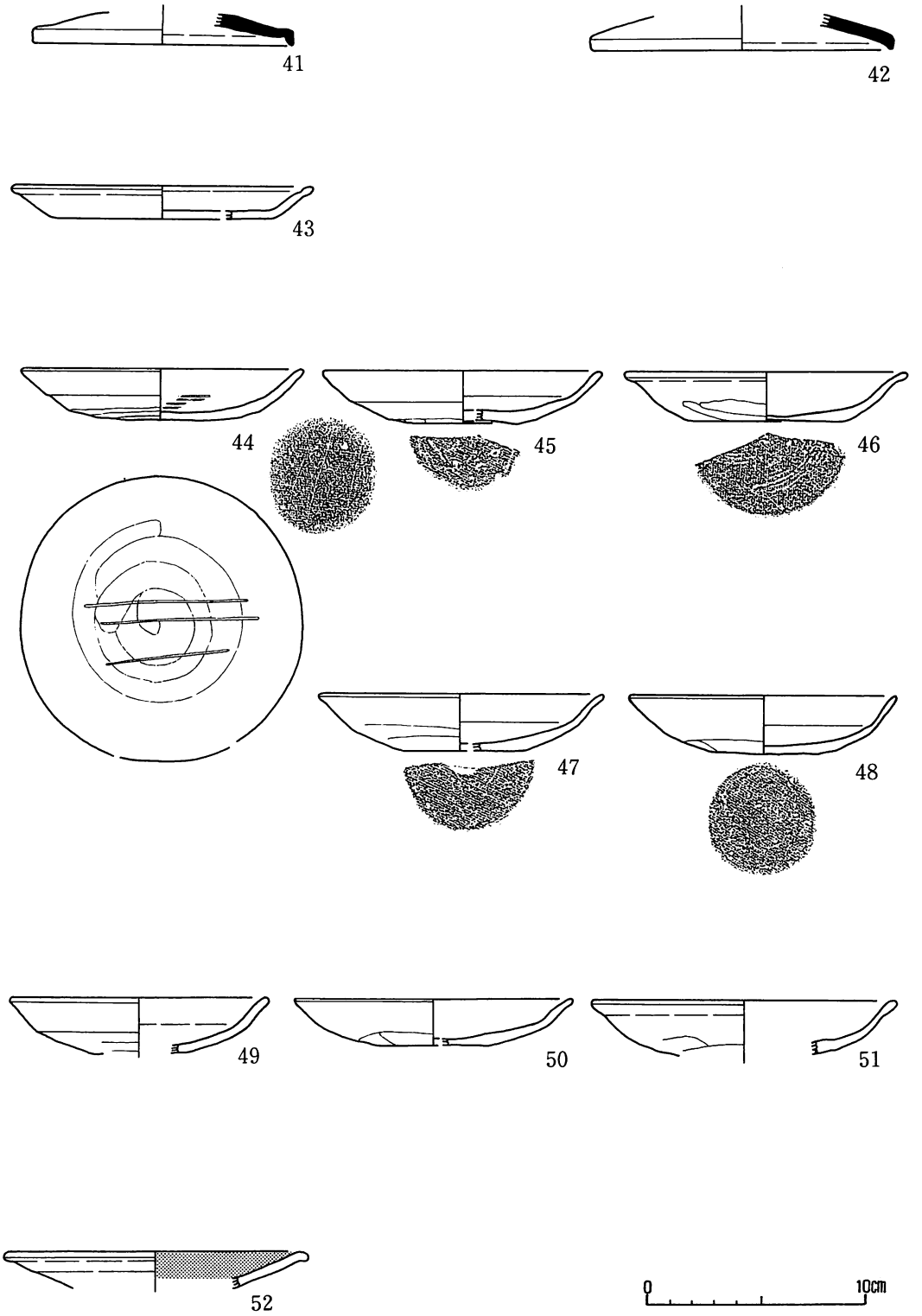
第50図　15号住居址出土遺物(1)



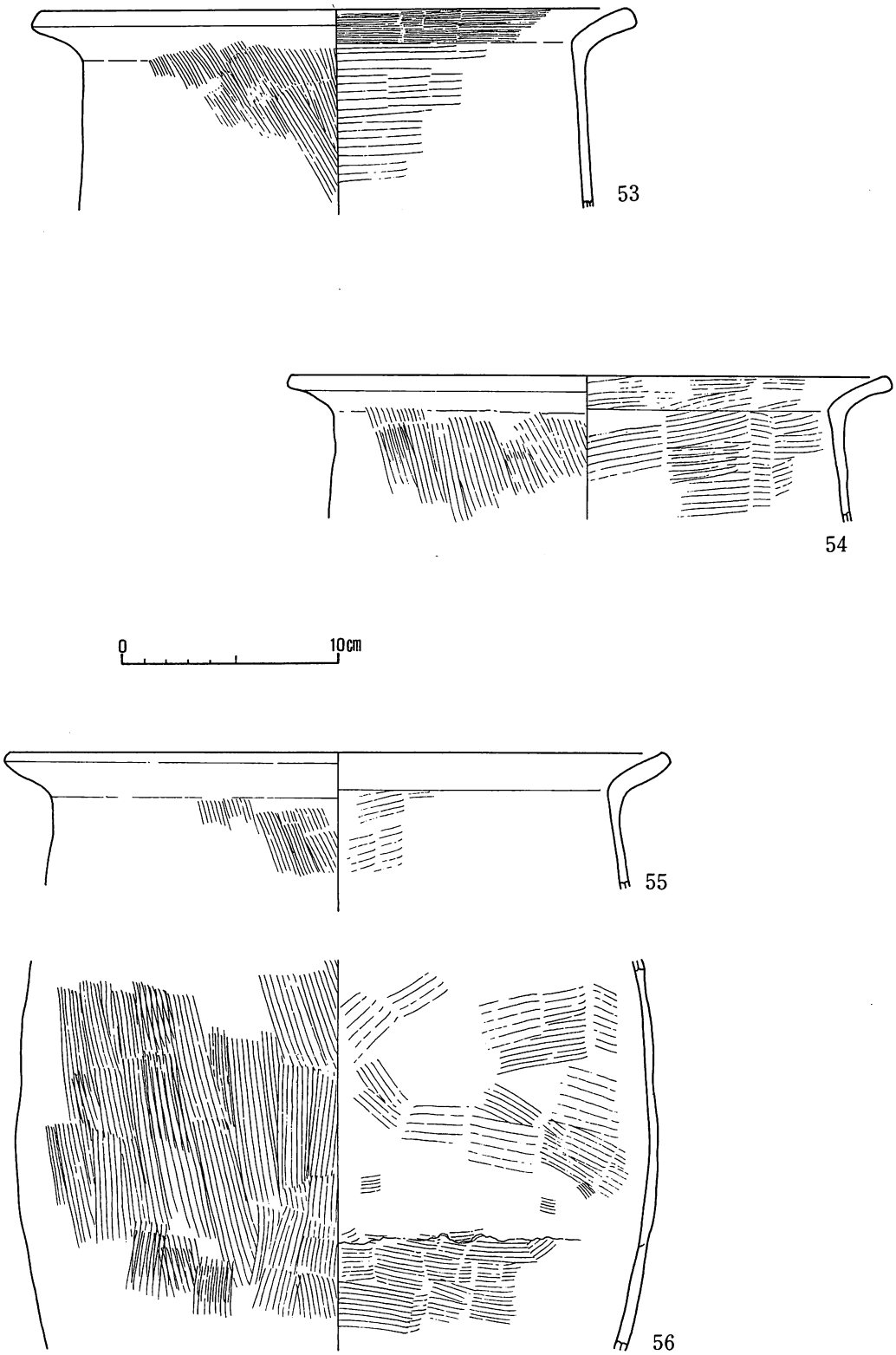
第51図　15号住居址出土遺物(2)



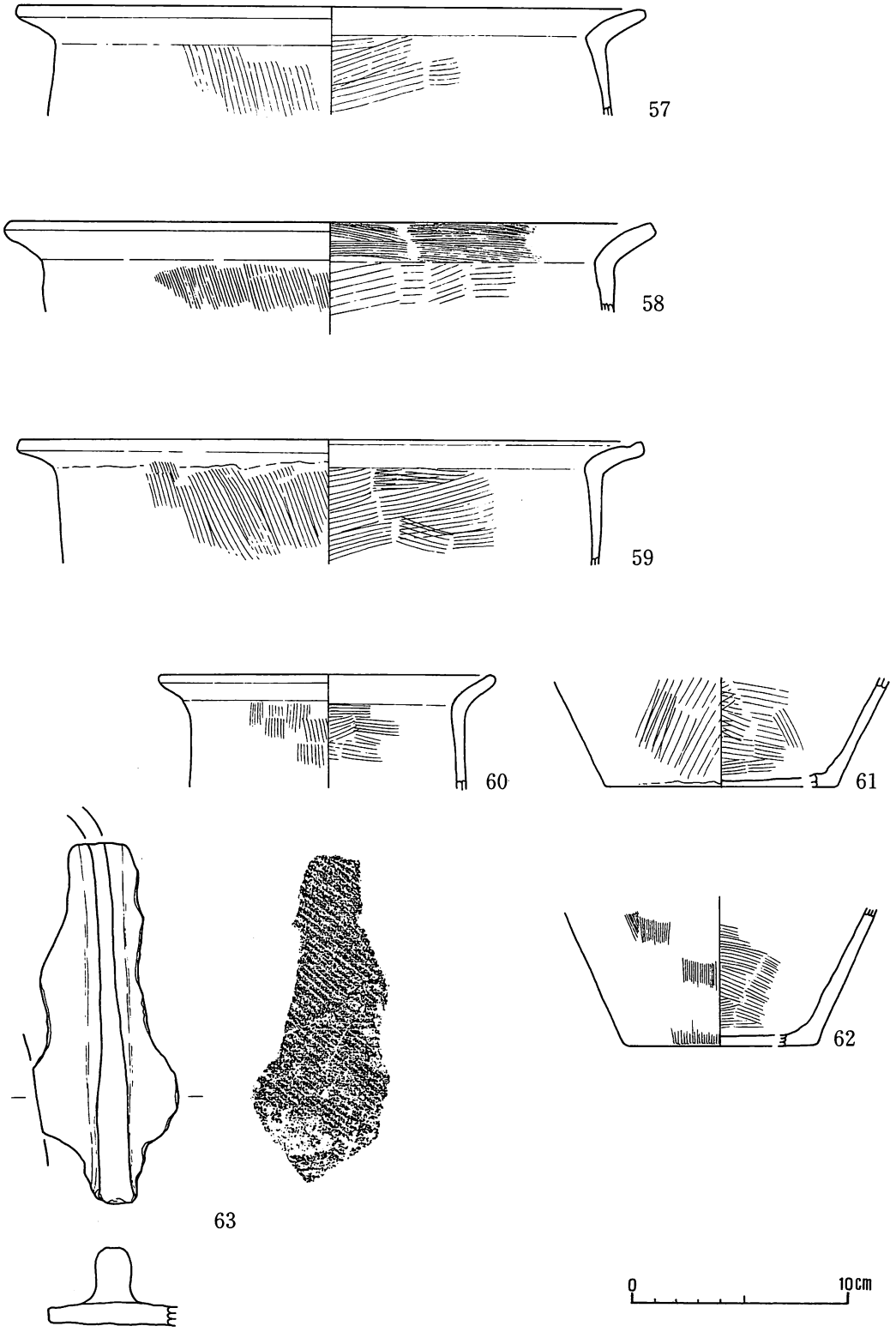
第52図　15号住居址出土遺物(3)



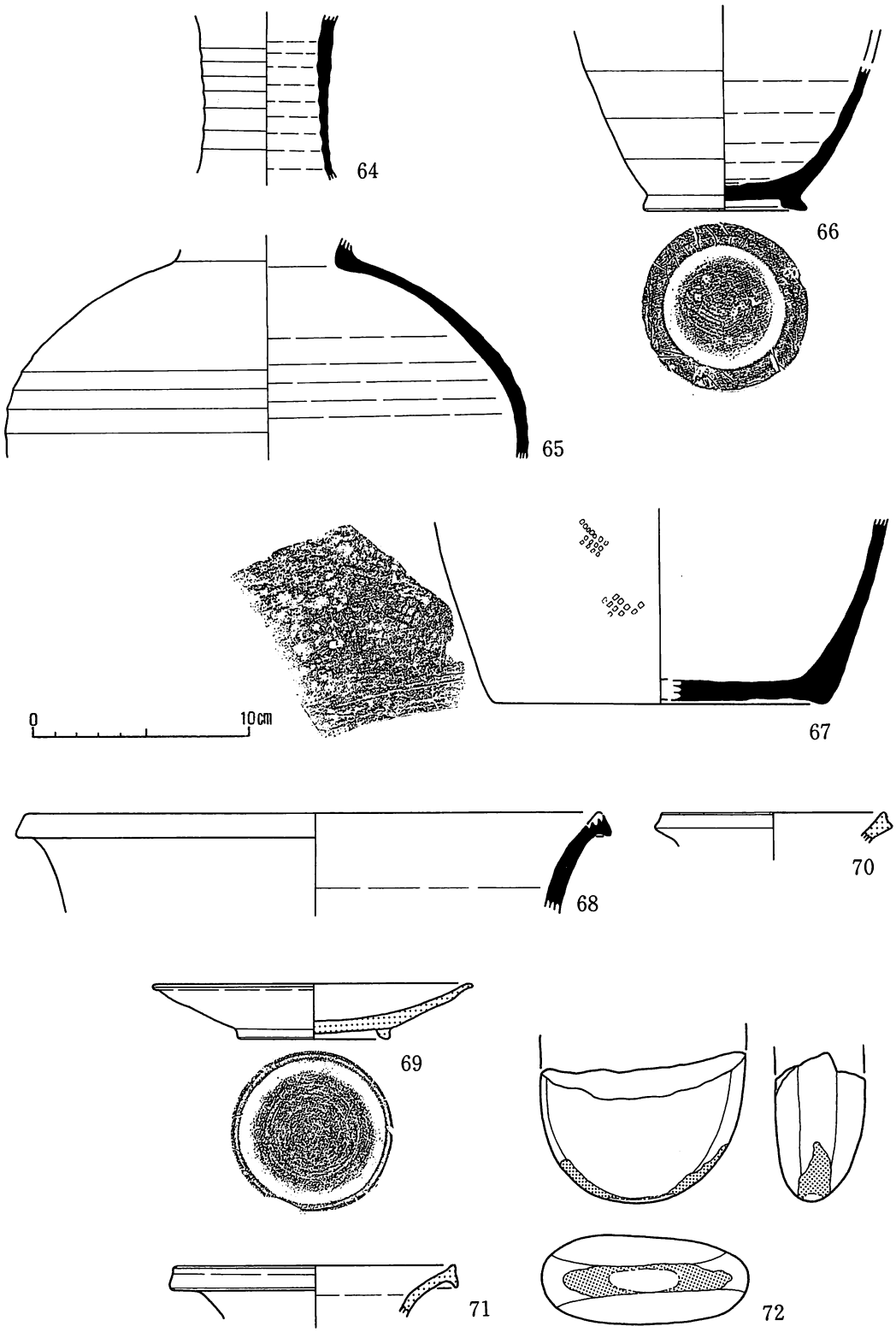
第53図　15号住居址出土遺物(4)



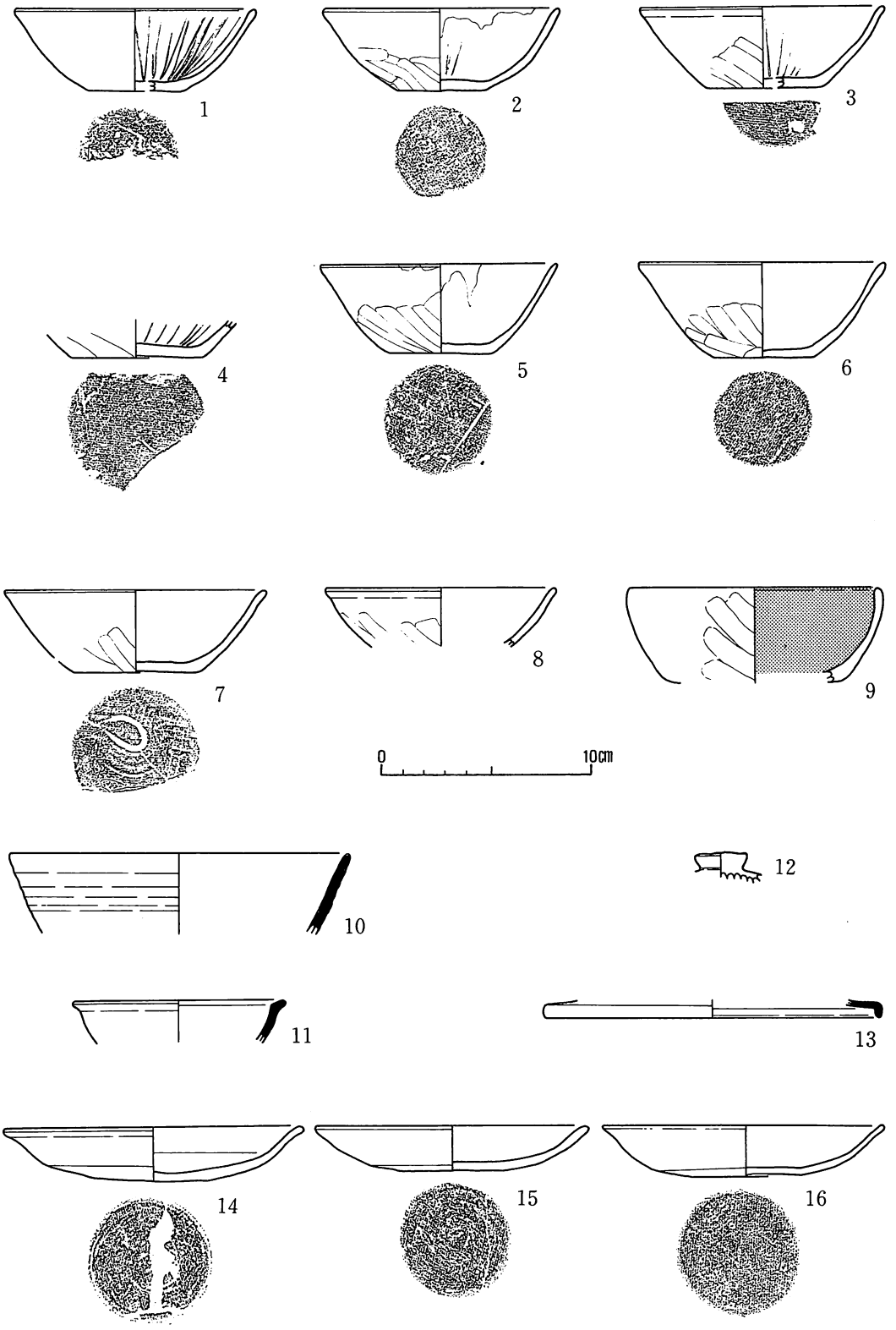
第54図　15号住居址出土遺物(5)



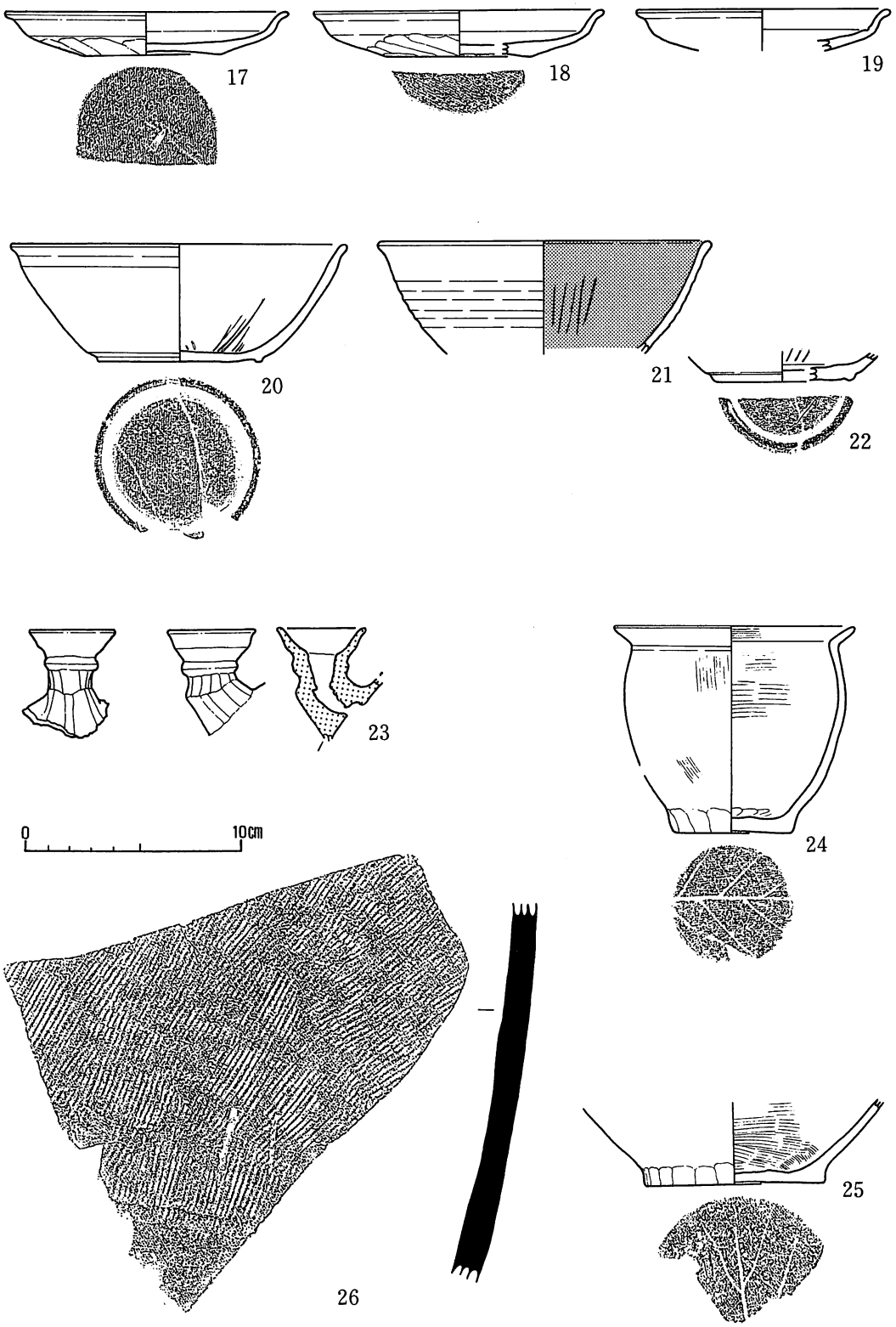
第55図　15号住居址出土遺物(6)



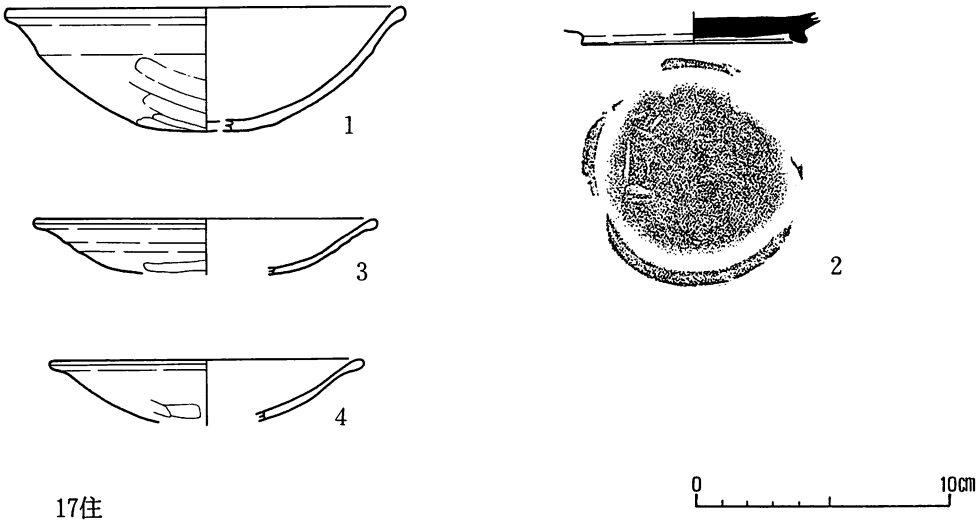
第56図　15号住居址出土遺物(7)

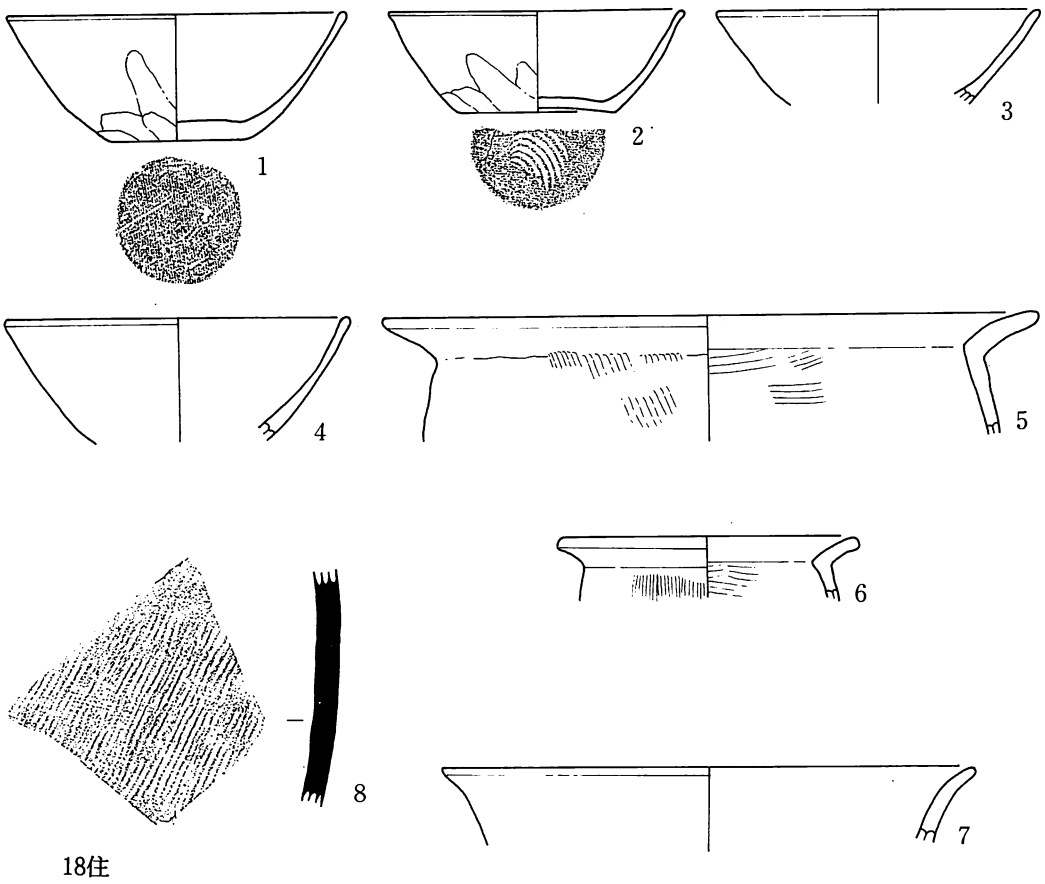


第57図　16号住居址出土遺物(1)



第58図　16号住居址出土遺物(2)



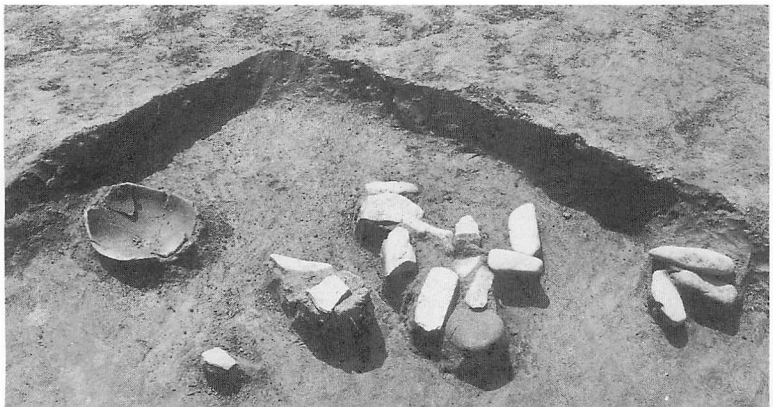


第59図　17号住居址、18号住居址出土遺物

図　　版

◦遺跡全景（上 西側部分、右 東側部分）

◦１号住居址及びカマド



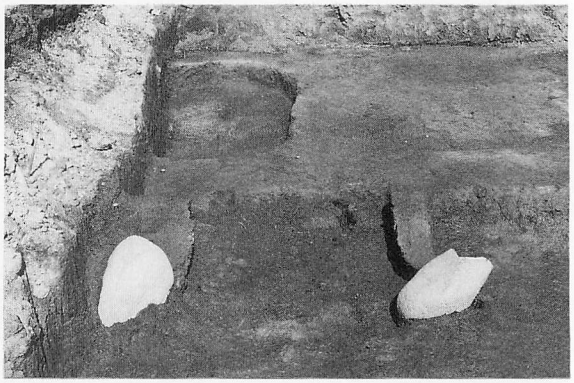
◦１号住居址遺物出土状況

図版 2

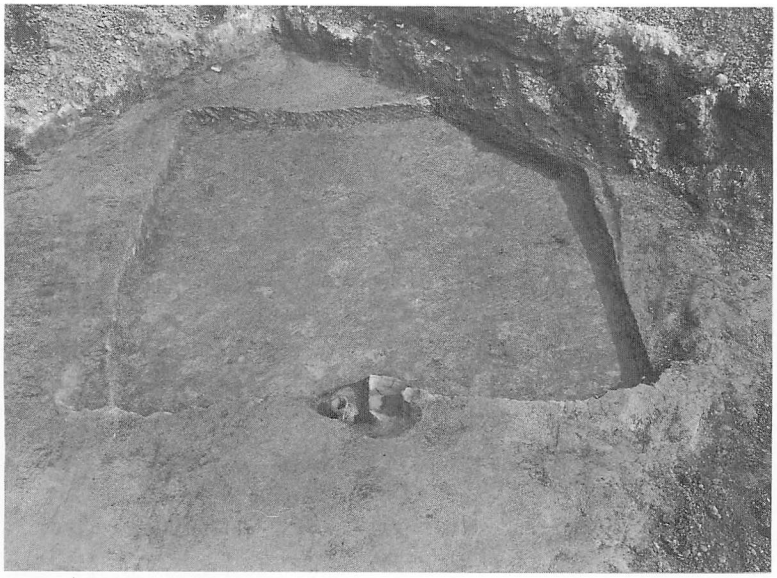
◦ 2 号住居址

◦ 3 号住居址

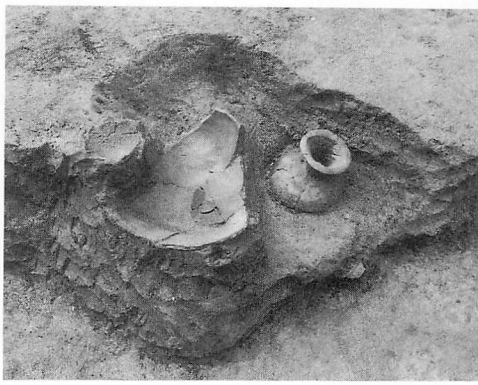
◦ 3 号住居址カマド



◦ 4 号住居址



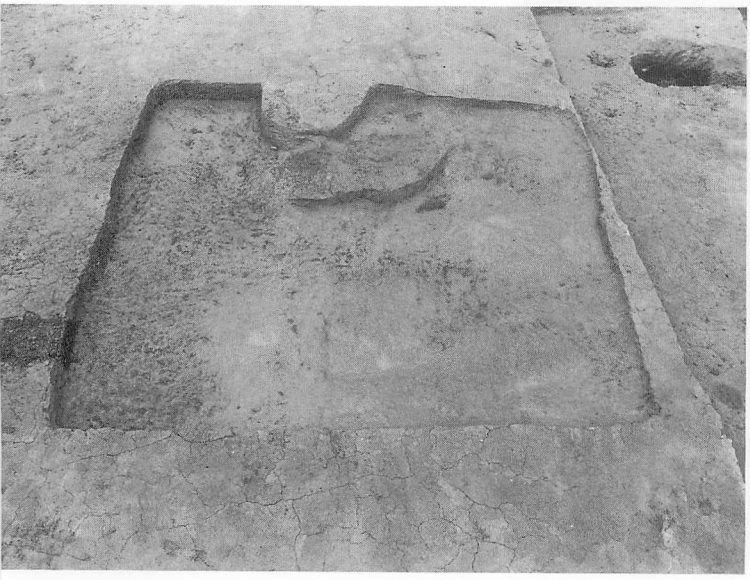
◦ 5 号住居址及びカマド



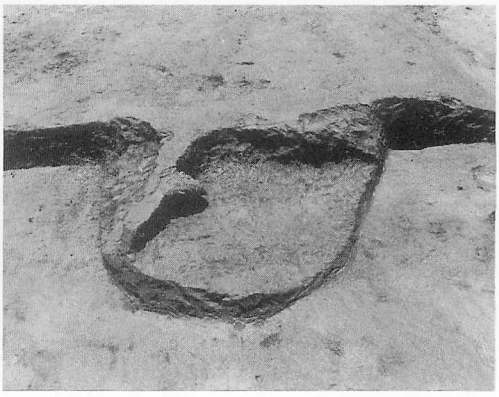
◦ 6 号住居址

◦ 7 号住居址及びカマド

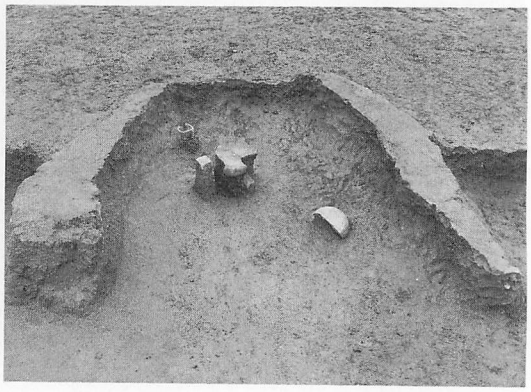
図版 4



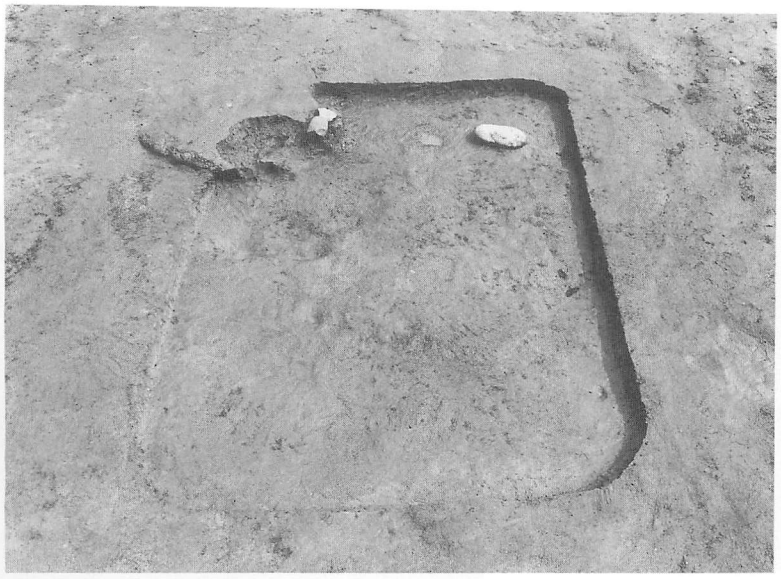
◦ 8 号住居址及びカマド



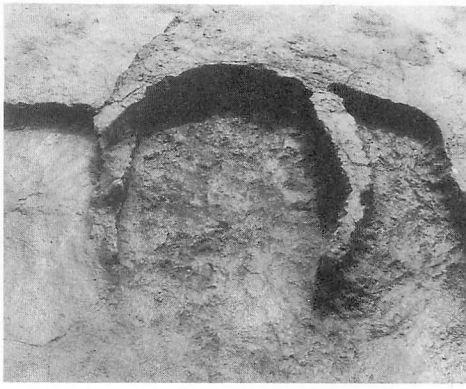
◦ 9 号住居址及びカマド



◦10号住居址及びカマド

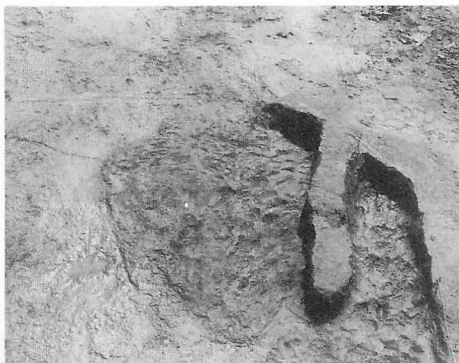


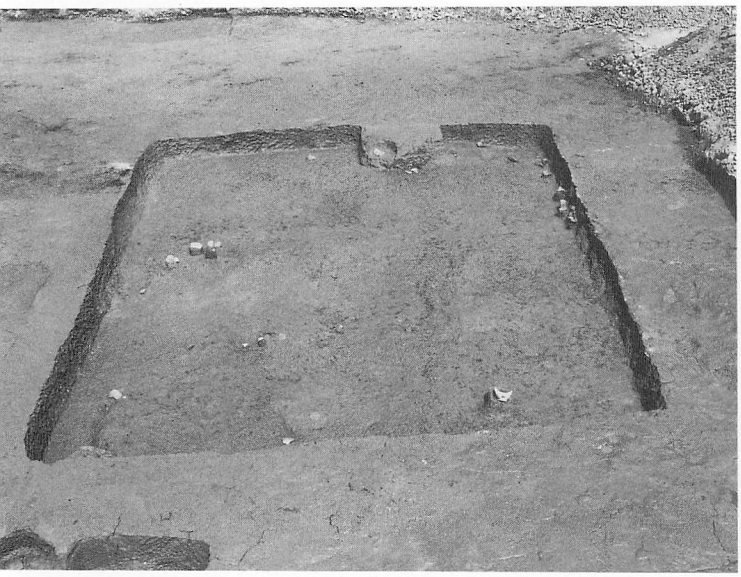
◦12号住居址及びカマド



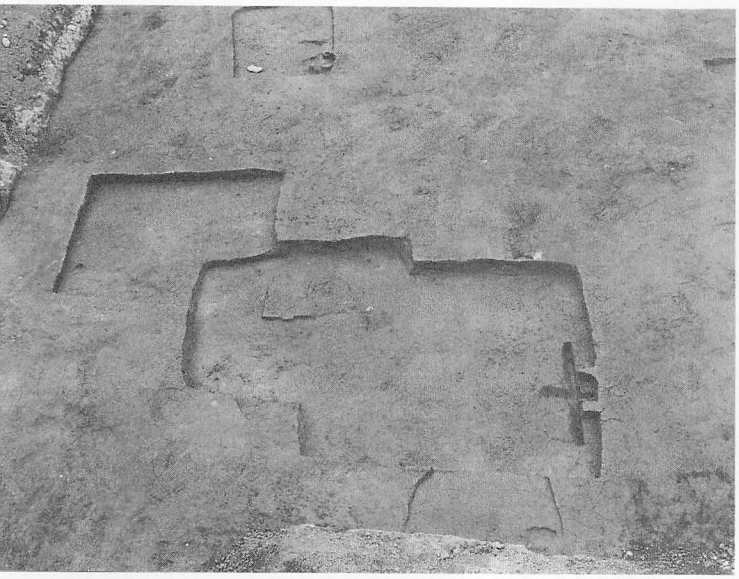
◦13号住居址及びカマド・遺物出土状況

◦14号住居址及びカマド





◦15号住居址及びカマド

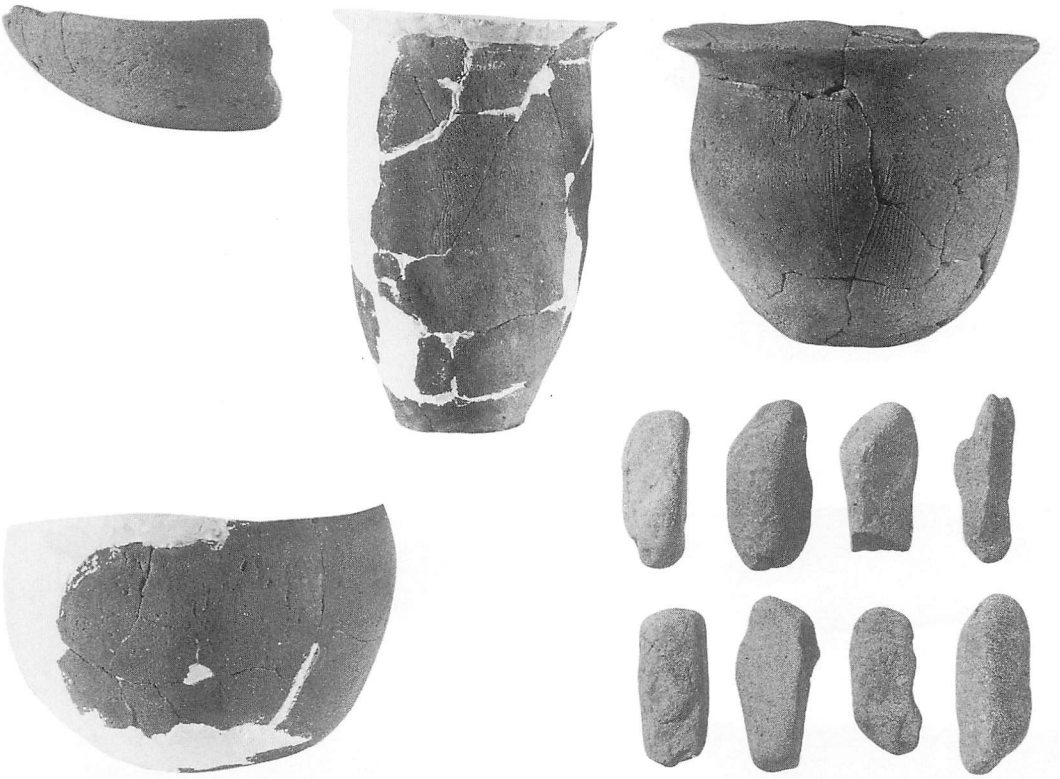


◦16・17・18号住居址

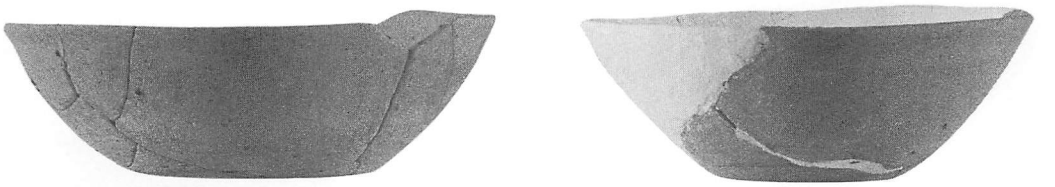
◦16号住居址遺物出土状況

◦ 1 号柱穴列

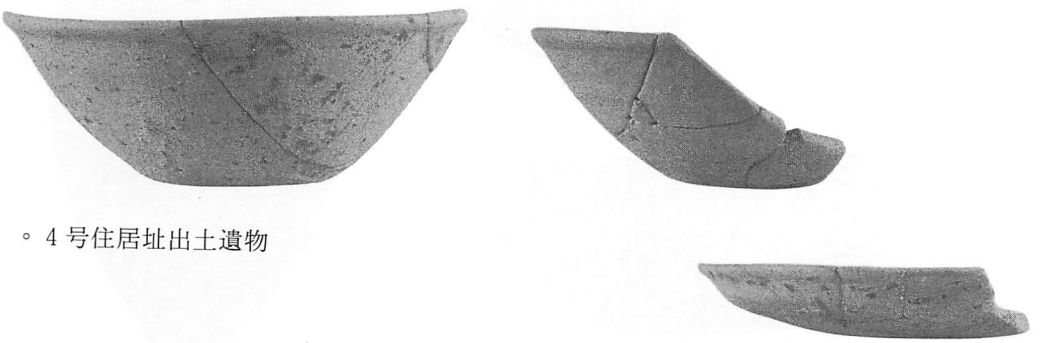
◦ 2 号柱穴列



◦ 1 号住居址出土遺物



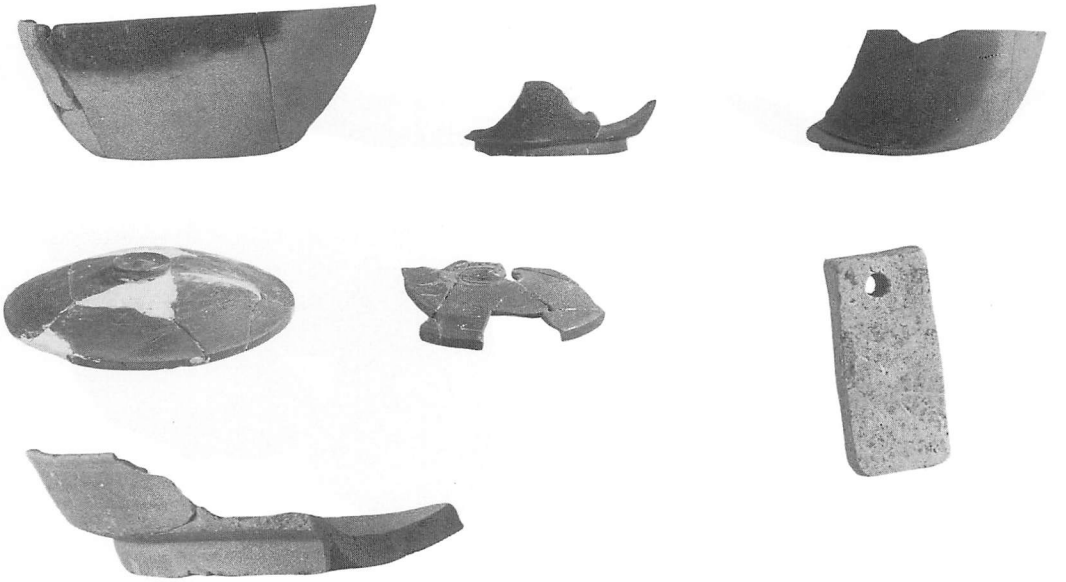
◦ 3 号住居址出土遺物



◦ 4 号住居址出土遺物

◦ 5 号住居址出土遺物

◦ 6 号住居址出土遺物



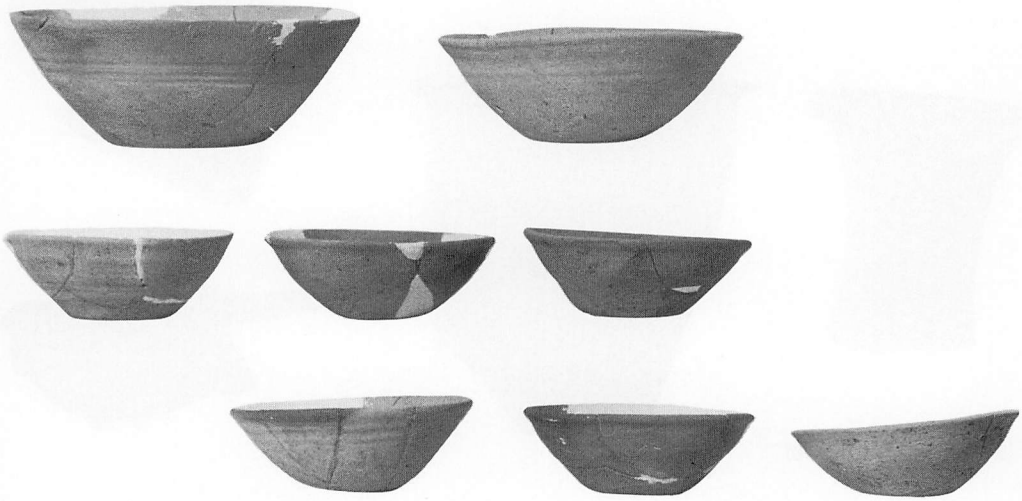
◦ 7 号住居址出土遺物

◦ 8 号住居址出土遺物

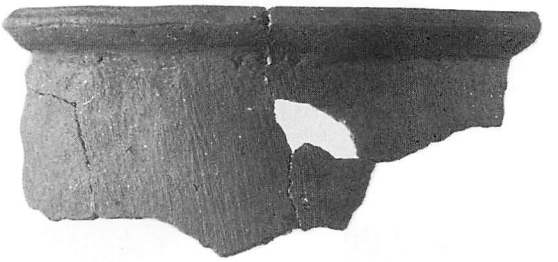
◦ 9 号住居址出土遺物

◦10号住居址出土遺物

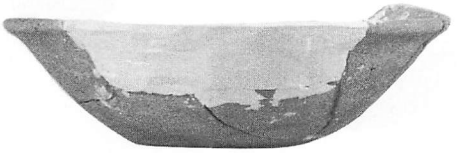
◦12号住居址出土遺物



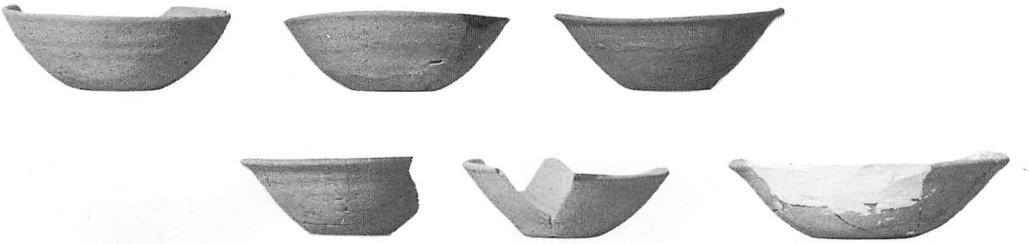
◦13号住居址出土遺物(1)



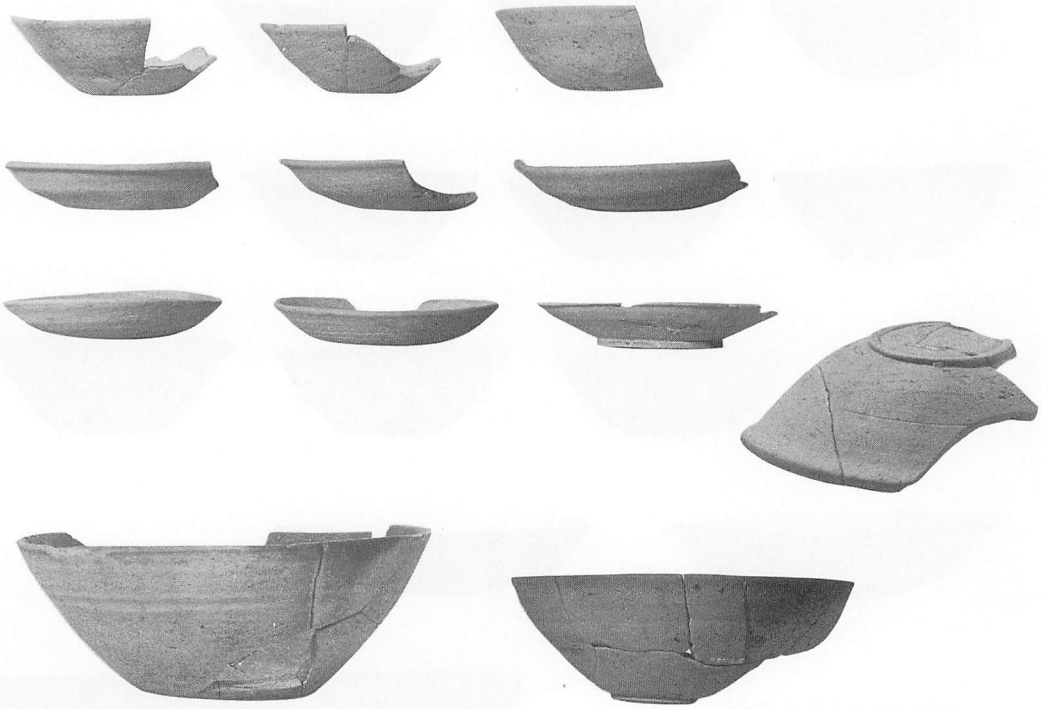
◦13号住居址出土遺物(2)



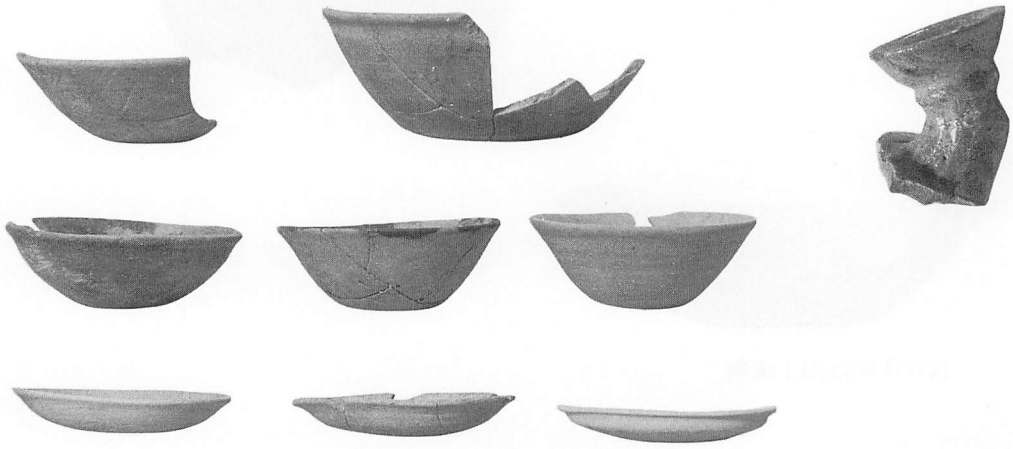
◦14号住居址出土遺物



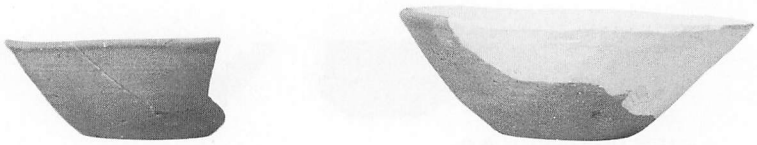
◦15号住居址出土遺物



◦15号住居址出土遺物



◦16号住居址出土遺物



◦18号住居址出土遺物

山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第50集

桜井畑遺跡（B地区）

印刷　平成元年 3月25日
発行　平成元年 3月31日

編集　山梨県埋蔵文化財センター
発行　山梨県教育委員会
印刷　ヨネヤ印刷合資会社